

宮城県芸術年鑑

令和3年度

宮城県

はしがき

文化芸術は、人々に感動や精神的な休息、日々の生活に希望を与えとともに、各々の交流を促し、地域全体に活力をもたらす源でもあります。一昨年から続く新型コロナウイルス感染症の影響により、公演や展示といった多くの文化芸術活動が、様々な制約された環境下での対応を余儀なくされております。このような時にこそ、文化芸術の果たす役割は大変重要なものであり、活動の灯を絶やさぬよう継続していくことの大切さを感じております。

本年鑑は、宮城県の文化芸術活動のより一層の活性化を図るため、一年間の活動内容等の記録をまとめ刊行しているもので、今回で五十一巻目となります。

令和三年度は、県において、昨年に引き続きプロの芸術家が制作した動画作品をWeb上で配信する「トモシビ・プロジェクト」を実施したほか、「みやぎ県民文化創造の祭典」では、「文化芸術活動再開支援事業」により、文化芸術活動の再開・継続を支援しました。また、ワークショップやアウトリーチといった体験型事業を実施し、身近なところで美術や音楽・演劇などに触れる機会を提供しました。

このほか、宮城県美術館では「ランス美術館コレクション 風景画のはじまり コローから印象派へ」や「宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 皇室の名品展」など、東北歴史博物館では「みちのく 武士が愛した絵画」を開催し、多くの皆様に足を運んでいただくことができました。

本年は、県政運営指針である「新・宮城の将来ビジョン」の二年目となります。県といたしましては、県民の皆様がより一層芸術や文化に親しむことができる環境づくりを進め、住んで良かったと思える宮城となるよう様々な施策に取り組んでまいります。

結びに、本書の刊行に当たりまして御執筆いただきました諸先生をはじめ、貴重な写真や資料を提供いただきました関係者の皆様に對しまして、心から感謝申し上げます。

令和四年四月

宮城県知事 村 井 嘉 浩

芸術年鑑

もくじ

各ジャンルの動向

● 総論	古関 良行	7
● 日本画	庄子 幸一	13
● 洋画	大嶋 貴明	21
● 彫刻	日下 育子	32
● 工芸	川北 京子	44
● 書	渋谷 青龍	54
● 写真	清水 有	64
● 文芸	玉田 尊英	76
● 洋楽	小山 和彦	83
● 邦楽・芸能		

宮城県における文化行政の概要	169
広域文化団体の文化活動記録	153
● 古典芸能	89
小塩さとみ	89
● 民俗芸能	92
小塩さとみ	92
● 三曲	96
宮澤 寒山	96
● 長唄	101
杵家弥登鈴	101
● 民謡	104
二代目 藤本 和夫	104
● 演劇	107
鈴嶋 久善	107
● 洋舞	114
高橋 厚子	114
● 日舞	119
大須賀 豊	119
● 茶道	126
児玉 宗睦	126
● 華道	132
西村 一観	132
● メディア芸術	141
清水 建人	141

〈おことわり〉 本文に掲載されている方の敬称は原則として省略しています。

各ジャンルの動向

総論

【総論】

新型コロナウイルスの感染が収束を見せないまま、前年に引き続きイベントや催し、展示会や演奏会などの文化活動が制限されるケースが多かった。東北最大の美術の公募展である河北美術展は二年続けて中止を余儀なくされた。野外での定禅寺ストリートジャズフェスティバルも実施されなかった。どんよりとした雲に覆われたまま、文化活動の在り方を模索し続けた一年だった。

それでも、晴れ間はあった。コロナ感染拡大が落ち着いた時期もあり、感染防止策を徹底した上で、美術館や博物館の企画展、ギャラリーでの個展、演奏会や演劇などの舞台が少しずつ戻ってきた年でもあった。発表の場を取り戻した作家たちが活動を始め、コロナ禍で抑制されてきた創作の花を咲かせた。

休館や入館制限を余儀なくされた美術館や博物館、図書館などは、新たな運営体制の構築が求められよう。新型コロナウイルスへの応急的な処置から中長期的な展望を見据える時期になっている。県民の文化的な豊かさにとどるに、どれほど貢献

しているのか。定性的な評価とともに、「公共財」という意識を県民と共有しながら、それを支える地域のネットワークなど相互支援の仕組みが必要だろう。

東日本大震災から十年という節目が過ぎた。美術や映像、文芸などの分野で震災のさまざまな問題を取り込む作家が増えていく。仙台生まれ、ドイツ在住の石沢麻依さんが、震災の記憶を題材にした小説「貝に続く場所にて」で芥川賞を受賞したのは象徴的だった。震災後、人々が抱え込む目に見えにくい課題や問題について、美術や文芸で可視化する。そうした活動は今後、震災の継承も含め、大きな意味を持つことになるに違いない。

国際的な緊張が高まっている。そうした中で、芸術活動を通じて日本と韓国の友好を深める「2021年日韓美術交流展 in Sendai TRUST」が仙台で開催されたのは心に残った。駐仙台韓国領事館と実行委員会が主催し、両国の画家や書家、陶芸家らが平和への思いを込めた作品を出品した。民間でのこうした交流が、相互理解につながることに期待したい。

【美術】

新型コロナウイルスの影響が続くとはいえ、ウイズコロナの社会を模索しながらの活動が出てきた。長引く「冬の時代」にため込んできた創作意欲があふれ出し、多彩で力強い作品を展開するなどした。

換気、消毒など感染対策を取りながら再開した仙台市内のギャラリーでは、対面形式ならではの作品の質感を伝えた。一方で、オンラインでの表現も浸透し、「東北イラストレーターズクラブ」は九月、恒例のグループ展をホームページで実施。「世界の観光地」をテーマに展示し、動画での解説も試みた。

仙台市内で九月下旬から十月にあった無鑑査の公募展「せんだい21 アンデパンダン展」は十回目の節目となった。過去最多の二百二十七点が集まり、コロナ禍や東日本大震災を意識した意欲作が並んだ。石巻市の牡鹿半島などを舞台とした現代アートと音楽、食の総合祭「リボンアート・フェスティバル」の夏会期には約十万人が来場。地元若手アーティストが旺盛な表現活動を見せ、文化芸術イベントの新しい在り方を提案した。

十一月には、震災で被災した石巻文化センター（石巻市）の後継施設として、石巻市博物館が開館した。企画展「文化財レスキュー 救出された美術作品の現在」では、津波で被

災し、宮城県美術館（仙台市青葉区）や全国の美術館で修復された絵画、彫刻などを展示。破損や傷が残る作品は「震災資料」としての一面もあり、美術館、博物館の防災や被災作品の継承の在り方を投げかけた。

宮城県美術館は特別展として、四〇六月に「足立美術館 展 横山大観、竹内栖鳳、華やかなる名品たち」を開催。九〇十一月に「ランス美術館コレクション 風景画のはじまり コロから印象派へ」を開いた。コロナ禍で外出制限が続く中、国内外の一流美術館が誇る逸品が注目を集めた。

夏期は、東北歴史博物館（多賀城市）で「ジュラシック大恐竜展」、仙台市博物館で「ライデン国立古代博物館所蔵 古代エジプト展」もあり、家族連れでにぎわった。県美術館は設立四十年を迎え、市民団体「宮城県美術館の現地存続を求める県民ネットワーク」は企画展で往時のポスターや写真を紹介した。せんだいメディアアテーク（同）も開館二十年を数えた。公営施設として、コロナ下で多様化する表現に対応する柔軟な運営が求められた。

【音楽】

音楽の分野は前年と同様、新型コロナウイルスに翻弄された。中止や延期を余儀なくされた大規模イベントやコンサートは少なくなかったが、クラシックの器楽演奏会などでは会

場定員いっぱい観客を入れるケースもあった。明るい日差しが少しずつ、感じ取れる一年でもあった。

「楽都」恒例の仙台オペラ協会定期公演（九月）や仙台クラシックフェスティバル（せんくら、十月）などが二年ぶりに開かれ、待ちわびていたファンに熱く迎えられた。

第四十五回の記念公演だったオペラ協会の出し物はモーツアルトの歌劇「魔笛」で、印象的なメロデーに満ちた作品は晴れやかな雰囲気醸し出した。

せんくらではクラシックを中心に広いジャンルから著名音楽家が多数出演。本県出身の郷古廉さん（バイオリン）、大江馨さん（同）、及川浩治さん（ピアノ）、津田裕也さん（同）らも登場し、祝祭気分を盛り上げた。

ピアノストの小山実稚恵さん（仙台市出身）が企画する「こどもの夢ひろば『ボレロ』」（十一月）も、会場でのイベントを再開。東日本震災からの、若い世代の心の復興を応援した。

ただ、とっておきの音楽祭（六月）や定禅寺ストリートジャズフェスティバル（九月）などは感染拡大時期に重なってしまい、前年に引き続いて屋外イベントが取りやめられた。街のにぎわい創出に貢献してきただけに、市民の落胆ぶりは大きかった。

仙台フィルハーモニー管弦楽団は令和三年度も九回の定期

演奏会を中心に意欲的なプログラムを展開した。常任の飯守泰次郎さんによるブラームスの交響曲シリーズ、同団指揮者の角田鋼亮さんと独奏の吉野直子さんによるヒグドン「ハーブ協奏曲」国内初演などが印象に残る。特別演奏会ではベートーベン「交響曲第九番」が、同団レジデント・コンダクター高関健さんにより二年ぶりに披露された。コロナ感染防止策も兼ねて、合唱団をオーケストラの前方に配置する、作曲当時の形で演奏された。

山形交響楽団との合同演奏会は、震災十年の節目に開館した石巻市複合文化施設を会場に十一月に開いた。桂冠指揮者のパスカル・ベロさんのタクトで、マスネやラベルなどフランスの管弦楽曲を披露。令和四年三月にも山形市で、別プログラム公演（飯森範親さん指揮）が開かれた。

学生オーケストラとして全国有数の実績を誇る東北大交響楽団が、創立百周年を迎えた。九月に仙台市で記念式典、十二月には記念特別演奏会を開き、一世紀にわたって東北の音楽文化を切り開いてきた歩みを祝った。

仙台市は新たな音楽ホールの建設地を、市地下鉄東西線国際センター駅北側「せんだい青葉山交流広場」（青葉区）と決めた。郡和子市長が令和四年一月に正式表明、震災の中心部メモリアル拠点との複合施設とする予定だ。

宮城県合唱連盟理事長などを務め、作曲家、合唱指導者、

教育者として音楽界の発展に貢献した今井邦男さんが十一月に亡くなった。七十九歳だった。

【文芸】

東日本大震災から十年が経つ頃には、被災地の内側から確かな震災の文学が立ち上がっているのではないか。そんな予想と願望をかつて持ったが、それをかなえるかのように、宮城文学に全国的な注目が集まる一年だった。

仙台市生まれ、ドイツ在住の石沢麻依さんの「貝に続く場所にて」が、第六十四回群像新人文学賞に続いて第六十五回芥川賞に決まった。同賞の宮城県出身者は一九九一年「自動起床装置」の辺見庸さん以来二人目で、地元文壇に待望久しいニュースをもたらした。「復興五輪」の題目を掲げた東京五輪の年に、震災記憶の忘却とゆがみにあらがおうとする揺るぎない意志で書かれた静かな鎮魂の物語。県の特別表彰と仙台市の「賛辞の楯」も贈られた。

仙台市在住の新潮新人賞作家、佐藤厚志さんの「象の皮膚」は本人にとって初の単行本で、第三十四回三島由紀夫賞候補にもなった。重度のアトピー性皮膚炎と迷惑客に悩まされる非正規雇用の女性書店員が主人公。震災当時の書店の混乱を克明に再現し、猛烈な肌の痒みの描写とともに強い印象を残した。

第四回仙台短編文学賞の選考委員で作家・クリエイター、いとうせいこうさんが選んだ大賞は、宮城県女川町出身で津波をじかに経験した森川樹さんの「海、とても」。森川さんは兵庫県西宮市在住。阪神大震災の記憶が息づく土地に暮らし、震災表現を巡る十年間の葛藤と迷いを希望の物語に昇華させた。

農民文学会が主催する第六十四回農民文学賞に仙台市の高橋道子さんの「村を囲う」が決まった。都市近郊の農村に重く横たわるイノシシ被害の問題をリアルに紡ぎだした。

小中学生の詩を対象とする仙台市と仙台文学館主催の第六十二回晩翠わかば賞には、石巻市雄勝小学校二年生大和恵信君の「りょうしの子ども」、晩翠あおば賞には岩沼市岩沼中学校三年生佐藤雛さんの「十五年」が選ばれた。

東北ゆかりの児童文学作家有志による実行委員会主催の第一回みちのく童話賞の大賞は、名取市の主婦、みどりネコさんの「まほうの天ぷら」が受賞した。

詩誌「ココア共和国」は、昨年創設した詩の公募賞である秋吉久美子賞といがらしみきお賞の第一回受賞者、県詩人会から引き継いだYS賞の第六回受賞者をそれぞれ選出した。新型コロナウイルス禍の収束は見通せないが、三密を避けてどんな世界にも羽ばたけるのが読書。熊谷達也さん「無刑人」、渡辺優さん「アヤとあや」、伊坂幸太郎さん「ペッパ-

ズ・ゴースト」、三沢陽一さん「なぜ、そのウイスキーが死を招いたのか」、佐伯一麦さん「アスベストス」など。県在住作家は今年も精力的に新作を発表した。

仙台市青葉区のシユンク堂書店仙台TR店が閉店した。ネット書店と電子書籍の普及にコロナ禍と、県内有数の大型書店にとって厳しい経営環境が続いていた。地元作家の作品をはじめ、専門書や外国文学も含めた圧巻の品ぞろえで、書き手と読み手双方の支持が厚かっただけに撤退が惜しまれる。宮城の文芸振興を陰で支えた存在でもあった。

【演劇】

東日本大震災十年に合わせ、震災をテーマにした芝居が集中的に上演された。劇都仙台の大黒柱だった故石川裕人さんの遺作「方丈の海」が一〇三月、仙台で再演されたのが象徴的だった。震災十年後の近未来という設定で、二〇一二年に初演された作品。石川さんの妻で俳優の絵永けいさんをはじめ、在仙の演劇人が結集し舞台化を実現。仙台演劇界の震災十年の軌跡を物語った。

福島市の劇団「シア・トリエ」は一月、東京電力福島第一原発事故に対する福島県民の困惑を描いた「キル兄にやとU子さん」を上演した。津波の悲劇を真つ正面から描いた石巻市の劇団「うたたね（ドット）」の「咆哮 私たちはもう泣

かない」は、仙台で二月に上演された。二〇一九年に石巻で初演された話題作で、仙台でも反響を呼んだ。仙台劇のまち戯曲賞の大賞受賞作家、柴幸男さんの作・演出で震災十年の時間のありようを扱った「てんとせん」も十二月にあった。

これらの公演は、震災をテーマにした作品を発信する仙台舞台芸術フォーラム（仙台市と市民文化事業団の主催）の一環だった。震災十年の記念事業が大きな後押しになったが、十年を過ぎた今後の舞台表現の行方は大きな課題として残る。

仙台の劇団「仙台シアターラボ」が「シア・トリエ」と協働して震災後の仙台と福島を描くプロジェクトの公演が十月にあり、第五弾の今作で締めくくった。俳優の井伏銀太郎さんが主導する「Whiteプロジェクト」も震災を題材にした短編劇の公演を精力的に開催した。

新型コロナウイルスで昨年は休止した「いしのまき演劇祭」は十一月、二年ぶりに再開した。地元石巻の劇団「スイミーはまだ旅の途中」が同名の作品を上演した。レオ・レオニの絵本「スイミー」と震災をモチーフにした作品。二〇一四年に初演され、出演者が劇団を結成したシンボリックな舞台だ。震災以後、関係者の努力で根付いてきた石巻の新しい演劇文化を体現した。石巻で演劇を中心に文化イベントを企画する「Tie Tone（タイ・トーン）」は、移民差別をテーマ

にした「赤鬼」（野田秀樹さん作）を上演した。本格派現代劇の公演は石巻の演劇の広がり的印象づけた。

【宮城県芸術祭賞・芸術選奨】

第五十八回宮城県芸術祭（県芸術協会、県、仙台市、河北新報社など主催）の最高賞・県芸術祭賞は、絵画の日本画は中邨圭子さんの「或る日の庭」、洋画は大坂祥春さんの「SEA SIDE PARK」、工芸は松本幸恵さんの「六花の朝」、彫刻は清水直土さんの「ハグしかねえ」、書道は岸本清舟さんの「ほととぎす」、文芸は野田青玲子さんの「時は流れる」（俳句）、写真は伊藤トオルさんの「Artists of Miyagi」がそれぞれ受賞した。

令和三年度の県芸術選奨は、美術が洋画の安彦文平さん、工芸の村山耕二さん、書の太田蓮紅さん、写真の福島隆嗣さん。演劇が劇団どんちようの会がそれぞれ選ばれた。新人賞は、美術が彫刻の菊池聡太郎さん、文芸は浅川芳直さん、音楽は會田瑞樹さん、舞踊は刈谷円香さん、メディア芸術は我妻和樹さんが受賞した。

古 関 良 行

（前河北新報社生活文化部長）

日本画

長引くコロナ禍にあつて後半は多少なりとも収束への明るい兆しが報じられた。また、東日本大震災から十年、節目の年でもあつた。天災だからと諦めるしかないのだが、なんともやるせない。まだまだ終息は先という中で例年通り個展、団体展と「展覧会」は開かれた。本年度も宮城県芸術協会芸術祭絵画展の会期は一週間から、コロナ感染予防のため四日に短縮されたが、それでも集客数はこれまでとさほど変わらなないと聞き、これは観者にとつて絵画鑑賞の異空間への誘い、長引くコロナ禍にしびれを切らしている現況にあつて、数少ない会場提供となり、平穏な日常生活への回帰願望が一緒になつて足が向いたのではないかと。逆に主催者側は綱渡り状態で「万が一」がつきまとう高リスク。無事終えれば「安堵感」でいっぱいだったに違いない。零石理事長の「どんな状況下にあつても芸協の活動の歩みを止めてはならない」の強い意志と決断の現れともなつた。今回の開催を通して作者と観者の「展覧会」に対する想いは止みがたく、この両者の関係が芸術・文化を育む土台となり、更には必要欠くべからざるものに繋がっていく。禍中にあつても日本の「芸術の

秋」は健在なのだ。そんな中「微動」だが、元々力のある作家が、展覧会への「出品」を重ね、めきめき頭角を現している。自作を世に問う「発表」は自分探しであり研鑽の場でもある。喜ばしい事である。ただ、このように書く私は、制約の多い中とはいえ多くの展覧会を観ることが出来なかつた事を、この拙文と共に、まずはお許し願いたい。

「第八十三回河北美術展」中止

二年続けての中止。コロナに対する過剰反応だったので。いづれにせよ苦渋の決断だったに違いない。県展を持たない本県にとつて「河北展」は出品者にとつて、甲子園を指す高校球児のように特別な存在である。自作が記事として掲載されれば励みに、審査員による講評は貴重なアドバイスとなる。それだけに期待は大きい。観者にとつても大規模展覧会が身近に見られる絶好の機会でファンも多い。ただ、これらのニーズに応えるべく大型展示場がないのが残念だ。一部で開設の声も聞かれるようにはなつたが。。「経済熟して文化栄える」のが理想だが、期はまだまだ熟してはいない。

このまま経済、効率最優先で突き進むのであれば芸術・文化は育たない。行く先々を考え、将来を見越しての対応は「先見の明」として後世に残ることは必至だ。

〔第五十八回宮城県芸術祭絵画展〕公募の部（十月二日、十月五日） せんだいメディアアテーク 六階ギャラリー）

出品点数八十二点中「日本画」は四点。その中の一点は和紙に墨、アクリルの混合技法。洋画が圧倒的に多い（水彩も含まれるので）。もはや洋画も日本画もない日本人が描けば日本画の時代にあつて、はたして「日本画とはなんぞや」の問いが再び去来する。作者本人がこれは日本画ですと応えればそれは「日本画」。このような「日本画」を嫌い使用した材料のみを記す作家も近年多い。現在は麻紙に岩絵の具、箔等を用いたものを日本画と呼ぶのが一般的である。また「日本画」は「こう描かなければ」ならないという法則はなにもない。あるのは日本人特有の感覚と岩絵の具の発色、箔の効果的な使い方など素材を最大限に生かすことだけである。しかし、これもこだわり過ぎると、当初の発想からかけ離れた技法だけの作になってしまう。「表現と素材」の選択は難しい。洋画と同一会場に並べられた日本画がなぜか今も「弱く」見えてしまうのはなぜか…。等々、勉強になる内容であった。

宮城県芸術協会賞「晒シモノ」（洋画）蜂谷幾凜 高校在籍（三

年生）この、若くて鋭い感性。私達は大切に見守りたい。

〔第五十八回宮城県芸術祭絵画展〕会員の部（特別展示・兵庫県洋画団体協議会との交流展）（十月九日～十月十二日 仙台メディアアテーク五階・六階）

「ゆとりある壁面」と言えば好ましいことではあるが、その会場からは、あ的一步踏み入れたときに感じる独特な熟気のようなものがあまり感じられなかつた。応募点数の少なさからの「ゆとり」は一考を要す。宮城県芸術祭賞「或る日の庭」中邨圭子 宮城県知事賞「ぼたん」佐々木智朗 仙台市長賞「糸偏」土屋 薫 宮城県教育委員会教育長特別賞「収穫の時」千葉えつ子 河北新報社賞「秋滝」深村宝丘（公財）仙台市市民文化事業団賞「孤鶴」山本政彰（公財）カメイ社会教育振興財団賞「三月の鯉のぼり」小泉百合子 賞候補「そよぐ」熊谷真由美 賞候補「樹」佐藤松子 「或る日の庭」は繊細かつ丁寧。緻密な描写が目を引いた。「ぼたん」はオーソドックスなモチーフだが当初の感動を見失わずまとめ上げた。静と動の対比、蝶が心憎い。二人とも力のある常連。「三月の鯉のぼり」は、あの日あのときを想い出さずにはいられない。人物の胸に添えた手の角度と同じ角度で祈りが乗り移ったかのように鯉のぼりが泳ぐ背景。上手い。「孤鶴」は古色を帯びたような色使いから独特な雰囲気醸し出して

る。緻密な描写力は目を見張る。得意とする「ぼかし」はお見事。二人とも一作ごとに腕を上げており次作の発表が楽しみだ。阪神淡路大震災から二十六年、東日本大震災から十年の節目に当たり兵庫県洋画団体協議会からの作品を交流展として展示。烏頭尾寧朗代表の「時の忘れもの―夢の奇跡―をはじめ七点の秀作が並んだ。

「大泉佐代子 日本画展」(十月二十六日〜十月三十一日 晩翠画廊)

在仙のベテラン作家で実力派の一人。今回は院展出品作を除けば比較的小品が多かった。販売を意識し過ぎたのか、整った美しい日本画が並んだ。「日々の生活の中、四季折々での小さな出会いや発見とその感動を感じながら描く喜びを歩み続けています」と語っている。出会、発見そして感動でモチーフが決まる。何よりも創作の根幹でありすべてがここから始まる。そして受けた感動は完成まで持ち続けなければならぬ。これら作者の意図が観者に伝われば共感となるが、しかしそう簡単には行かない。苦慮し、悩むことになるのが常。時には独りよがりにも陥ることもある。だれもが目にしたことのあるものを複眼的に捉え自分にしか描けない方法で：言うは易しである。つくづく俳人や歌人の着目、発想力はすごいと思う。ある日本画の大家が客人から頂いた土産の和菓子

その都度描き溜めたスケッチブックを観た事がある。美しさに対する眼差しの広さと温もり。その洒脱さに、しばし魅入ったのを想い出す。

「第七十四回塩竈市美術展」(十一月九日〜十一月十四日 ふれあいエスブ塩竈)

日本画の部には十三点が並んだ。招待は三点。募集要項には「十号以上八十号以内」とあるので必ずしも「無理に大作の出品を：」とは思わないが、展示会場の壁面スペースを考慮した「大きさの決定」も大切ではないかと思う。(私は五十号から上を大作とと思っている)また、公募Ⅱコンクールと考えれば、審査員の目にも小より大に傾くと思うからである。点数に関しても同様である。ただ、付け加えたいことは将来置き場所に困るような大きさであっても困るので、そこが難しい。伝統はあっても「落選」のないのが本展。今後出品者の増えることを願って止まない。塩竈市美術展賞「真夜中の問いかけ」小泉百合子 塩竈市教育委員会教育長賞「夜明けの仔」酒井美雪 塩竈市芸術文化協会会長賞「地と陽を占める夏」中間美佐子 塩竈市生涯学習センター審議会委員長賞「薫風の候」丹野あき子 塩竈市議会議長賞「泉ヶ岳に冬到来」畑山美沙 NHK仙台放送局長賞「屋久杉に歌うひばり」只浦徳子 杜の都信用金庫理事長賞「1月6日」鈴木愛

規 日本画奨励賞「彩り月」高橋哲子 日本画奨励賞「竹桃」
板橋孝子 招待「夏を思う」阿部淑子 「秋時雨」橋本道
代「翔」新藤圭一 最高賞の「真夜中の問いかけ」は洋画
部門の最高賞と共に一年間塩竈市公民館に展示されることにな
っている。

「第二十九回宮城シニア美術展 日本画の部」(十二月二日
〜十二月五日 宮城県美術館 県民ギャラリー)

県主催の公募展。応募点数が少ないのが残念。応募規定や
スタッフの対応を取り上げても懇切丁寧なのにはである。「華
やぎの季」は確かな技法に裏打ちされ、構図、配色共に正方
形の画面にしっかりと収まった。「雄偉」は、かくありたい
と願う作者の気持ちが生々しく伝わって来る。奨励賞の
佐々木幸一氏は二年連続の受賞となった。最優秀賞「華やぎ
の季」大槻勝美 優秀賞「雄偉」梅本文子 奨励賞「風にも
負けず」佐々木幸一 奨励賞「清穆」高橋哲子

第五十八回宮城県芸術祭絵画展 受賞者作品展(十二月
十四日〜十二月二十日 東京エレクトロンホール宮城 五階
展示室)

本年度の芸術祭絵画展の公募、会員の部の受賞作と近作を
隣り合わせに鑑賞できるのが本展の特徴。「収穫の時」は背

景の銀箔が強すぎてすっかり描かれた野菜を打ち消してし
まっているのが気になった。「裏箔」風に底光り感が出てい
たら一つ一つの野菜に目が向いただろう。「糸偏」の描写力
と絵具の扱いは見事である。隣の近作は日本画の装飾性と緻
密な描写から離れ、大胆な筆致に変えて好感が持てた。

第七十一回 新現美術協会展(せんだいメディアテーク5
Fギャラリー)

洋画、(版画、彫刻半立体等を含む)の団体であって日本
画の奥山和子、上條妙子の二氏が出品を重ねている。上條氏
はミクストメディアなので前述の「日本画」で捉えるなら、
日展にも出品している奥山氏一人と言うことになる。会場に
あって、なおその一点は存在感を放っていた。

小野恬氏が「多年にわたる日本画界の発展と文化芸術の向
上への寄与」で第七十一回(令和三年度)河北文化賞を受賞
された。氏の作家活動等々について今更、いや浅薄な私が述
べる立場にはない。ただ氏についてこんなことがあった。行
きつけの焼き肉屋で先輩と久々にお会いし、話は絵の事に
なった。たしか「日本画の空間、余白って何だろうね。小野
恬さんのようなあのびのびとした捉え方がいいよね」といっ
た内容だったと思う。そこに女性店主がやって来て「お客

さん小野先生をご存じなんですか」「私の美術の先生でした。あの優しい笑顔の指導思い出します。ところで先生今でもお元気ですかね」と…画家としてばかりでなく教育者としての一端を垣間見た思いだった。牡丹と言えば日本画の定番モチーフである。ほとんどが大輪の咲き誇った美しさを捉えた作だ。「青菴」のように画面の中央にドンと菴だけを描く作家を私は初めて知った。県芸術協絵画部日本画の名誉会員のお一人で、その画風から影響を受けた作家は多い。本県日本画の牽引役としてこれからもご尽力いただけるものとご期待申し上げます。

もうお一方の名誉会員である能島和明氏の第八回日展出品作「東北の地よⅣ（ヘクソカズラの冠）」はこれまでの「東北の地よ」とは違い、桃源郷を俯瞰したような、アンリ・ルソーの「蛇使いの女」を思い起こさせる不思議な世界だ。描かれたすべてに慈愛に満ちた作者の優しさが滲む。その中心となるのが童の姿、特に顔に魅了された。ルソーと違うのは「安寧」の二文字が画面から浮かんでくることだ。私もかく描きたいと強く思う。何事にも動ぜず、ありきたりを避け、描きたいものを、自分にしか描けない方法で誠実に表現し続けているお二人。これもまた、かくありたい…と。若い頃は斬新で一步先を行く作品を発表していたのに、脚光を浴び画商が付いたとたん、商業主義に陥りつまらない作品になって行

く例を見てきた。本県では「日本画家」「絵を生業に」している人は少ない。となれば尚のこと「何事にも捉われず」に「思いつきり描きたい」ものだ。作家にとって目指すは「作品の質の向上と作風の深化は永遠の課題であるはずだ」井上研一郎氏（宮城学院女子大学名誉教授・前本稿執筆者）をべの言葉にお借りして、本稿を終えたい。

庄 子 幸 一
(宮城県芸術協会絵画部 運営委員)

大泉佐代子 日本画展



「落ち葉の華」 F3号



「秋の香り」 F4号



「或る日の庭」 中邨圭子



「牡丹」 佐々木智朗



「糸偏」 土屋 薫

第 58 回宮城県芸術祭絵画展
会員の部



「収穫の時」千葉えつ子



「秋滝」深村宝丘



「孤鶴」山本政彰



「三月の鯉のぼり」小泉百合子



公募の部

宮城県芸術祭賞 洋画

「晒シモノ」蜂谷幾凜

小野 恬 —北国に生きて—
2015年発刊の画集より



「青蕾」 平成 27 年 個展出品作



「青蕾」 蕾の部分拡大

「東北の地よⅣ」の部分拡大



能島和明 第 8 回(2021)日展 「東北の地よⅣ (ヘクソカズラの冠)」



北斗七星



ハグロトンボ



カエル



不思議な四つ足の生き物

洋画

企画展―青野文昭個展 「次から次へと、…」 (十二月十四日〜二十六日 Gallery TURNAROUND)

この年鑑の対象期間中、もとも気になった展示であった。同一のスタイルによるドローイング、大小とりまぜてかなりの点数の展示だが、とりあえずドローイングであるためか、近年の青野の立体を中心とした発表よりも、ぼくは端からひきつけられた。青野の立体作品の猛り多きが、異なる物体をつなぎ合わせた界面の近傍に現象する「創られた仮象／物体」と、物体上に単純にとりついたように描かれたイメージとの組み合わせによっているのに対して、今回の作品、ドローイングでは、描かれたひとがたのイメージ図、が地(支持体⇨空間のイメージ)と一体に絵画空間をつくりだしている。この絵画性は、物体性と描かれた像が拮抗した物(ぶつ)、でもありイメージでもある存在の二重性、絵画の不思議さ、を生み出し、まずそこに引き付けられたのだった。

そして、展示空間にのべ広げられるドローイング群は、本展タイトルの「次から次々」に同調するように次々と展開していく。この反復する展開は、表面的には、災いが次々

と起こっていることに対する精神的な緊張状態の繰り返しを示すのだろうか。しかし、本展に添えられている青野による短いテキストあるいは作品タイトルを読むと、個人にはどうしようもない(超越的な)災いの繰り返しは切っ掛けかもしれないが、単なる個人的な精神状態よりもっと根源的な問いかけを作品は表すかに思える。当然、「万物は流転する」のだから、物質としての作品は完成という停止にはなく変化していく物質の状態のその時その場の現れでしかない。実は物質だけではなく、イメージもまた、つまり認識もまた、作者・鑑賞者を問わず、変化の相にある。例えていうなら、大河が上流、下流どちらにも分岐が無限に増え、様々に合流し変転していくような。その場では、ミラーイメージのように、過去の無限分岐と未来の無限分岐が重なり合っているかのよう。巨木の森の枝の茂りと根のしげりのような。今、見えているイメージは時間的・空間的に広がる網目のその時その場の現われなのだろう。青野のスタイルにおいては、流転の相は強く意識できる。そして、単なる修復が過去のある状態に準拠するのに対して、青野の場合、可能態としての未来も認

識させていく。つまり、現実の空間はどこをとっても全てが遺跡でもあり、不在と実在、空虚と充実は入れ替え可能なことを表していく。

今回のドローイング群では、それもまた複雑な造形要素、素材、技法、様態、展示の全領域にわたるその在り様によって担保、提示されているが、ここでは際立つたある造形性だけを挙げておきたい。

今回のドローイングの支持体は紙箱を広げその裏というか内側を使っている（ように見える）が、そのへりの外に何か所か本の頁の欠片（のようなもの）がつけられ、そこを起点にひとすがたが水彩で描かれている。一つの画面の中で、各々のひとすがたは大きさが違い、つまり空間の大きさが違って、一つの支持体上に現れる。一つの支持体が一つの作品を示すわけだが、この場合、一つの支持体に一つの絵画空間、つまり一面面に一場面とは限らずに、複数（多数）の空間が重層した状態で一面面が描かれる。普通は、大きいものが前で、小さいものが後ろという単純な大小遠近法が働いて一つながりの奥行空間が成立するが、多重な空間では前後関係も一義的には決定できず、時間的な差をも示していく。そして、当初の箱の面の境目にある折り線が時空間の分節に働き、各面の広がりや絡み合うように多重な空間のそれぞれは広がり消え重なっていく。「次から次へと……」は多数な作品群によつ

てではなく、一つの作品のうちの多重な空間性によつても反復されている。

そして、今回、展示された作品群のいくつかは、たぶん、もとの紙箱の折り線を、後発的に折り返すことよつて一種の半立体構造が作られ置かれていた。描かれたイメージと無関係に、もしくは描くことよりも先行して蛇腹や屏風形式のように扱われると、物性がきわだって絵画存在の二重性が壊れ、ともすると工芸化するのに対して、青野のドローイングでは、おそらくは絵画空間に遅れて折り返すことで画面上の多重な空間の差、距離を広げていることに働いていた。逆に、イメージが物性を凌駕すると、それは一部の写実絵画が、物体としての絵画では平面性を強調するようなものだが、タブローではなくドローイングでは、その軽さを示してしまつたかもしれない。半立体状の作品がまぜられることで、決定的な作品（展）の鈍重さでも、ドローイング（展）のその場限りの軽さ、いい加減さでもない、中間項的なあり方を示していたように思う。

もちろん、青野は本展に前後して、ドローイングだけではない作品群の活発な制作と発表を続けていることを付け加えておきたい。

例年とは記述順を変えて、印象深い発表をタイトルの紹介

のみしておきたい。

ハイメ・パセナ2世×松山準 二人展 「IMPRINTS」 (二月十一日～二十八日 ビルドスペース)

このような展示を可能としている、塩竈とビルドスペースという場には注目したい。

細川憲一展 (二月十六日～二十一日 Sendai Artist-Run Place)

ササキツトム展 (二月二十三日～二十八日 Sendai Artist-Run Place)

二人とも抽象表現主義の延長線上でスタイルが形成され、一定の質を保った発表。しかし、その完成度の中でそれぞれ表層的な充足になっていないだろうか。

浅野友理子個展 「緋い交ぜ」 (三月二十七日～四月二十五日 ビルドスペース)

洗練された近代絵画(洋を問わず)の技術とは対極にあるかのような作品。しいて感じをいえば、本草書の絵図のような、だろうか。

木村良 絵画と陶芸展 「じゅうになりたい。」 (四月

二十四日～六月十日 TURN ANOTHER ROUND 仙台
フォーラス7F even 内)

これ以上「じゅう」になるとしたら、自己からの自由なのでは。一見、制度からはずれたように自儘に楽しく展開しているが。

オノシヨウイチ個展 (五月十四日～十九日 せんだいメデアテーク)

版画家から画家へ転換していた晩年の残された絵画作品を展示した。色と形が微光に解け込んでいくような画面が、ギャラリーの東側壁面を開けることで満ちた外光によって輝いていた。

企画展一樋口佳絵 綴り、束ね、積み続けること。(六月二十三日～七月四日 Gallery TURNAROUND)

以前よりも、画面構成上、中心に主題的な図がくることで、イメージの図が型どおりの表現となり、空間の地がものということが薄れているのでは。ドロ잉の地の図への転換性の強さは変わらず、オブジェ的な処理の小作品や立体作品の楽しさは上がっている。

若手アーティスト支援プログラム Voyage

大久保雅基・佐竹真紀子展 「波紋のかなたに」 (七月七日
〜九月五日 塩竈市杉村惇美術館 企画展示室)

タイトルは果て・外・未然を示しているともとれる。作品
が語るものは現実に先行できるだろうか。

峰岡順作品展 「心の中枢を描く」 (七月二十二日〜八月
二十二日 大衡村ふるさと美術館)

俗化した抽象表現主義的な表現方法にただ乗り過ぎ。画面
効果に落ちたアクションはスペクタクルなだけでは。表現に
対するアイロニカルな自己点検性の回復が必要だと思う。

企画展 小林知世 doughnut (八月十七日〜九月五日
Gallery TURNAROUND)

個人の感性と作品の交感が醸す「雰囲気」との距離が少な
い。これは現代性では。

照井隆展 Lines & Color... (九月二十一日〜二十六日
Sendai Artist-Run Place)

今回は「支持体の素材の特異性よりは、普通に普通のドロー
イング。正統な展開ではあるのだろうか、支持体の素材が単
なる物質的特徴となるのではなく、その特性を生かした新た
な空間性に向かっていくことを期待したい。

千葉実展 (十月二十日〜二十五日 Sendai Artist-Run
Place)

安定した作品。とはいえ、版画ではない方法も考慮しても
いいのでは。多様な形式のドローイングも見てみたい。

Haruka KAMEYAMA Solo exhibition "hi," (十月二十三日
〜十一月三日 TURN ANOTHER ROUND 仙台フォーラ
ス7F even内)

ユートピアともディストピアとも決定できない光景をデジ
タル技術も使いながら合成し画面をつくっていく。その合成
のある種のぎこちなさに新たな時空間表現の可能性があるか
もしれない。

斉藤文春展 一すみて、そら (十二月十四日〜十九日
Sendai Artist-Run Place)

思考・素材・技法にぶれなく、誤差の無い作品群。しかし、
例えば、他者を悼んで制作された作品がそうなりやすいが、
ぶれ・誤差のないことが作品の中の他者性をもなくしている。

若手アーティスト支援プログラム Voyage
かんのさゆり・菊池聡太郎 「風景の練習 Practicing
Landscape」 (二月六日〜三月二十八日 塩竈市杉村惇美

術館 企画展示室)

菊池の作品については、来年の年鑑で機会があたえられれば、触れたいと思う。複数の論点、問題群が折り重なって、人の創作行為あるいは美術の可能性を広げつつあるかもしれない。

企画展「ナラティブの修復」（十一月三日～令和四年一月九日）
せんだいメディアテーク)

共同体の物語としての民俗学的な「ナラティブ」ではなく、作品の外部性としての多様な「ナラティブ」と、作品から創発する「ナラティブ」の両面から問うているのだろうか。外部性が、単なる根拠やポリティカルな依代に終わるのではないし、創発する「ナラティブ」は一つには収斂しない。としたら、展示は、情報レベルの交錯・洪水にならず、線形な情報提示に新たな可能性が見いだせないだろうか。

リボンアート・フェスティバル (RAF) 2021-22

全貌が捉えられず、十分な分析は不可能だが、一つだけいこうとすれば、ある地域に外部の美術家によって作品が提示されるべき、それが種々の理解不可能性を持っていることは当然であり、そうでなければ外部から招請している意味はない。また、このことが肯定的な状態になるのはイベント期間

を超えて、長い時間をかけて、読みなおしと認識の転換が繰り返されたののではないだろうか。

時間的には逆順だが、気になった展示について紹介、論評する。

大庭英治個展「色と私たちを求めて」（六月十日～十六日）
藤崎本館6階美術ギャラリー)

色彩のたいへん美しい、風景や情景をもとにした抽象画よりの小作品を中心とした展示であった。特にコラーージュによる小品では、油彩作品とは違って、色面の性質によるのか切れ味鋭い美しさを感じられた。

六月十二日の河北新報紙上で紹介されていた画家のコメント「作品を見て、明るくくつろいだ気分浸ってほしい」、これに類することは、大庭にかぎらず今は特に多く言われているのだが、大庭の作品が文字通り「色」と「かたち」という近代絵画の普遍性を担保してきた造形の要素を大きなテーマとしていることから、マティスの「・・・私が夢みるのは心配や気がかりの種のない、均衡と純粹さと静謐の芸術であり、・・・肉体の疲れを癒すよい肘掛け椅子に匹敵する何かであるような芸術である。・・・」という「画家のノート」に書かれた言葉を思い起こさせる。

マティスも生涯にわたって、一種の抽象化された、しかし、いわゆる抽象絵画ではない絵画を追及し、それが近代絵画のメインストリームをつくりだしてきた。大庭の作品もこの延長線上にあるといってもよいだろう。(二〇二一年秋に国立新美術館で、マティス晩年のコラーージュ作品を中心とした、日本では久方ぶりの大規模なマティス展が計画されていたが、残念なことに中止された。)しかし、マティスの作品にあってその延長線上にある「モダン」の矛盾を体现している画家たちの作品から消えてしまったものがある。マティスの作品の、特に一九一一年から十四、五年に掛けて抽象度が高くなった室内風景作品において、内部の形式だけでは処理されない異質さの介人が見られ、そのことで、作品は内的に閉じていない。近代絵画が十全な個人のイメージ表現を目指し、モダニズムの本流がその上で普遍性を求めたとき、内的な異質さ、外部の侵入は排除されてきた。そのことで結果的に美しい色と形の組み合わせをつくりだせた。が、それがスタイルとなりヴァリエーションと化していくことで様式化した「モダン」は言語矛盾したものに陥っていった。

今回の大庭のコラーージュの作品は異質さのない内的な造形性の高い完成度を示している。だがそれは、近年、再提起されてきている美術の理論としての「コラーージュ」とは違った完成なのだろう。「コラーージュ」理論では、美意識によって

コントロールすることで貼り合わせていくのではなく、コントロールする(管理する)美意識から外れる異質なものがぶつかり合うことで、多重な空間をどうつくりだすか、それ自体、完成しようがない方法だが、だといわれている。そのことが、絵の具の代わりの色材として紙などを使う「貼り絵」と「コラーージュ」の決定的な違いでもある。多重な空間がコラーージュされ、そこでその作品固有の何かを生み出すかどうかの問題となっている。マティスの晩年のコラーージュでは、その形体が、様式としての抽象に従っているだけではなく、一つの形体で、實在の形の内外、あるいは表と裏、のような二項を表現する不思議な認識の可能性がみられ、それが固有の質を生み出している。

大庭に限らず、多くの近代絵画の延長線上で個人のスタイルを確立した画家たちにとっては、美意識にコントロールされた完成されたスタイルがなぜネガティブなものになっていくのかは難しい問いになる。ぼく自身、大庭の個展を見させていただいたとき、その美しさに浸ったのだが、その感覚は趣味的な閉塞に過ぎない。マティスの作品にはアンコトローラブルな異質さがある。その、異質さ、外部性などは「アルターモダニティ」の可能性を持っているのではなからうか。「モダン」の普遍性にズレ(を感じ)て、しかし、普遍性とは違った固有性を基軸とするのとも違ったものがそこにはあ

るのかもしれない。「モダン」な、あるいは「ポストモダン」なスタイルの確立とも違った「アルターモダンテイ」が必要なのだろう。

多田由美子展 「x氏の最後の晩餐」 (一月十二日〜十七日 Sendai Artist-Run Place)

今回展示された作品は二〇二〇年三月に埼玉県川口市のギャラリアトリアで展示されたものだという。思えば、二〇年の三月は、新型コロナウイルスによる感染症が徐々に広がり始めた時期で、それから、何波かの波の後、ほぼ一年後に仙台でも展示したということなる。(そしてこの小文を、そこからまた一年後に書いているのだが)その一年の時差は、作品も意味合いを変化させるものなのだろうか。

この《x氏の最後の晩餐》に限らず、多田の作品「テーブル絵画」はテンポラルで時間経過を意識させるよりも、より共時的な決定性を持っているように見える。また、作品(展)に添えられるテキストを読むと、とりあえずは、普遍的な問い、アイデンティティの寄る辺なさが問われているかのように見える。一方で、この作品のタイトルからは共時的普遍性がレイヤーになっっているように読み取れる。身の回りつまりは日常性という持続にあるものななかで、反復的におこなわれることの終了という非日常性が提起されている。ちよっ

と勝手な深読みをするならば、パンデミックは日常の中に死の可能性を持ちこむことでもあり、繰り返しされる食事が常に終わる可能性を含んでいる、というような。可能性としての非日常の日常化。人称もまた不特定化されている。具体的な作品の現れは時間的な経過をどう受け止めているだろうか。震災という出来事とパンデミックとそれに伴う社会的現象や出来事との違いは大きいように思える。

さて、時間的な状況変化もあるが、作品の現れには、その場や環境の変化も大きく関与する。少なくとも、初出とは、アートシーンをなす社会制度的な、あるいはそこに参加している人々が織りなす場の違いは大きいに違いない。にも拘らず、ともかく、作品内的な関係の二重性を見ていこう。

これまでの「テーブル絵画」に比して(全てを見ているとは言えないが)、今回の作品はテーブルのプロポーシオンに特徴がある。その長さ6mという長テーブルには一脚の椅子が、長手中央に差し込まれた状態で置かれていた。テーブルの上には、カラフルな物体が日常的な用途を外れ密接に配置されている。このことはこれまでの作品と変化していないが、テーブルの大きさにもよるのかこれまでより物の数は多く、様々な透明性の段階にあり、また、超時間的つまり汚れや欠損のない物群はフォトジェニックに美しい。物の配置は、基本的には、テーブルの二つの軸線、それらに直行する垂直軸

の三軸と、それぞれの物の形体の形成的なあるいは機能的な軸との駆け引きによっているのだろうか。これまで以上に即物的な隣接性による関係構築が強いように見えた。また、今回のテキストも、以前よりもテキスト内のイメージの不連続性は強くない。むしろ、世界を提示することが明解なのではないだろうか。そして、物の配置のうち、テーブルというフレームの外へのかかわりは無いわけではないが、それほど要素としては強くない。

「最後の晩餐」というテーマの中で特異なのは椅子が一脚ということである。つまり、不在なのは不特定の一人ということ強く象徴する。そして、テーブルの上には山盛りに近い感覚で物が配置されている。全体を捉える視線からは、室内のテーブルと椅子という立体物、オブジェ性が勝っている。に対して、テーブルとタブロー、絵画を見るように、卓上の物群を見ると、隣接の中での関係によって、見かけの近いものを上げれば仮想都市の模型のような、つまりは、一個一個の物体が持つ用途性や物として名詞的に認識されるものではないある種のイリュージョンを持った物群を見ることになる。つまり、テーブルと椅子は実在のテーブルと椅子として認識されるが、テーブルの上の物体群は、イマ・ココ・そのモノとして認識されるだけではない。今回、関係性は強く、逆に不連続性が見えないために、おそらく、制作時間と同じ

以上に時間をかけた見方をしない限り、物群が関係から切り離されて存在することも、不連続を媒介にして違う関係性に移行することもあまりないのではなからうか。全体的な象徴と部分を繋いでいく視点での物群のオブジェ性。この振幅に《x氏の最後の晩餐》はある。

普遍的な問題としての「寄る辺なさ」が、単に感覚的なものではなく、実践的な可能性を持ち得るとしたら、写真にはとりえない関係性、それも多重的、にあるのだろうか。優れた世界認識は一つの形式には収まらない。終わらない作品制作によるのか、果てのない反復に賭けるのか、世界認識は終わらない。そんなことを考えさせられた。

最後に少しだけ総論的なことを書いておきたい。

二年前の年鑑で触れたことを繰り返すと、年鑑のような媒体に、毎年毎年同じような作家を同じ語り口で記述を繰り返すことは、その地域やジャンルや文化的状況が停滞にあることを示す、という。その意味でこの小文もなかなか新鮮にはいかない。がともかく、情性と居直りの動きを見ないことにして、少なくとも悉皆で取り上げているわけではない。つまり、多くの責任で選択しているわけだから、具体的な作品や発表の動向だけではなく、それを選択するそこに「問題」を見出しうる、その年の状況的制度的な、一種の文化論的地

平をも書いておきたいと思ってきた。年鑑に掲載する動向の紹介文としては異形のものになっていて、承していることを了承していただけると幸いである。

この年鑑で取り上げている二〇二一年は東日本大震災から十年目にあたる。当然、震災を意識した作品や展示も多くあったわけだが、それだけでは「問題」となるものではない。アートの作品は予言的なものであるべきである。それは、繰り返してではない、あるいは既視的なものではないほど予言力があるが、理解不可能性も強い。なぜなら、予言は、言語矛盾するかもしれないが、語られるものでも、図イイメージとして表現されるものでもなくて、つまり、一つの確立したスタイル形式や語りにアイデンティファイされるものではなく、むしろ、認識の転換が繰り返されイメージの確立や定着が先送りされ続けるあたりに現れるものようだ。既存の制度的共同体的なイメージとその語り口の巧拙が基準なのではなく、できるだけ、小さな、かつ、微かな、そしてそれは、「問題」も、もちろん生き方・生きざまも多様で、常に、日常と非日常の反転可能性の泡立ち、囁きといってもよい、が世界に満ちている、その一つとしての作品なのかもしれない。おそらく、普遍的根源的問題は解決不可能なまま、無限に追及されていくだろう。その一方で、その場の、その時の「問題」にもしなやかにかかわって、スタイルは変化する。

日常性を一気に破壊する状況と、日常性が気づくか気づかぬかぐらゐの微妙さで変化していく状況では、作品のスタイルやそれを支える制度は変わらなければならない。二〇二〇年からの三年間（三年で済めばいいが）はその場その時の問題でいえば、関係の距離の病であったかもしれない。それは、過度の相互依存性と相互承認による関係過剰世界をあらわにした。視覚的な、フォトジェニックな災いを描く作品は現れたが、視覚的でもフォトジェニックでもなく、ポピュリズムに陥らずに普遍的な問題の地平を変えて成立する作品は数少なかつたことを書いておこう。

大おお

嶋しま

貴たか

明あき

(画家)



青野文昭 個展「次から次へと、...」
 展示 2021年12月4日ー12月26日
 Gallery TURNAROUND Photo by Tsutomu Koiwa



青野文昭 個展「次から次へと、...」
 展示 2021年12月4日ー12月26日
 Gallery TURNAROUND
 Photo by Tsutomu Koiwa



青野文昭 《「次から次へと、...」埋らない欠落—
 終わらない不安(定) 一片付かない世界。そして
 拡張。(なおよす・代用合体・連結)》2021
 38cm×48cm×厚み 1cmくらい
 mixed media Photo by Tsutomu Koiwa



木村 良 絵画と陶芸展 「じゅうになりたい」
 展示 2021年4月24日ー6月10日
 Gallery TURN ANOTHER ROUND (仙台フォーラス7F even内)



亀山晴香 《Who..?》 2021
530 × 455mm
Affinity photo, Acrylic on printed on
Canvas



Haruka KAMEYAMA Solo exhibition “hi,”
展示 2021年10月23日－11月3日
Gallery TURN ANOTHER ROUND
(仙台フォーラス7F even内)



多田由美子 《テーブル絵画「x氏の最後の晚餐」》 2020
テーブルサイズ 600 × 75cm 日用品、テーブル、椅子
撮影：小岩勉
(この写真は、2020年3月の川口市ギャラリーアトリアでの展示)



多田由美子 《テーブル絵画「x氏の最後の晚餐」》 部分 2020
テーブルサイズ 600 × 75cm
日用品、テーブル、椅子
撮影：多田由美子



多田由美子 《テーブル絵画「x氏の最後の晚餐」》 部分
2020 テーブルサイズ 600 × 75cm
日用品、テーブル、椅子
撮影：小岩勉
(この写真は、2020年3月の川口市ギャラリーアトリア
での展示)

彫刻

令和三年一月から十二月までの宮城県出身あるいは在住の彫刻家、立体造形の作家による創作活動と発表、宮城県内で開催された展覧会、アートプロジェクト、グループ活動における彫刻、立体造形の作品の紹介や活動の報告を行う。

本年は震災後十年という節目の年であり、復興を祈念する作品の設置や、現在とこれからに向けて彫刻に何ができるのかを問いかける展覧会があった一方で、新型コロナウイルスの感染防止対策のため、河北美術展が二回目の中止、宮城県芸術祭が二回目の会期短縮となったが、他の展覧会でも同様のことが多くあった。そのような状況下でも多くの作家が彫刻にできることを精力的に真摯に追求し、輝きある作品を創作していることが伝わってきた。

芸術作品は作家が現在をどう感じ取とっているかその時代の空気を反映するもので、未来から見ればこの時代の人間が何をどう感じ考えていたのかを感じ取る貴重な足跡となる。美術作品や展覧会記録も含めて多くの情報がインターネットで簡単に検索できる時代だが、インターネット上の情報・記録は永久不滅に残るわけではない。宮城県芸術年鑑は印刷物

の媒体として価値が高いと考えている。その意味で、本年については、実績として可能な限りを記録する形をとった。記載した他にも素晴らしい優れた発表もあったと思われるが、筆者が実見できず知らなかったものについてはご容赦いただきたい。文中の作家に対する敬称も略させて頂いたことを併せてお許しいただきたい。

鈴木基真、團良子、ちばふみ枝 三人展「遠く、手を振り返す」

一月八日から三月二十八日 mado-beya 石巻市

mado-beyaは石巻のキワマリ荘にある四つのギャラリーの一つで、石巻出身在住の彫刻家・ちばふみ枝が運営している。ちばはこのほかにも mado-beya 企画として、ちばふみ枝「海とカモシカ写真展」を四月十六日から六月二十七日に、中谷ミチコ、長谷川さち、ちばふみ枝三人展「自らの。かたち」を十月九日から十二月二十六日に開催、自身も出品した。

奇数アトリエ

一月十五日から十七日 A E R 1 F & 2 F アトリウム

宮城県芸術協会会員の清水直土が出品。同イベントの十一月十二日から十四日開催時には、清水直土、宮城県芸術協会会員のしょうじこずえが出品した。

二〇二一年新春小品展

一月十六日から三十一日 ぎやらりー由芽・由芽のつづき(東京都三鷹市)

白石市在住の彫刻家・清水玄太が出品。

「親密な石」スギサキマサノリ個展

一月十九日から二月十四日 Handle with Care 韓国ソウル市

なかの方アートSHOP

二月二十、二十一日はイービーンズ地下一階にて開催。四月十七、十八日、六月五、六日、八月、十月二、三日は仙台フォーラス二階にて開催。清水直土が出品。

山中環彫刻展

二月十八日から二十三日 アートスペース無可有の里(柴田町)

主に石彫で抽象造形を発表している作家。御影石などを

使った作品約三十点を展示した。

Lyrical Abstraction 詩的抽象—ケイト・トムソン+片桐宏

典二人展

二月十八日から二十三日 IMPLEXUS Art Gallery 盛岡市

彫刻とドローイングによる展覧会。

丑展

三月二日から五月十六日 秋保の杜 佐々木美術館&人形館
干支の丑を表現した企画展。スギサキマサノリ、佐々木克真、一実ら二十名の作品を展示。

スギサキマサノリ展 宮城レポート2021.3.11

三月九日から十四日 SARP 仙台アーティストランプレイス

彫刻家・杉崎正則の個展。震災以降に撮影、加工処理された写真十三点の展示。

「Family Portrait」家族の肖像—十年目の春」展—東日本大

震災復興支援アート・プロジェクトの軌跡—

三月十一日から二十八日 旧石井県令邸(盛岡市)

気仙沼市出身で盛岡市と英国を拠点に活動する彫刻家・片

桐宏典の Ukishima Sculpture Studio が 3・11 をテーマに、彫刻、ドローイング、イラストレーションによるアート・インスタレーションを行なった。片桐とケイト・トムソンがアートでの復興支援として震災直後から行なっている Postcard project の紹介とスペシャルゲストとして Photohoku を迎えるの展覧会。片桐絵美 理も出品。



片桐宏典 ファミリーポートレイト (会場風景)

石巻市南浜津波復興祈念公園 モニュメント完成、除幕式

三月十八日

仙台市出身でイタリアを拠点に世界的に活動する彫刻家・武藤順九が「CIRCLE WIND (風の環) 2011—絆—」を

制作、設置した。イタリアの大理石を使い、メビウスの輪のかたちを取り込んだデザイン。武藤は、九月三十日から十月六日、藤崎にて、同モニュメントの原型をはじめとするこの三十年間に描きためた絵画作品など六十点を展示する個展を開催した。

令和二年度地域文化功労者表彰記念 佐藤淳一彫刻展

三月二十三日から二十八日 晩翠画廊

仙台市出身の佐藤が、岩手大学で彫刻を志して四十五年。その概ね前半期には中学校美術教諭をしながら毎年、国展で大作の発表を継続した。このほか個展(仙台、東京)、河北美術展、宮城県芸術協会、新現美術協会等で作品発表を継続。一九九七年には国際彫刻シンポジウム in 仙台を企画・運営し、自身も作家として作品制作した。特任教授を務める東北生活文化大学美術学部の学部化に尽力し、創作と美術教育の両面で地域貢献してきた。宮城県芸術年鑑を令和三年まで二十五年に渡り執筆した。

花崗岩を用いた「地球拍動」は、大地と海、その上の空をなすように弧の形をした人体が一体化したフォルムの作品。佐藤の代表的でオリジナリティー溢れる造形表現である。空をなす人間は、誰かではなく普遍的な人間であり、我々人間は地球の一部として、互いに活かし生かされる存在であり、

また未来に向けては、地球を慈しみ存続させる存在だと表現しているようだ。作品の中央にできた空間から先を見通す時に、課題多い人間社会を一步離れて「自然としての自分、人間とは？」をイメージさせてくれる大らかな彫刻である。佐藤は海外の彫刻シンポジウムにも参加しており、そこで感じてきた自然風土を盛り込んだ小作品も多く、充実した内容の個展であった。



佐藤淳一 「地球拍動」

第七十一回モダンアート展

四月二日から十六日 東京都美術館

宮城県芸術協会彫刻部の阿部弘子が会員出品。

永倉香名子 彫刻展 〈窓辺の小品達〉

四月六日から十一日 晩翠画廊

宮城県芸術協会会員の永倉香名子の美術教員退職後の二年目での個展。永倉はこの三年間毎月一作品のペースで精力的に制作している。制作にあたり、対象の魅力をどう捉えて形としてまとめるかの調和を優先させているという。どの作品からも人間の優しさ、伸びやかさ、未来を感じるが、それは作家がそれぞれのポーズの人物がどんなドラマを秘めているのか、その人物の世界と背景をじっくり考えながら創っているからだろう。ほか、植物水の流れをテーマとした平面作品も多数出品。表現力豊かな個展となった。



永倉香名子 個展出品作品

層 vol.5

四月十一日から十八日 ギャラリーストークス (東京)

グループ展。清水玄太が出品。

若手作家応援企画 動物×どうぶつ× Doubutsu vol.2

四月十三日から十八日 晩翠画廊

宮城県芸術協会会員の佐々木莉央(木彫)、佐野美里(木彫)他四名が出品。

Geneva Collection 2021 展

四月二十八日から五月十六日 Studio Art Unlimited Gallery

スイス・ジュネーブ

片桐宏典、ケイト・トムソンの彫刻による二人展。

白石市商店街・シャッターアート

東京都出身、白石市在住の彫刻家・能城智園が令和元年より制作開始したプロジェクト。第四弾・五月は地元中学生との共同制作、第五弾・七月から四月は地元中学生制作、第六弾・九月から十一月、第七弾・十二月は地元高校生が作成した図案を制作。能城は白石市の地域おこし協力隊員でもある。

ちばふみ枝個展「いくつもの小さな広場」

五月十五日から三十日 Cyg art gallery (岩手県盛岡市)

東松島JR矢本駅 砂像「勝鯉」お披露目式

五月十七日

秋田県能代市出身で東松島町市在住の砂の彫刻家 保坂俊彦が制作。保坂は砂像彫刻で国内外で活躍し、同市地域おこし協力隊員でもある。六月六日には、気仙沼本吉町の大谷海岸が震災後に初めて海水浴場が開設されるのに合わせて「七福神と宝船」を制作した。十二月二十五日には東松島市野蒜の防災体験型宿泊施設「KIBOCHA(キボッチャ)」にて約百五十トンの砂を使った大型砂像「鼓動」のお披露目会が行われた。

スギサキマサノリ彫刻展

五月二十日から二十四日 アートスペース無可有の里(柴田町)

生き物をモチーフにした石や木の彫刻約七十点の展示。

八ヶ岳倶楽部 ギャラリーブース展 嵯峨卓 鍛金の仕事

五月二十七日から六月一日 八ヶ岳倶楽部(山梨県)

一実創作人形個展「躯体のプシユケ」

六月十六日から七月十一日 秋保の杜 佐々木美術館&人形館

清水玄太 石彫展―祈るふつうの人―

六月十九日から七月四日 ぎやらりー由芽 東京都三鷹市

姉齒公也 個展 アネハネハ楽園園

六月二十九日から七月四日 晩翠画廊

宮城県芸術協会会員、大崎市在住の作家。モバイル作品、壁掛け作品で、記憶の断片を表現した。

嗟峨卓 鍛金彫刻展

六月二十三日から二十九日 仙台三越アートギャラリー

いきものたちの新作を中心に二十余点を展示。

ソーシャルアートプロジェクト

七月十、十一日 せんだいメディアアテーク

仙台市在住の彫刻家・松岡圭介の作品展。人間を題材にした大作など二十点とダンサーによる展覧会。

自画像展

七月十五日から九月十二日 秋保の杜 佐々木美術館&人形館

彫刻では翁ひろみ、翁譲、スギサキマサノリ、宮城県芸術協会会員の赤井靖武が出品。

「帰ってきたランドセル」展

七月十六日から八月一日 リアス・アーク美術館コモンホール、気仙沼市まち・ひと・しごと交流プラザ

斉藤道有、タノタイガ、パルコキノシタ、樋口佳絵、増子博子、村上タカシらが出品。

Summer Artestia 2021

七月十九日から三十一日 Gallery ストークス(東京)

白石市在住の彫刻家 能城智園が出品。

「手つかずの庭」

八月十四日から九月二十六日 石巻のキワマリ荘 石巻市

ちばふみ枝、鹿野颯斗、SoftRid、土井波音らが出品。

Reborn-Art Festival 2021-2022

八月二十日から十月二日 石巻市街地、牡鹿半島(桃浦・荻

浜・鮎川)

三回目の開催となるリボンアート・フェスティバルは、「利他と流動性」がテーマで、まずは二〇二一年夏「前期」が開催された。宮城県出身、神奈川県在住の美術作家・狩野哲郎は、荻浜灯台に「21の特別な要求」と題したインスタレーションを展示した。東京都出身の彫刻家・西尾康之が粘土で創作した作品を展示したほか、現代美術家の会田誠はオリジナルキャラクター「おにぎり仮面」を女川駅前に展示した。

マッシュパーク女川 アート遊具

八月十九日開園 牡鹿郡女川町

女川町への震災復興支援事業の一環として、東京本社の民間企業が公園の計画・総合監修をし、女川町へ寄贈した。アート遊具五基を大阪府出身、神奈川県在住の彫刻家・美術家・高田洋一が、海の生き物をモチーフにデザイン・制作した。高田は風で動く彫刻のパブリックアートを国内外に多数設置している。

日本の行政では、遊具をアートとは定義していないが、彫刻家の作るカラフルな遊具は、子供たちが遊びを通して、美と世界を同時に体感する可能性を広げている。コンクリート遊具の安全性を高めるため、遊具作品では初めて全体を「弾

性舗装材」で覆う試みを行った。素材も造形も多種多様で遊びのバリエーションが豊富なアート遊具は、子供にも大人にも夢中で遊べる場を提供し、町の誇りの一つになるだろう。



マッシュパーク女川「ウミウシくん」
撮影：高田洋一

及川茂木彫展

九月一日から七日 仙台三越アートギャラリー

宮城県芸術協会彫刻部作家の個展。

フェスティバル FUKUSHIMA! 2021 「越境する意志／The Will to Cross Borders」

九月四から十月十七日 福島市 四季の里（福島県福島市）

ちばふみ枝が出品。

アトリエ創 ―歩展歩展

九月七日から十二日 晩翠画廊

仙台市在住の彫刻家 翁ひろみが主宰する造形グループの作品展。アトリエに通う作家、愛好家ら二十名の木彫作品六十点が展示された。アトリエ創は発足して約半世紀とのことで活動の集大成であり、新たな歩みの始まりとなる展示。出品者は、赤倉桂子、阿部弘子、石井直子、大谷栄子、川村喜代子、斉藤恵美、齋藤美智子、櫻井道子、佐藤しず子、佐藤久恵、菅谷千鶴子、菅原恭子、鈴木貞子、武山美智子、堀宏美、松浦繁、松浦由美子、棟方似美子、矢澤きみ、若竹重美、ノサカエミ、翁ひろみ。

このうち、佐藤しず子が、九月一から十三日に国立新美術館で開催の第百五回記念二科展で入選。堀宏美が、十月十三日から二十五日に国立新美術館で開催の第七十四回二紀展、一般の部・奨励賞。赤倉桂子が、十月十三から二十五日に国立新美術館で開催の第八十四回新作展入選。左手のみで力強い木の抽象彫刻を創作する松浦繁が、十月二十一日から二十四日 せんだいメディアアテックで開催の第七回 Art to You 東北障がい者芸術全国公募展で「モアイ」で優秀賞・東北電力賞を受賞した。



松浦繁 「モアイ」



川村喜代子 「Work」

第十回せんだい21アンデパンダン展2021

九月二十九日から十月十日 Gallery TURNAROUND、TURN ANOTHER ROUND、中本誠司現代美術館、GALLERY ECHIGO、SARP 仙台アーティストプレイスA、ギャラリーチフリグリほか

タノタイガ、つだかおり、他多数が出品。

第八十四回新作展

十月十三日から二十五日 東京都・国立新美術館

石巻市出身で福島県在住の高家理が会員出品。

すみだ向島 EXPO 2021「隣人と粹でいなせな日」

十月一日から三十日 東京都墨田区内各所

タノタイガが出品。

第五十八回宮城県芸術彫刻展・彫刻公募展

十月二日から五日 せんだいメディアアテック六階ギャラリー
宮城県芸術協会会員十九名の二十三作品展示のほか、彫刻公募展に十名が審査を経て展示した。会員出品者は、翁観二、佐藤淳一、大槻俊之、小関俊夫、阿部弘子、及川茂、早坂修、木村民夫、イクコクサカ、佐々木莉央、清水直土、しょうじこずえ、丹野智子、永倉香名子、中平哲夫、中村たみ子、

野地節子、畠山卓也、山中ミサ子。

宮城県芸術祭賞 清水直土「ハグしかねえ」

白御影石の石彫作品。題名は、数年間アトリエの片隅を制作場所に提供してくれた恩師やお世話になった人への感謝気持ちを熱く表現したものだという。丹念な手彫りのノミ目が美しく完成度が高い。清水は高校時代にボクシングの東北チャンピオンだったが、やりたいことを頑張って達成すると、また感謝して頑張るという好循環を体験しているという。どこか生き物を感じさせる有機的な造形でそれを表現している。

宮城県知事賞 畠山卓也「Hinomanu2021」

畠山は、震災以降、風になびく旗をモチーフにした作品を作っており、二〇一六年からは日の丸等をテーマに制作している。自身が日本人であり、震災で日本人の協調性や忍耐力が世界中から称賛された誇り、デザインとしての美しさ、などがその理由だという。

風になびく柔らかい旗を岩手県産の硬い白大理石を用いて表現した。制作に一年ほどかけ、丁寧に磨きをかけて、吹き抜ける風を感じられるダイナミックな作品となった。

河北新報社賞 丹野智子「紡ぐ・・・産業廃棄物ランケープルと遊ぶ」

色とりどりの細い糸を緩やかに紡ぎ、稲架はさのような支柱に絡ませた作品。細い糸は通信に使われるランケープルの中に入っているものだという。この素材の発見と大量の糸をケープルの中から取り出して紡いだ手仕事の労力、時間の蓄積に感動する。作品は、人が中に入れるほどの大きさ高さがあり、その内と外を回遊してみると、稲架から想起される懐かしさと同時に、ケープルという人工物の色が目に入り、情報と私の関わり方までもイメージさせるような、興味深い作品である。

菅野美術館賞 中村たみ子「取り残された月」

鉄の溶接の作品。皆と一緒にいて、仲良くしつつも感じる、孤独感、疎外感をテーマにしている。寂しさや孤独な気持ちを穏やかな月に内在するものとして、トゲトゲした部分で表現しているという。三日月をデフォルメした形と床に点で接する四本の脚によって、浮遊感のある生き物に感じられる。彷徨している情景がとても伝わってくる秀作。

彫刻公募展では、宮城県宮城第一高等学校の高校生、スワン聖里奈の「Earth」が宮城県芸術協会賞、早坂紗世の「奇

想」が奨励賞を受賞した。スワンの作品は、動物の背中を大地に見立て、自然破壊への嘆きをストレートに表現していた。早坂の作品は、トカゲの背中に宝石のように光る素材を散りばめた作品。いずれも若い制作者の思いと感性がストレートに表現されていた。

ほか、八名の入選者は幅広い世代で、それぞれ熱心な取り組みが伝わってきて良かった。



宮城県芸術祭賞 清水直土 「ハグしかねえ」



宮城県知事賞 島山卓也 「Hinomaru2021」



菅野美術館賞
中村たみ子 「取り残された月」



河北新報社賞 丹野智子

石巻市美術展

十月二十三日から三十日 マルホンまきあーとテラス

宮城県芸術協会会員の木村民夫が「絆」で石巻美術展賞、同・中村たみ子が「静かな棘」で石巻文化協会会長賞を受賞した。佐々木巖が「無限龍」で、小松明が「女性像—P3」でそれぞれ賞候補となった。このうち佐々木巖の「無限龍」は鍛金と思われる手法の金属彫刻。龍の顔、手足、鱗一枚一枚を丁寧に作り上げている。一体どれほどの時間をかけたのかと感嘆するパーツの数と密度がある。全体の高さは1メートルを超える作品で、とても迫力があつた。

「スギサキマサノリ —祈る人—」展

十一月三日から八日 豊田画廊 愛知県豊田市

荒井俊也展「社畜と観音」

十一月九日から十四日 晩翠画廊

ブロンズ彫刻と平面作品の個展。

ひとがた通信展 「ドールという変移する記号」

十一月十三日から十二月十二日 秋保の杜 佐々木美術館&人形館

—さくまいずみ、しょうじこずえらが出品

静思と手探 菅野泰史×小林花子 *contemplate and grope*

十二月六日から十一日 Gallery K 東京都

ちばふみ枝個展「くすんだベール 2011-2021」

十二月十一日から令和四年一月三十日 GALVANIZE
gallery 石巻市

第七十一回新現美術協会展

十二月十七日から二十二日 せんだいメディアアテーク
佐藤淳一、山本泰士、横山信人が出品。

STAY ART Ⅲ

十二月二十一日から二十六日 SARP 仙台アーティストラ
ンプレイス

東北生活文化大学第一期生のグループ展。宮城県芸術協会
会員の相澤オサムほか、さくまいずみ、つだかおり、吉原武
が出品。

おわりに

ここ数年では、他県から宮城県に移住して創作活動する作
家の活動がめざましいことを記しておきたい。本文中記載の
「石巻のキワマリ荘」は「Reborn-Art festival 2017」をきつ

かけに、石巻市に移住した愛知県出身のアーティストの有馬
かおるが設立したアートスペースであり、4つのギャラリー
運営を一つの民家で行なっている。彫刻家ちばふみ枝の運営
する mado-beya もその一つである。「石巻のキワマリ荘」は
二〇一九年三月より、代表が有馬かおるから、和歌山県出身
で石巻市在住の彫刻家富松篤に変わり、その後さらに石巻市
出身在住の鹿野颯斗へと引き継がれた。地域とアートの関係
性に着目しながら継続、成長、発展する場所として、石巻市
在住の作家たちが運営と活動を行なっている。作家が出身地
を以外の他府県で活動することは珍しくないが、石巻市にお
いては、アートフェスティバルをきっかけに作家が移住し、
芸術活動がより活発化したことは、このフェスティバルが被
災地の活性化に功を奏しているという点で評価したいと思
う。

東松島市の砂の彫刻家・保坂俊彦、白石市の彫刻家・能城
智園もそれぞれ市の地域づくり協力隊員として活動してい
る。個々の作品を制作発表する一方で、創ることで地域貢献
し、地域に関わる中で制作者としての活路を見出していく活
動は興味深い。これからも注視していきたい。

日 下 育 子
くさ いか

(彫刻家・公益社団法人宮城県芸術協会会員・河北美術展招待作家)

工芸

令和三年、東日本大震災から十年の月日が流れた。

人々は恐怖の日々から立ち直るべく復興へと力を注いできた。

新型コロナウイルスの感染者が令和二年二月二十九日に県内で初めて確認をされてから一年が経ってもなかなか感染力は収まらず、第四波、第五波へと周期的に拡大を重ねていった。

まん延防止策、緊急事態宣言等が発令された。政府の政策はもとより、日本国民が本来持ち合わせている勤勉さを真面目な気質で、マスクの着用、手洗い消毒をし、仕事や学校等は、リモート。生活は、不要不急の外出を避け、自粛生活を続けた。

さらにワクチン接種も医療従事者、高齢者から順に各自治体を中心に二回行われた。

その様な生活の日々をおくっていた。

七月、人々の不安や反対の声の高まる中、昨年延期された、東京二〇二〇オリンピックが開催された。

聖火走者の辞退も相次ぎ、応援人数も極力少なくしコロナ

感染防止に努めた。水際対策も強化された。観客も制限された中で、各々の種目のスポーツマン達は、おのれの持つ力の限りを発揮し、テレビ観戦の我々を魅了させてくれた。

オリンピック終了後は、また感染が広まるかの懸念を覆し、九月以降は、ワクチンの効果なのか、コロナ変異デルタ株は鳴りを潜めていった。

でもそれは新たな変異株による第六波移行への伏線ではなかった。

その様な一年の中で、工芸界は、昨年の鬱憤を晴らすかのように各地で果敢に開催された。

宮城県各展覧会の入選者は次のとおり

一月、第六十八回日本伝統工芸美術展の巡回展が、仙台三越にて開催

市岡 泰 十六角器（陶磁）

岩井 純 六華天目釉組皿（陶磁）

橋本昌彦 塩釉長方皿（陶磁）

鈴木元子 乾漆蒔霽箱「勿忘草」（漆）

江田 薫 面取釜「石陰」(金工)

本間 潔 櫛拭漆盛器(木竹)

安藤令子 有線七宝蓋物「四方」(諸工芸)

松本幸恵 有線七宝香炉「夢のあとさき」(諸工芸)

馬場興彦 泥彩波文鉢(陶磁)

四月、第六十一回東日本伝統工芸美術展(東京)

宮城県の入選者は次のとおり

岩井 純 六華天目釉四方組皿(陶磁)

橋本昌彦 塩釉条坊壺(陶磁)

鈴木元子 乾漆蒟醬箱「とくん」(漆)

佐瀬たか子 有線七宝蓋物「水波」(諸工芸)

鈴木元子「とくん」(漆)は東京都知事賞

総評によると、繭形の曲面に全体を満たす蒟醬の渋紋が微妙な色調変化を見せ、独特の存在感を示しているところ。

第五十九回日本現代工芸美術展(東京都美術館)

宮城県の入選者は次のとおり

碓谷良子 「春紅」(革)

桑原リエ 「勢動」(陶磁)

林恵美子 「悠久」(竹藤) 無鑑査出品

古山文字 「大地のくまどり」(染織) 無鑑査出品

桑原リエ 「勢動」(陶磁)は現代工芸賞

六月、第四十五回東北現代工芸美術展(仙台メディアテーク)

一般公募入選三十七点。会員、顧問、審査員

出品作四十点を展示。新型コロナウイルス感染症の影響により二年ぶりの開催となった。

宮城県の入賞者は次のとおり

【河北新報社賞】

今野隆子 「暁」(染織)

【宮城県知事賞】

菊地市千 「そらのかたち」(陶磁)

【奨励賞】

長沢光子 「光華」(染織)

【奨励賞】

池上地久子 「Spring」(陶磁)

十月、第八回日展(国立美術館)

宮城県出身者の入選は次のとおり

相澤正樹 「蒼風の調べ」(陶磁)

相澤まゆみ 「深海の風景」(陶磁)

初入選 二人とも長野県在住

十一月、第二回杜のみやこ工芸展（TFUギャラリーミニモリ）

第二十八回展まで開催された河北工芸展を継承し、宮城県芸術協会が主体となって昨年スタートした全国公募展である。今年は海外からの応募もあった。入選は百三十八点、賛助出品、審査員の作品三十一点を展示。審査員の総評では、全体的にレベルが高くバラエティーに富み、完成度の高い作品が多かった。困難や閉塞感から生まれる表現があり鑑賞者の励みにもなるとの評であった。

宮城県の上位入選者は次のとおり

【杜のみやこ工芸展大賞】

大沼明子 「心」（陶磁）

【河北新報社賞】

杉山智一 「島の猫」（漆）

【宮城県文化振興財団賞】

安藤吉姫 「青の想い」（硝子）

杜のみやこ工芸展大賞の大沼明子「心」は横にふつくと張りだしボリュームをもたせブルー、グレー、ピンクの濃淡による美しい縞模様で包まれている。口縁を心臓の形に切りとり「心」を豊かに表現。

河北新報社賞の杉山智一「乾漆合子、島の猫」は、乾漆技法を用い、猫の毛を卵殻を貼り、金蒔絵で表現。魚を銀蒔絵

で仕上げた現代的な漆芸作品。魚をくわえた猫の一瞬の勝ち誇った表情が巧みである。

第五十八回宮城県芸術祭工芸展

上位入賞者は次のとおり

【宮城県芸術祭賞】

松本幸恵 「六花の朝」（七宝）

【宮城県知事賞】

遠藤喜代江 「秋めく」（染織）

【河北新報社賞】

伊藤仁美 「呉須布染組鉢」（陶磁）

【宮城県教育委員会教育長賞】

村山耕二 「音波 Acousticwave」（硝子）

【宮城県教育委員会教育長特別賞】

倉田智恵 「菊花の盆」（木藤）

【公益財団法人宮城県文化振興財団賞】

大沼明子 「深海」（陶磁）

【宮地房江賞】

横田美和 「秋の暮」（染織）

宮城県芸術祭賞の松本幸恵「六花の朝」は朝方降りつもった雪と冴えた空気が朝日と共に消えゆく様を七宝の平面構成を鋭く切った断面と銀線を使い、青と銀色で表現。

個展は次のとおり

一月、加藤晋 作陶展

孤独感を漂わせていた佇まいの作風から、挑戦的な作品へと変化。自分らしさを模索しているかに見えた。益々の研鑽を積み上げて欲しい。

六月、岸上まみ子 作陶展

白磁の器に細やかな筆使いで、植物や小動物などを下絵付した繊細で可愛い作品。

桑原リ工 作陶展

使いやすく親しみやすさを念頭に暖かみのある作品を展示。

十一月、浅井裕子（陶）・遠藤満里子（染織）・佐藤由香（フェ

ルト）三人展

各々の分野の小物の作品展

十一月、新藤睦子 作陶展「土・1230℃の造形」

ユニークな造形の世界観。

十二月、「○○○への贈り物展」

倉澤良樹（金工）、倉澤瞳（硝子）、岸上まみ子（陶磁）による三人の個性があふれる小物展。

各褒賞は次のとおり

十一月、【教育文化功労賞】

浅野治志（陶磁）

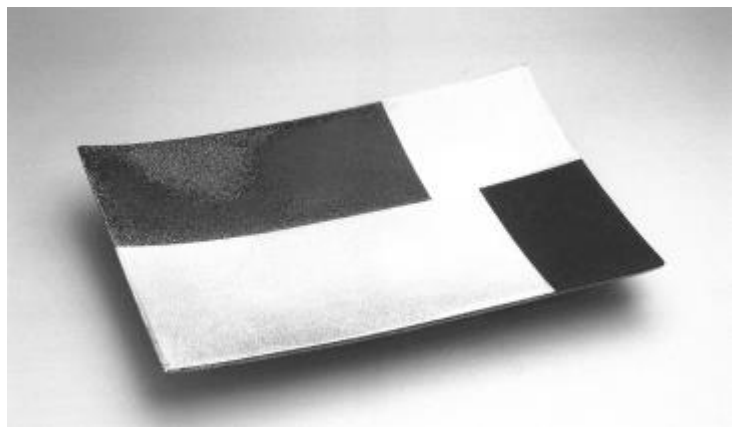
十二月、【宮城県芸術選奨】

村山耕二（硝子）

文中で敬称を略させていただいたことを御了承願います。

川^{かわ}北^{きた}京^{きょう}子^こ

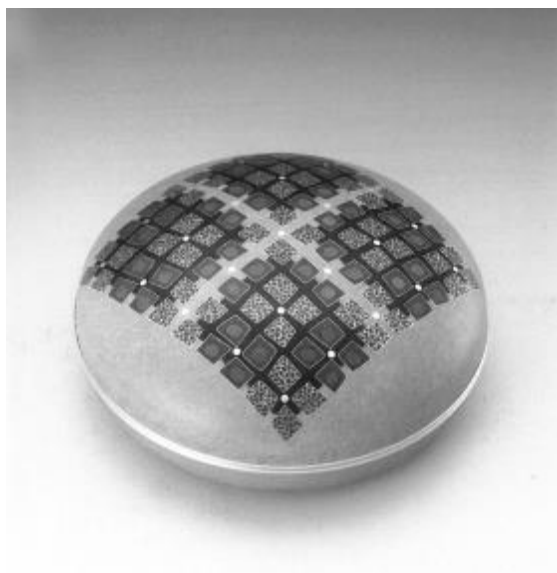
（宮城県芸術協会工芸部副部長）



橋本昌彦 「塩釉長方皿」



本間 潔 「櫻拭漆盛器」



安藤令子 「有線七宝蓋物〔四片〕」



市岡 泰 「十六角器」



岩井 純 「六華天目釉組皿」



馬場興彦 「泥彩波文鉢」



鈴木元子 「とくん」 東日本工芸展 東京都知事賞



大沼明子 「心」 第2回杜のみやこ工芸大賞



杉山 智 「島の猫」 第2回杜のみやこ工芸展河北新報社賞



安藤吉姫 「青の想い」 第2回杜のみやこ工芸展宮城県文化振興財団賞



松本幸恵 「六花の朝」 第58回宮城県芸術祭工芸展宮城県芸術祭賞



遠藤喜代江 「秋めく」 第58回宮城県芸術祭工芸展宮城県知事賞

書道界も前年に引き続き、新型コロナウイルスの影響により、制限や延期等を余儀なくされる書展があったものの、状況をみて、対策を取りながら展覧会が復活して開催されるなど、それぞれの団体、関係機関、代表、そして各書家等皆さんのご努力と絆により、活動が展開された。

各個人においても、若手を中心にじっくりと作品の質や技術向上に磨きをかけた作品も見られるようになり、少しずつではあるものの、明るい動きも感じられる一年となった。

各公募展・書展等は、以下においてまとめるところである。

◎宮城県芸術選奨

太田蓮紅

◎日展入選者

大浦清漣 片倉恵仙 小日向慶可 末永瑞鳳

菅原滄鳳 畠山翠香 目黒爽舟

主な書展

◎第六十八回河北書道展

(前期十二月十一日から十四日、後期同十七日から二十日)

まで、TFUギャラリーミニモリ。主催河北新報社・公益財

団法人河北文化事業団、特別協賛(日本航空)

応募点数八百十八点、入賞・入選作と顧問を始め審査会員などを含め、九百八十点を展示。例年同様、一般と会友を分けて審査が行われた。

巡回展は二月十日から十四日、大崎市民ギャラリー緒絶の館で開催。主な受賞者は次のとおり。

一般部門

河北賞 樫村遊雲 渡邊由紀子 平塚汀泉 池田翠月 木

村節子 菊地昭吾 阿部雅悠

宮城県知事賞 石澤青仙 仙台市長賞 石川煌風 宮城県

教育委員会教育長賞 早坂美穂 鈴木裕子 仙台市教育委員

会賞 本郷佑翠 宮城県芸術協会賞 浅野珠生 JAL賞

本間青鴻 東北福祉大学賞 品堀艸華 東北電力賞 浅野沙

都美 東北放送賞 齋有韻 早坂萌香 藤崎賞 近藤文 奨

励賞 大江青漣 宗像秀子 畠中成山

会友部門

河北会友賞 小元佳香 藤井紫光 今野榮園 砂金碧 須藤萩雨

会友秀逸賞 片倉恵仙 佐藤範子 大庭幸石 鈴木千恵子
須藤庸子 植木静香 金子美千

委嘱作家特別賞 渡辺無象 佐貝玲香 荒川空華 建部紘子
田代明眸 阿部緑玲

◎第七十二回毎日書道展・東北仙台展

(九月十三日から十五日まで、せんだいメディアアテーク)
二年ぶりの開催となった毎日書道展の東北 仙台展は、入賞・入選作品を中心に約八百五十点を展示。

県内の入賞者

毎日賞 大友紅蓉 大友四峰 若見苑柚 斎藤杏邑 佐々木青霞 菅原苔粹 只埜桂花
秀作賞 遠藤光葉 菊池慶燁 斉藤栖艶 中塩朱華 深畑紅華 阿部雅悠 近江美雪 高橋華真 高橋佳子 茂木絢水 佐藤陽子 中島光風
佳作賞 小川香燁 金子美千 佐々木藤恵 高橋清琳 渥美照瑛 金沢泉明 齋藤恭子 齋藤紫霄 齋田舞夢 佐藤和華 千葉光龍 庄司咏艸 高橋妙泉 長南一恵 茂木絢水

U23 浅野珠生 富樫千尋 伊藤凜南 下位彩花 高橋歩未 藤巻桃鶴

同時に「第二十九回国際高校生選抜書展」の上位入賞作品の展示。東日本大震災から十年の復興をテーマにした特別企画展も併設した。

◎第三十八回産経国際書展東北展

(九月十九日から二十二日まで、せんだいメディアアテーク)
七〇八月開催の本展の上位入賞者作品に加え、東北在住者の入選・入賞作品など計二百四点を展示。伊達政宗賞 中西儷

県内の入賞者は、産経準大賞 岩佐登花 会友特別賞 川口久美子 会友賞 酒井雅代 鈴木裕子 ニッポン放送賞 小野由里彩 等

同時に「2021産経ジュニア書道コンクール」の上位入賞作品三十七点も展示した。

◎第五十八回宮城県芸術祭書道展

(九月二十五日から二十八日まで、せんだいメディアアテーク)
前年に引き続き会期を四日間に短縮しての開催となった。「コロナ禍の時こそ心に潤いを」との宮城県芸術協会会員の想いが結集し、開催された。

入賞者

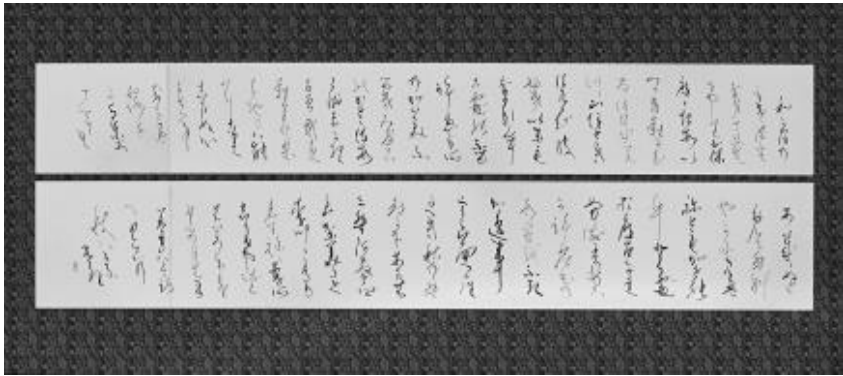
宮城県芸術祭賞 岸本清舟 宮城県知事賞 阿部香華 仙台市長賞 佐藤華炎 河北新報社賞 菊地孝夫 宮城県教育委員会教育長賞 佐々木藤恵 宮城県教育委員会教育長特別賞 浅野彩紅 板橋翠苑 仙台市教育委員会教育長賞 木村笹園 宮城県議会議長賞 吉岡芝耕 仙台市議会議長賞 太田栄美子 (公財) 宮城県文化振興財団賞 小元佳香 笹野美智子 鈴木東鳳 (公財) 仙台市民文化事業団賞 小嶋カズ子 門田勝太郎賞 江村耕芳 宮城県芸術祭奨励賞 岩佐春泉 穴戸青園 穴戸緋沙 建部紘子 中塩朱華 畠中成山



「隋感變質」砂金碧
第六十八回河北書道展



「李白詩四首」大浦清漣 第八回日展



「ほととぎす」岸本清舟 第五十八回 宮城県芸術祭書道展

社中展、グループ展、個展ほか

〈二月〉

◎第十一回蓮紅社書展（会長 太田 蓮紅）

（十五日から十八日まで、せんだいメディアアテーク）

墨象を中心に、近代詩文、漢字、かななど会員五十八人の作品約百点を展示。「再生―過去 現在 未来へ」と題し、会員の書き損じた作品を短冊状に切り、山のような形に積み重ねたオブジェが飾られ、復興への願いが込められていた。「学生展」と蓮紅社を長年支えてきたメンバーによる「五人展」も併催された。

◎東北書道新春選抜展（会長 後藤 大峰）

（二十二日から二十六日まで、せんだいメディアアテーク）

役員選抜展 縦二・四メートル、横〇・六メートル等の大型作品、計六十六点を展示。一九三三年創刊の東北書道会の機関紙「東北書道」が九〇〇号を迎えたことを記念した作品展として、子ども、一般の会員の作品約二三〇点も並んだ。

◎第九回翔雲書展（代表 建部 恭子）

（三十日から二月二日まで、せんだいメディアアテーク）

近代詩文や少字を中心に、計六十六点を展示。津波で浸水した紙に「流水」と揮毫した二枚組の作品の他、小・中学部と、塩釜中央幼稚園年長組園児展も併催された。

◎二〇二一仙萩会書展（実行委員長 叶 きみ子）

(三十日から二月三日まで、せんだいメディアアテーク)

少字や近代詩文を中心に、三十二人、計三十九点を展示。

「響」一文字など、各出品者の小作品も並んだ。

〈二月〉

◎第二十七回くれない会書展(会長 神作 花紅)

(二十五日から二十六日まで、仙台市若林区文化センター)

漢字、かな、近代詩の作品計四十七点。「小品の魅力」をテーマに、未就学児から七十代まで幅広い年代の作品が並んだ。

〈四月〉

◎後藤法明一家作品展

(二十日から二十五日まで、晩翠画廊)

Homeie's Art Exhibitionと題し、後藤法明とその子どもたち四人による作品展を開催。一行書、墨象、鉛筆画など計約三十点を展示。多彩な表情を見せるアートな作品が並んだ。

〈五月〉

◎第六十六回全国公募東北書道展(会長 後藤 大峰)

(十四日から十九日まで、せんだいメディアアテーク)

コロナ禍のため、二年ぶりの開催。漢字、かな、篆刻・刻字の三部門からなる「一般の部」、「教育の部」、「学生の部」の入選・入賞作品と招待作家らの作品約一、五〇〇点を展示。中国の明・清時代の文字や、平安かななどの古典を基調にした書風が特徴で、東北書道大賞・内閣総理大臣賞は保谷紅峰。

◎第四十九回書道洗心会研究部展(会長 中塚 仁)

(二十八日から三十日まで、宮城県美術館)

研究部の作品約四十九点を展示。故有井凌雲氏の作品のほか、特別企画として「蘭亭叙」の資料等も並んだ。

〈六月〉

◎鎌田直衛展

(一日から二十七日まで、塩竈市内二か所で開催。)

旧亀井邸では、「しほがま「愛」」として「愛」「逢」「會」の「あい」と読める三文字で構成した作品など十五点を展示。大正ロマンの建築と現代の書との対比を楽しめるように工夫した。

ギャラリー「ビルドスペース」では、「散、やわらぎ」として、ボール紙を筆替わりに使うなど、モダンで独創的な書風二十四点を展示した。

◎郡蜂書道展(主幹 大和小舟)

(十一日から十三日まで、ナリサワカルチャーギャラリー)

主幹の米寿を記念し、書道研究グループ・郡蜂会の会員らの作品など約五十点を展示。日高見神社の宮司でもある主幹が、五年前に亡くした妻と一緒に山桜を見た時のことを思い出し、自ら詠んだ歌の作品なども展示された。

〈七月〉

◎第六十六回全国圖南書道展(会長 八乙女 清峰)

(九日から十四日まで、せんだいメディアアテーク)

二年ぶりの開催。国内外から出品された、一般部四〇〇点、教育部八〇〇点を展示。漢字、かな、調和体、少字などの作品が並ぶ。

文部科学大臣賞 一般部 阿久津恵風 教育部 小林実加
◎八乙女清峰書展

(十日から十四日まで、せんだいメディアアテーク)

書誌七七七号を記念し、これまでの各書展への出品作や代表作約五十四点を展示。

日本芸術院賞を受賞した師、梅原清山氏の作品や、龍門二十品なども展示された。

◎第五十一回宮城書芸院展(会長 加納 鳴鳳)

(二十二日から二十五日まで、大崎市民ギャラリー緒絶の館)

近代詩文、漢字、刻字など約七十点を展示。東日本大震災で被災した南三陸町の小学生が祖母のために書いた詩を全て平仮名で表したり、被災地の俳人による九句を短冊にして組み合わせた作品など、震災から十年目の年に、会長がこれまで継続して行ってきた被災地支援を意識した作品も並び、併せて七〇〇点の教育部展も併催された。

(八月)

◎二〇二一みやぎを魅せる書展

(実行委員会代表 千葉 蒼玄)

(六日から十一日まで、せんだいメディアアテーク)

二年ぶりの開催。三十代から六十代の七十七人により、漢字、かな、近代詩文、墨象、篆刻など、様々なジャンルの作品が並び、縦三メートル、横二メートルの大作が目立つ。

東京五輪の開催に合わせ、「日本」をテーマに据え、それが自由な発想で取り組んだ。

◎第四十九回宮城野書道展(会長 佐藤 象雲)

(六日から十日まで、せんだいメディアアテーク)

一般会員は漢字を主体として約一〇〇点、教育部は二九〇点の展示。大賞は志子田紫苑、特別出品に大島崑山、大島謙介氏。

◎玄穹社社中展(主宰 千葉 蒼玄)

(七日から十日まで、せんだいメディアアテーク)

会員の作品など五五〇点を展示。千葉主宰が、東日本大震災後、新聞の震災関連記事を延べ一年かけて書き上げた「三・一一 鎮魂と復活PARTII」(縦三・六メートル、横十三メートルの大作)が、ロサンゼルス・カウンティ美術館に収蔵されたことを記念し披露した近作二十点も並ぶ。

◎宮城野書人会展・学生書道展(会長 尾形 澄神)

(二十日から二十五日まで、せんだいメディアアテーク)

書人会展は五段以と役員の作品。学生書道展は四歳から大学生までの作品。計約二〇〇〇点を展示。

月刊機関誌「書芸苑」が来年九〇〇号を迎えるのを記念して開催された。

◎尾形澄神 詩書画展

(二十日から二十五日まで、せんだいメディアアテーク)

生まれ育った仙台への思いを込め「慕郷」と題し、この十年間の展覧会出品作八十五点と未発表の作品を含めた計約二〇〇点の詩書画を展示。

自作の詩を書作品にしたもの、画(絵)を描き、自作の詩を添えたもの、画だけの作品とで構成した。筆を使わずに手で花を描いた作品など、多様な表現の作品も見られた。

〈九月〉

◎大塚耕志郎個展

(一日から二十九日まで、ライフスタイル・コンシエルジュ)

「アートハヒカリダ」をテーマに、現代書十六点を展示。作品ごとに墨の濃淡や筆致を変え、文字を絵画のように表現した作品などが並んだ。

◎第十四回瀧墨書会書作展(会長 槻田 瀧田)

(二十四日から二十六日まで、宮城県美術館)

一般の部三十一点、教育部一一九点を展示。一行の大字の漢字や、かな作品なども並んだ。

〈十月〉

◎東北書道秀抜展(会長 後藤 大峰)

(十五日から二十日まで、せんだいメディアアテーク)

役員の推薦で選ばれた会員ら約一八〇人による漢字、かな、篆刻、調和体の各分野の作品、約二〇〇点を展示。半切の四分の一のサイズで、明清時代の古典を追求した伝統書から近現代の詩を題材にした書を、軸装による「茶掛け」体裁の作品として統一して展示した。

〈十月〉

◎第十五回桃源書展(会長 田村 政晴)

(二十二日から二十五日まで、せんだいメディアアテーク)

隔年で開催している。今回は四十二名が、近代詩文や少字の現代書を中心に六十一点を展示。絵本の文章や、歌詞を題材にした身近に感じる題材など、出品者が工夫を凝らした。

〈十一月〉

◎佐藤茜祥個展 温かさのある書、日常に書をもとめて

(九日から十四日まで、塩竈市杉村惇美術館)

第七十三回塩竈市美術展において杉村惇賞を受賞したことを記念して開催。漢詩を中心に漢字一文字の作品まで、二十一点を展示した。

◎第六十回洗心書道展(会長 中塚 仁)

(十一日から十四日まで、宮城県美術館)

小学生から大人まで、会員による作品約二五〇点を展示。河北書道展初代運営委員長の高有井凌雲氏、同五代運営委員

長山崎晁秋氏の作品も展示された。

◎第二回圖南書道役員展（会長 八乙女 清峰）

（十二日から十七日まで、せんだいメディアアテーク）

会役員九十五名よる書展。漢字、かな、篆刻の伝統書を中心に展示した。

◎第三十八回櫻仙書道展（代表 片倉 恵仙）

（二十七日から二十八日まで、若林区文化センター）

漢字、調和体の会員作品四十七点、教育部作品十八点を展示。櫻墨書院名誉会長植松弘祥、同会長植松龍祥氏の作品各三点も展示された。

◎第四十五回素心書道会書展（会長 大浦 清漣）

（二十六日から二十八日まで、宮城県美術館）

漢字、かな、調和体の作品約一二〇点を展示。併せて、学生部約三〇〇点の教育書道学生部展、第二十回となる役員展も併催された。

（十二月）

◎第六十九回川開書道展（日院書道会主管）

（三日から六日まで、せんだいメディアアテーク）

「復興」「オリンピック」「国名」をテーマに、文部科学大臣賞三点をはじめとする三、三八五点を展示。併せて第五十七回日院書道会展も併催され、二〇二点の作品が展示された。

◎第十四回河北小中学生書道展（河北新報社主催）

（三日から五日まで、TFUギャラリーミニモリ）

最高賞の河北賞を含む上位賞十五点、金賞五十点、銀賞三〇一点、銅賞六六九点と入選作品一、九六五点の計約三千点を展示。上位賞と金賞の作品・氏名並びに銀賞と銅賞の氏名を三日の新聞紙上に掲載した。

前年は紙上展のみであったが、二年ぶりに会場展示も行った。目当ての作品を前に記念撮影する家族連れや、入賞作品を熱心に鑑賞する書道関係者らでにぎわった。

◎第七十回県高校書道展（宮城県教育委員会等主催）

（七日から十二日まで、宮城県美術館）

漢字、かな、漢字かな交じり書、篆刻・刻字、大字の五部門で、最高賞の推薦、特選、金賞以上を受賞した三〇〇点を展示。杜甫や松尾芭蕉といった古典から引用した一節や、生徒が自作した言葉を力強く揮毫した作品が並んだ。

復活と継続。様々な制約の中、関係者皆さんの思いにより、活動が展開された一年であったと感じる。この活動が今後も継承され、灯は途絶えることなくともされていくものと確信するところであり、それぞれの活動、各個人或いは指導者の不断の努力に、心より敬意を表するものである。

寄稿にあたっては、できる限り情報を収集し取りまとめた

ものの、紙面等の都合上割愛せざるを得なかつた事、敬称を略させて頂いた事をご容赦願いたい。

渋^{しぶ}

谷^や

青^{せい}

龍^{りゅう}

(宮城県芸術協会書道部部长)



「第十一回蓮紅社書展」太田 蓮紅



鎌田直衛展 旧亀井邸

写真

はじめに

二〇二一年。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、一年延期した「東京二〇二〇オリンピック・パラリンピック（以下「東京五輪二〇二〇」）が開催された。東日本大震災からの「復興五輪」を理念に掲げた東京五輪二〇二〇は、八月三十一日、宮城スタジアムでのサッカー競技の全日程を終え、福島県のソフトボール・野球を含めた被災地開催に幕を下ろした。本来は全ての人類が祝福される平和の祭典であるはずだが理念喪失との指摘は絶えず、果たして復興五輪は実現できたのだろうか。

反面、今回ほど一般に「パラリンピック」が「オリンピック」以上に注目された事はなかったのではないだろうか。「パラリンピック」の開会式でのロックアーティストの布袋寅泰さんのパフォーマンスは多くの人々を元気づけるものだったと言えるだろう。さて、様々なスポーツイベントが無観客や観客数を制限しての開催となったが、第一〇三回全国高等学校野球選手権大会で甲子園初出場の学校に、陽性者と濃厚接

触者が出たため、出場を辞退することになったのは残念だった。大リーグでは、ロサンゼルス・エンゼルスの大谷翔平選手は投打二刀流の大活躍で数々の記録を残し、野球界を湧かせ大きく報じられた。

また、七月に、中国共産党の創立一〇〇周年の祝賀大会が行われた。コロナを完全に封じ込め、また冬の北京五輪を完全にコントロールしたという成果を持って、国家主席の習近平氏は更に強大な権力の高見に立つのであるうか。将棋の藤井聡太氏が最年少の五冠に躍進した年でもあった。その姿は様々なフラッシュライトを浴びた中でも特に際立っていただろう。最後に、フラッシュライトを浴びたといえば、実業家の前沢友作氏だろう。前沢氏をのせた宇宙船が打ち上げられ、宇宙ステーションへと旅立っていく姿も話題になっていた。凡そ二〇二一年は、幾度となく乱高下するコロナ患者数に振り回されながら、医療関係者による絶え間ない努力によって、コロナが収まった合間をぬって文化芸術のイベントが開催されるという一年だった。ワクチンの大規模接種が全国に至る所で行われた年だった。それでは、今年度の「写真展」

の概況を振り返ってみたい。

国内の写真展の概況

二〇二一年度の始まりは、全国的に前途多難だった。新型コロナウイルスの感染拡大の防止の為、三回目の緊急事態宣言が発令され、様々なイベントが急遽中止や延期を余儀なくされた。ようやく六月頃から展覧会は始まったが、四回目の緊急事態宣言の発令により、またすぐに、中止や延期といった状況に覆われていた。

そんな折、東京都写真美術館で開催された「新・晴れた日 篠山紀信」などは、多くの人々が観覧に訪れたくなる展示だったと思う。篠山紀信ならではの明快な作品群の中でも、一九七四年に『アサヒグラフ』に連載された「晴れた日」のシリーズと、東日本大震災の後の「ATOKATA(二〇一一)」が、興味深かった。もっと様々なシリーズや作品を見たくなる展示だったと言える。また、仙台文学館で開催された「写真展 星野道夫 悠久の時を旅する」も評判が良かった。取材中の事故で亡くなった星野道夫の作品展。二十五年を経た今もお、心打つ大自然や動物の写真と美しい文章。コロナ禍の中でも開催できて本当に良かったと思う。それから、「SARP 仙台アーティストランプレイス」(仙台市青葉区)で連続の写真展を開催し続けてきた「仙台写真月間2021」。今年

度も良かった。仙台、宮城、東北で真摯な作品制作を続けている若き写真家たちもちろんだが、その写真家たちをフォローしてきたSARPの二〇年にわたる活動には本当に敬意を表したい。

秋になり「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭2021」が、京都文化博物館別館などで開催された。毎年四〜五月に行なわれてきたが、この時期に開催されることになった。以前より規模が縮小された事が逆にコンパクトに見て回れるイベントになったと評判も良かった。特にオランダの出展作家、アーウィン・オラフは興味深い。

冬に入り、岩手県立美術館で開催された「本城直季 (III) real utopia」には驚いた。東日本大震災発生から三ヶ月後の東北を写した「tohoku 311」シリーズ、さらには岩手県を被写体とした本展のための撮り下ろし作品など、未公開作品を含む約二百点はとても新鮮だった。それから、秋田県立美術館での「生誕百二十年 木村伊兵衛回顧展」が開催された。木村伊兵衛が繰り返し秋田を訪れて撮影した「秋田おぼこ」などの秋田シリーズは、木村伊兵衛の代表的な作品と言える。とても、意義深い展覧会だったと思う。他にも「記憶は地に沁み、風を越え 日本の新進作家 vol.18 会期：十一月六日〜翌年一月二十三日、東京都写真美術館や、「語りの複数性」会期：十月九日〜十二月二十六日、東京都渋谷公園通りギャ

ラリーなども魅力的な写真が多く展示されていたことを併せて記しておく。

最後に。昨年度の号では、我国の写真文化に大きな影響を与えてきた月刊誌『アサヒカメラ』が、二〇二〇年七月号をもって休刊したことをお伝えしたが、大きな影響を与えてきた『日本カメラ』も二〇二二年五月号をもって休刊となった。『日本カメラ社』は日本カメラの休刊とともに解散となり、ここに七十三年間の歴史に終止符を打つこととなった。また、キヤノン主催で、一九九一年からはじまった「写真新世紀」は、二〇二一年度をもって公募は、終了した。それでは二〇二一年の一月からの県内の動きを見ていきたい。

一月―三月の動き

○「第五十七回観光のしおがま写真コンクール」入選作品展

会期 一月二十六日～四月十五日

会場 塩竈市民図書館など（塩竈市）

主催 塩竈市、市観光物産協会

百十九点の応募作品の中から、十七点の入選作品が選ばれた。自由写真部門では、昇る朝日を背景に塩竈市魚市場に着岸する漁船を撮影した、日野俊文さんの「マグロの水揚げ」が特選に選ばれた。

○伊・パラ五輪選手写真展

会期 一月三十日～二月三日

会場 せんだいメディアアテーク 6階ギャラリー4200

（仙台市青葉区）

主催 仙台市 岡山県矢掛町

世界的な写真家オリヴィエロ・トスカ・ニ氏による、イタリアのパラリンピック選手の写真展。東京五輪・パラリンピックでイタリアのホストタウンを務める仙台市が主催し、選手のありのままの姿を大型パネルで展示した。

◎「写真3人展」

会期 二月二日～七日

会場 SARP 仙台アーティストランプレイス（仙台市青

葉区）

仙台市のベテラン写真家である、樋口徹さん、高橋力さん、伊藤トオルさんによる写真展。不思議な雰囲気を持つ東北写真や、抽象的な表現の写真など、独自の世界を築いた個性豊かな作品が並んだ。

○写真展「荒浜の思い出、そして今、未来へ」

会期 二月二日～十四日

会場 若林区文化センターアートギャラリー「わかぶん」

（仙台市若林区）

東日本大震災で大きな被害を受けた、仙台市若林区荒浜地区の風景をテーマにした写真展。荒浜で活動が続けてきた佐

藤豊さんによる写真約八十点が展示され、震災から十年を迎える荒浜の復興の歩みを伝えた。

○第二十六回まほろばの風景「七ツ森」展

会期 一月三十一日～二月十四日

会場 まほろばホール（大和町）

主催 大和町など

大和町のシンボル、七ツ森をはじめとする町内外の風景や祭り、伝統行事を題材にした写真と絵画の展示会。写真一般、絵画一般、絵画小中学生の三部門の全応募作品と、招待作品の計五百三十点が展示された。

○写真展「スマホ大衡村百景展」

会期 二月一日～二十八日

会場 大衡の村ふるさと美術館（大衡村）

大衡村の村民がスマートフォンで撮影した、村の風景や人物の写真を集めた写真展。村民三十四人による五十四点の写真が展示され、四季折々の自然に焦点を当てた力作が揃った。

○小岩勉 個展

会期 二月二日～三月三十一日

会場 THE6（仙台市青葉区）

仙台市青葉区の写真家小岩勉さんによる個展。青森、沖縄両県の米軍基地周辺、千葉県成田市三里塚の空港反対デモなど、一九八六～八八年に撮った、小岩さんにとって原点とい

える十点の写真が展示された。

○第五回気仙沼・南三陸フォトコンテスト

結果発表 二月四日

主催 気仙沼・本吉地域広域行政事務組合主催

二〇一五年まで十回続いた「リアス四季フォトコンテスト」を改称して実施されたコンテスト。最優秀賞には気仙沼市赤岩平貝の菊田清一さんの「気嵐の満船入港」が選ばれた。

○若手アーティスト支援プログラム Voyage

かんのさゆり・菊池聡太朗展

「風景の練習 Practicing Landscapes」

会期 二月六日～三月二十八日

会場 塩竈市杉村惇美術館 企画展示室

主催 塩竈市杉村惇美術館（塩竈市）

かんのさゆりさんによる、仙台近郊や石巻、閑上、女川などの沿岸地域で撮影したここ数年で現れた風景、新しい住宅地を中心とした写真作品と、菊池聡太朗さんによる日本から六千キロメートル離れたとある家についての考察に、塩竈やその周辺地域を訪ね歩き出会った素材を加えたインスタレーションを、「風景の練習」というテーマのもとに構成し展示した。

関連イベント

風景について考えてみるイベント「歩行」

日付 二月二十三日

出展作家とともに視点を共有しながら塩竈を歩き、そこで出会った素材をもとに風景について考えた。

クレストーク 畠山直哉×かんのさゆり×菊池聡太郎

日付 三月十四日

写真を通して都市や自然に向き合い続ける畠山直哉さん（写真家）と、出展者が、刻々と移り変わっていく現代の風景について語り合った。

○写真展「つづく展3」

会期 二月十三日～三月十一日

会場 石ノ森萬画館（石巻市）

震災からの復興をテーマにした、石巻にゆかりのある写真家である鈴木省一さんと、渡辺裕紀さんの写真展。朝の市内の風景写真や、震災から現在までのスナップ写真など四百五十点以上が展示された。

○写真展「スタートライン」

会期 二月十九日～三月一日

会場 東松島あんでなしよっぶまちんど（東松島市）

航空写真家である粒木友香里さんの個展。航空自衛隊松島基地所属の曲技飛行チーム「ブルーインパルス」を基地周辺や全国の航空祭などで撮影した十一点が展示された。

○写真展「みちのくのとき たねまぎ桜」

会期 二月二十日～三月十四日

会場 雄勝視伝統産業会館（石巻市雄勝町）

被災地で桜や人々の暮らしを撮影している写真家大沼英樹さんの作品展。各地の桜をメインに農作業の様子、四季の風景など約六十点を展示した。

○第十四回栗原市写真展

会期 二月二十七日～三月七日

会場 栗原文化会館（栗原市）

主催 栗原市教育委員会など

「おらほの田舎」をテーマに栗原の風景や祭りなどを収めた、百十四点の写真が展示された。冬の内沼や鷺沢地区のさくら、若柳の棚田などをとらえた力作が揃った。

○写真展「手紙／深沼ビーチクリン記録展」

会期 二月二十七日～三月十四日

会場 せんだい3・11メモリアル交流館（仙台市若林区）

主催 フカヌマビーチクリン

毎月約百人が参加する、仙台市若林区荒浜の深沼海岸での清掃活動を収めた写真展。荒浜の交流スペース「海辺の図書館」のメンバーや清掃活動に参加する地元企業「ユーメディア」の社員が撮った約二百点の写真が並んだ。

○吉川譲写真展

会期 二月二十七日～三月十四日

会場 すがとよ酒店（気仙沼市）

東北の沿岸被災地の記録写真を撮影している写真家吉川謙さんの写真展。吉川さんが初めて気仙沼を訪れたときから交流が続く「すがとよ酒屋」で開かれ、週刊誌に掲載した写真を含む約五十枚が展示された。

○「やまがた気仙沼会」写真展

会期 三月八日～十二日

会場 文翔館（山形市）

主催 やまがた気仙沼会

東日本大震災で大きな被害が出た気仙沼市の十年間の歩みを伝える、山形県内在住の気仙沼市出身者らが主催する写真展。復興へと向かう気仙沼市の姿を通して山形の人々に防災への備えを呼びかけた。

○写真展「saniku 再生のうみ」

会期 三月十日～四月四日

会場 仙台うみの杜水族館（仙台市宮城野区）

水中写真家鍵井靖章さんによる、宮古市と宮城県女川町の手で撮影した五十点の写真を紹介する写真展。震災後、時間とともに再生した海の生き物たちの写真が展示され、力強い命の営みを伝えた。

○写真展「かくだ 春から初夏へ」

会期 三月十六日～四月十五日

会場 阿武隈急行角田駅コミュニティプラザ（角田市）

角田市内などのカメラ愛好家グループ「写真を楽しむ会」の作品展。市内各地の三月～七月の様子を紹介する二十一作品が展示された。

◎キラージロチン個展「登録手記」

会期 三月十九日～二十四日

会場 せんだいメディアテーク 5階ギャラリー3300

B2（仙台市青葉区）

内容 石巻市での二年間に渡る活動の集大成。幅十二メートルを超える『踏破登録』をはじめ、ある土地の時間軸と語られない物語を、絵画、映像、インスタレーションといったさまざまな手法を用いて展示した。

四月～六月の動き

○写真展「1960年5月24日～あの頃とそれから」

会期 四月二十九日～六月十三日

会場 杉村惇美術館（塩竈市）

塩竈のまちの記憶をたどる企画展「まちと記憶と映画館」の一環として開催された、チリ地震津波の写真展。被災した街並みの写真百点とともに、現在の定点写真、学芸員が聞き取った被災者の体験談などが紹介された。

○写真展「minamo」

会期 五月十一日～十六日

会場 ギャラリー Sen (仙台市青葉区)

北海道俱知安町の写真家徳丸晋さんの個展。地元にある羊蹄山の火山湖「半月湖」の水面に映る紅葉など、自然の豊かな色彩を独特の視点で捉えた写真二十八点が展示された。

○写真展「悠久の時を旅する」

会期 五月十二日～六月二十七日

会場 仙台文学館(仙台市青葉区)

米アラスカ州に暮らし、厳しい極北の大自然や先住民の生活を写真とエッセーで伝え続けた星野道夫さんの、没後二十五年で五度目の全国巡回写真展。北極圏での野生動物の写真や、雄大な風景など約百点が展示された。

○写真展「あの場所から・2」

会期 六月一日～六日

会場 ギャラリー SARP (仙台市青葉区)

仙台市泉区の写真家木村隆さんの、仙台港向洋海浜公園や菖蒲田浜などを題材にした写真約四十点を展示した個展。多くは夜明けの海辺の写真で、朝焼けや雲間から光が差す様子などさまざまな表情の作品が並んだ。

○写真展「東日本大震災から10年・HOME ～あの時を刻んで」

会期 六月八日～十三日

会場 宮城県美術館県民ギャラリー(仙台市青葉区)

「人の命が失われた事実を忘れてはならない」との思いから、東日本大震災をテーマにした写真を撮り続けてきた穴戸清孝さんの写真展。宮城、岩手、福島で震災後十年間に撮りためた写真四十九点が展示された。

七月～九月の動き

○「ど根性ひまわり10世 笑顔の写真展」

会期 七月十六日～八月二十三日

会場 みやぎ東日本大震災津波伝承館(石巻市)

津波による塩害に負けずに育ったことで、勇気と希望のシンボルとなっている「ど根性ひまわり」の十世代目の写真展。被災地で育ち、種を贈る形で全国に広がったひまわりと、人々の笑顔の写真約八十点が展示された。

○写真展「三陸復興国立公園展」3・11から10年」

会期 七月二十日～二十五日

会場 晩翠画廊(仙台市青葉区)

アマチュア写真家の泉山元さんと堀井裕子さんによる、東日本大震災の被災地の写真展。震災から十年がたった三陸復興国立公園や、震災直後の沿岸部の光景など、復興への道程を感じさせる写真約三十点が展示された。

○写真展「平和を願って」戦争写真展」主にアジア・太平洋

戦争」

会期 八月十三日～十五日

会場 仙台市福祉プラザ (仙台市青葉区)

満州事変から終戦までに県内や国内外で撮影された白黒写真約五十点を展示。仙台空襲で焼け野原となった市街地など、戦地のむごさを伝える写真が並んだ。

● 駒崎佳之写真展「鹿の夢 Deers Dreaming - 三陸と針畑にて」

会期 八月十三日～十八日

会場 せんだいメディアアテーク 5階ギャラリー3300

㊤ (仙台市青葉区)

内容 元新聞社の報道カメラマンだった滋賀県の写真家、駒崎佳之さんの個展は、駒崎さんの暮らす山間集落の営みや自然界の命の循環を捉えた「針畑」と、「三陸」の作品群六十四点で構成された。

◎ 仙台写真月間二〇二二

会期 八月三十一日～十月三日

会場 SARP 仙台アーティストランプレイス (仙台市青葉区)

八月三十一日～九月五日 阿部明子

「崖にたつ、ヤトを待つ」

九月七日～十二日 花輪奈穂

「傍らに立つ」

九月七日～十二日 高橋親夫

「ここにいた時は子どもだった」

九月十四日～十九日 小岩勉 [FLORA#07]

九月十四日～十九日 野寺 亜季子 [a#3]

九月二十一日～二十六日 植田 優子 [雨包、粒子]

九月二十八日～十月三日 桃生 和成 [今日のまさこ]

○ 第十二回フォト・バイオグラフィ「道」

会期 九月十七日～二十二日

会場 せんだいメディアアテーク 5階ギャラリー3300

㊤ (仙台市青葉区)

主催 (医) 初心会社のホスピタル・あおば

十月～十二月の動き

○ 写真集『いつもと違う日々』刊行記念の作品展

会期 十二月十八日～二十六日

会場 ギャラリーチフリグリ (仙台市宮城野区)

コロナ禍で新しい生活様式を余儀なくされた人々の日常をまとめた、仙台市若林区の写真家布田直志さんの写真集刊行を記念して行われた作品展。写真集には宮城県内の三十九家族のポートレートなど、モノクロ写真七十九点が収録されている。

イベント

○ 「仙台フォトロール in 中心部商店街」

開催日 一月三十日、三十一日

主催 一般社団法人まちくる仙台

仙台市青葉区の名所を撮影してポイントを集め、点数を競うイベントで、約二十人が参加した。撮影した写真のグランプリには、「雪の稲荷小路」が選ばれた。

○『ひらやま写真館』再オープン

東日本大震災後、古里のための支援活動が続けてきた塩竈市出身のフォトグラファー平間至さんが、三月十二日、祖父が創業した塩竈市の「ひらやま写真館」を再オープンさせた。

写真集

○『未来へつなぐ千年桜』

出版社 玄光社

発行日 二月二十四日

東日本大震災の被災地で桜を撮り続けてきた写真家大沼英樹さんの集大成となる写真集。震災から十年の変わりゆく街並みと、力強く生きる人々とのエピソードを桜を通じて伝える。

○『The Unseen』

仙台市の写真家木戸孝子さんによる、東日本大震災の被災地の美しい姿を伝える写真集。キャノンの協力で限定版二十部が製作され、廉価版の自費出版を目指してクラウドファン

ディングが行われた。

○『青森 1950-1962 工藤正市写真集』

出版社 みず書房

発行日 九月十六日

写真家、工藤正市の遺した写真を三百ページ以上にまとめた決定版というべき写真集。没後の二〇一八年に、荷物の整理をしていた娘の工藤加奈子さんが、押入れの奥からネガフィルムが入った大小の段ボール箱を発見し、ふたたび注目が集まるようになる。スキャンした画像をインスタグラムに上げたところ、日本だけではなく世界各地から大きな反響があり発行に至った。

○『僕は独り暮らしの老人の家に弁当を運ぶ』

出版社 青幻舎

発行日 八月三十一日

福島あつしの作品「弁当 is Ready」は、二〇一九年に KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭の関連企画 KG+ の枠で展示され、同年度の KG+ AWARD グランプリを受賞。それをさらに練り直して完成させた、同シリーズの写真集ヴァージョンを青幻舎から刊行。

おわりに

「新型コロナウイルスの感染拡大」は、文化芸術のイベン

トのあり方を一変させた。人と人が集うこと自体、疫病の感染を拡大させる可能性がある中で、「文化芸術」の事業は沈黙やソーシャルディスタンスといった対策を講じやすい「展示」や「オンライン」というイベント形態に移行した。震災後十年目という区切りを迎えた年に、死を大勢の人々と悼むことができない、もどかしい状況が続く年でもあった。

せんだいメディアテークは宮城県仙台市に立つ公共文化施設として、震災後は主として被災地の心情に寄り添った活動を展開してきた。しかし、十年を経て急速に「震災への関心」が、忘れられようとしてきているようにも思える。ひとつには、この「新型コロナウイルスの世界的流行」という新たなパンデミックの脅威があり、もうひとつは「ロシアのウクライナ軍事作戦」による侵略戦争で世界は激変したように思う。二〇二一年の芥川賞を受賞した、石沢麻依氏の『貝に続く場所にて』にあるように、「人を隔てる距離と時間を言葉で埋めていく」という状況はまだ続いていくのだろうか。

再度振り返って、仙台では震災を視座に置く様々な試みが多く催された。メディアテークとしても、二〇一二年、志賀理江子氏の個展「螺旋海岸」をはじめ、二〇一四年に開催された「記録と想起」展もそれまで蓄積されたアーカイブを展示として昇華させた貴重な展示となった。また、二〇一六年の「畠山直哉 まっぶたつの風景」も作家性を存分に発揮

する展示を行った。そして続く二〇一九年の個展「青野文昭のもの、ねむり、越路山、こえ」など全国的にも評価されてきた展示を続けてきた。また、毎年三月に開催してきた「星空と路」では「3がつ11にちをわすれないためにセンター」参加者の活動を紹介する展示、上映とトーク、配信イベントを実施を経て、二〇二一年の「ナラティブの修復」は、この十年を総括した展覧会だったと言えるだろう。制作の手法としても市民やアーティスト、その他、様々な関係者と集団で制作を行い、これを全国に問う活動を多く行ってきた。しかし、これからも、時間による風化に埋没しないためにはどうしたら良いのか。本来の意味で被災の当事者とそうでない者とを隔てる距離と時間を様々な表現や活動を通して埋めていくには、まだ十年という歳月は短く浅いのもかもしれない。

清しみず水みづ有あ
(せんだいメディアテーク企画事業係長・写真史)



◎「写真3人展」 会場 SARP 仙台アーティストランプレイス c2 (仙台市青葉区)



◎キラーギロチン個展「登録手記」
会場 せんだいメディアテーク 5階ギャラリー 3300 b2 (仙台市青葉区)



◎駒崎佳之写真展「鹿の夢 Deers Dreaming- 三陸と針畑にて」
会場 せんだいメディアテーク 5階ギャラリー 3300 (仙台市青葉区)



◎写真展「仙台写真月間 2021」
会場 SARP 仙台アーティストランプレイス (仙台市青葉区)

文芸

概観

二〇二一年（令和三）、コロナ禍の二年目を迎えた。東日本大震災から十年目という節目の年は、世界を覆うコロナ禍のために宮城県の多くの自治体が、コロナ感染拡大を危惧して追悼式を中止する事態となった。十年を経ても未だ多くの行方不明者があり、復興も未だ途次である。しかし、災害列島に暮らす私たち日本人は、その気質である他者を気遣う優しさを力にこの災害から立ち直ってきたのである。

コロナ禍の一年を振り返ると、二〇二〇年末は新型コロナウイルス感染拡大の第三波のピークにあたり、国は年末年始について帰省の抑制や自宅ですずかに過ごすようにとのメッセージを発していた。

宮城県では二月に入ると感染者が一日十人前後からゼロを記録する日があるなど感染者は減っていった。しかし、三月になると感染者は増え続け、仙台市と宮城県は独自の緊急事態宣言を出した。三月三十一日には一日の感染者が二〇〇人とそれまでの最高を記録し、第四波のなかで「まん延防止等重点措置」（四月五日～五月六日）が適用された。

この状況下で開催された東京オリンピックのサッカー予選は、利府のサッカースタジアムで、有観客で男女十試合（七月二十一日～三十一日）が開催された。

「まん延防止等重点措置」の効果で減り始めた感染者は六月には一桁を記録したが、八月三十一日には三〇一人の感染者を出すなど第五波のピークを迎えた。宮城県に再び「まん延防止等重点措置」（八月二十七日～九月十二日）が適用された。

十月に入ると感染者は一日一人あるいはゼロという日が続いた。十一月にオミクロン株（コロナウイルスの変異株）が見つかり先のことが懸念されたが、十二月三十日には感染者ゼロ、三十一日には一人と、感染の不安が最早払拭できるとの期待と希望が現実になるのではないかという状況になっていった。

突然のパンデミックで自制しなければならぬことが、生活のさまざまな場面であり、3密を避けるといふコードは、コミュニケーションの在り方から体温を失わせたとように思う。昨年と変わらず、多くのイベントや大会が中止となるな

か、文学の活動は止まず深く継続している。

この年の最大の出来事は、一九六六年創刊で五十五年継続し百五十号を数えた佐藤通雅の「路上」が七月発行を以て終刊したことだ。「路上」終刊号の「ゆきしる庵雑記」に「一九六〇年安保闘争は、路上でこそ行われた。そのイメージから誌名を取りました。この時代にはあらゆる権威から自立して表現の場を確保しようという個人誌・個人編集誌が何冊も刊行されました。「路上」もその精神を受け止めながら、出発しました」とある。それらの一つは一九六一年創刊の「試行」（東京）で、吉本隆明、谷川雁、村上二郎の三人でスタートし、一九六四年からは吉本の単独編集となり、一九九七年まで三十六年間で七十四号を発売。また、もうひとつは北川透の「あんかるわ」（豊橋市）で一九六二年創刊、一九九〇年八十四号で終刊。さらに村上一郎の「無名鬼」（東京）は一九六四年創刊、村上の死で一九七五年、村上の追悼号（二十一号）を以て終刊している。これらの三誌に伍して「路上」が自立誌として思想の場として在り続けたことは、文学と思想に関わる同時代の人間にとって、大きな勇気と励ましとなった。と同時に、ジャーナルでない、そして地方で発刊される自立誌が、文学的・思想的営為として力を持つことを証した。自立誌最後のランナーこそが「路上」だった。

この一年、文芸関係では昨年のコロナ下の活動の経験を踏まえ、会場中心の大会は中止になるものが多かったが、誌上大会などの工夫の結果、活発な文芸活動が展開された。

一月、東日本大震災後、俳句界では最も権威あるとされる蛇笏賞を受賞し、東北俳壇の隆盛に寄与したとして高野ムツオが第七十回「河北文化賞」を受賞した。

牛島富美二が、地域文化振興への貢献が讃えられ文化庁の令和三年度地域文化功労者表彰を受けた。

七月、第六十五回芥川賞に『貝に続く場所にて』で、仙台市出身でドイツ在住の大学院生石沢麻依が選ばれた。東日本大震災の記憶をテーマに、幽霊が生者と共存する設定で描かれたデビュー作。宮城県出身では一九九一年に『自動起床装置』で受賞した辺見庸（石巻市出身）以来三十年ぶり。

第四回仙台短編文学賞（選考委員…いとうせいこう）、大賞に「海、とても」に森川樹（兵庫県在住・女川町出身）が選ばれた。選考委員のいとうせいこうは大賞作品について「ここには「被災」と「それを語り継ぐ困難」に関して普遍的なことが書かれており、しかも具体的なシーンによって新しい「あるべき未来」が提示されるのも小説らしい」と評した。

第七十四回日本推理作家協会賞（評論・研究部門）に探偵小説研究家真田啓介（仙台市）の『真田啓介ミステリ論集探偵小説の愉しみⅠ フェアプレイの文学』『同Ⅱ 悪人たち

の肖像』。

日本詩人クラブ詩界賞特別賞に白石市の詩人鈴木梅子の苦難の生涯を掘り起こした西田朋（角田市）の評伝『鈴木梅子の詩と生涯』が選ばれた。

第二十三回小野十三郎賞の詩評論書部門特別奨励賞に九里順子（仙台市）の『詩人・木下夕爾』。

第十回東北川柳文学大賞に西恵美子（白石市）が選ばれた。第四十八回東北短歌大会（誌上大会）の河北新報社賞は「竹の子がすくくと伸びる静けさに改札口を待ちくるる孫」福井祥子（十和田市）。

宮城県芸術選奨新人賞に浅川芳直（名取市）が選ばれた。昨年、俳句四季新人賞を受賞、句作の力量に加え大学院の研究生活の傍ら東北に身を置く若手俳人を中心に二〇一七年から年一回俳誌「むじな」を発刊している活動などが評価された。

第三十九回兜太現代俳句新人賞に小田島渚（仙台市）。

第三十六回全国高等学校文芸コンクールで宮城県から詩部門で優良賞に村山真子（古川）、短歌部門で優秀賞に小宮瑠華（宮城第一）が選ばれた。

仙台文学館の第二十四回「ことばの祭典」（昨年は中止）最高賞に短歌「心は帆かなしく広がる海原のことば受け止めよと生きれば」藤田恵里奈（群馬県）、俳句「三月の海が溢

れる仏壇に」鎌田京子（仙台市）、川柳「君はまだ海辺に立つたままでいる」星出冬馬（島根県）。

河北新報三月十一日に歌人佐藤通雅と俳人高野ムツオの対談が掲載された。河北新報歌壇・俳壇の震災後十年を振り返り「亡き人の分まで歌う、沈黙の力に思いを託す」と題された意義深い対談であった。また、河北新報紙上で震災十年震災詠全国公募が実施され、河北新報俳壇・歌壇の四人の選者によって百六十作品が選ばれ「震災詠公募 入選・佳作」としてネット上で公開された。

仙台で創刊された日本で初の童謡専門誌「おてんとさん」の一〇〇年の歩みを振り返る展示が三月仙台文学館、五月に東北電力グリーンプラザで開かれた。

宮城県芸術祭の文芸部門では、コロナ感染拡大防止のため一般公募を中止。宮城県芸術祭表彰式は、十一月二十五日、感染リスクのある祝宴を取りやめ、茶話会を取り入れた新たな形式で、ホテルメトロポリタン仙台で実施。主催・共催関係者、受賞者などの参加で行われた。宮城県芸術協会会員の文芸賞受賞者は以下の通り。宮城県芸術祭賞 俳句 野田青玲子（仙台市）、宮城県知事賞 詩 汐海治美（仙台市）、短歌 沼沢修（仙台市）、俳句 宮野かほる（美里町）、川柳 濱田則子（仙台市）、河北新報社賞 川柳 須田たかゆき（仙台市）、公益財団法人宮城県文化振興財団賞 俳句 佐野久

乃（仙台市）、宮城県芸術祭奨励賞 短歌 堀江正夫（栗原市）。
『二〇二一宮城県文芸年鑑』は通常の会員作品のほか、特別企画「震災から十年」として、詩十篇、短歌四十四首、俳句四十七句、川柳三十八句、エッセイ三篇の一四二人の作品が特集として加えられた。

宮城県芸術協会主催の文学散歩は、コロナ下ではあったが震災十年の節目であることを考慮し、十月七日、日帰りで参加人数もコロナ感染拡大防止を前提に二十一名と従来の半数に抑え実施された。訪問先は石巻市の旧大川小学校震災遺構、旧野蒜駅のある東松島震災復興伝承館。

新聞関係の選者は、河北新報歌壇は佐藤通雅、花山多佳子、同俳壇は高野ムツオ、西山睦、同柳壇は雲石隆子、朝日新聞宮城版みちのく歌壇は梶原さい子、同俳壇は渡辺誠一郎、同柳壇は木田比呂朗、読売新聞宮城版よみうり文芸歌壇は渡英子、同俳壇は上田日差し、同柳壇は千葉朱浪、毎日新聞宮城版文園歌壇は金沢孝一、同俳壇は坂内佳禰、同柳壇は新藤孝廣がそれぞれ担当した。

各部門

詩

第二十二回白鳥省吾賞（栗原市主催）に一般の部最優秀賞は井上尚美（静岡県島田市）、小中学校の部は山田陽輝（栗

原市若柳中三）。十月十七日第六十二回晩翠わかば賞晩翠あおば賞（仙台市・仙台文学館主催）の贈呈式が行われた。わかば賞に「りょうしの子ども」大和恵信（石巻市雄勝小二）、あおば賞に「十五年」佐藤雛（岩沼市岩沼中三）が選ばれた。あきは詩書工房主催の第一回秋吉久美子賞に八城裕貴（仙台市）、いがらしみきお賞に能美政通（秋田県仙北市）、第七回YS賞に真土もく（三重県桑名市）。

河北新報紙上で「被災地での対話」と題して吉増剛造と和合亮一の対談が組まれた。「現代詩手帖」とのコラボ企画で、震災後の困難な詩の課題が地方紙と全国誌で展開された。

宮城県詩人会の詩祭、ポエムカフェは中止。

活動としては「詩と絵の二人展」玉田尊英&松宮榮典（三月十九日〜二十三日、東北工大一番町ロビー）「詩人吉増剛造講演会」（三月二十日、聞き手 佐藤洋子）「詩人鈴木梅子の世界展」西田朋主催（五月十七日〜二十三日、白石市壽丸屋敷）などがあつた。また原田勇男作詞の混声合唱組曲『君の胸の丘では』（作曲・森山至貴）の楽譜が出版された。

詩集

宮城県詩人会編『宮城の現代詩二〇二一』小関俊夫『飼料米と青大将』金子忠政『楔、アリバイ』岩崎航『震えたのは』秋亜綺羅『十二歳の少年は十七歳になった』清岳こう『雲また雲』汐海治美『人生は哀しみだらけII』渡辺仁子

『虹のブーツ』 玉田尊英 『風の岸辺』

詩誌

「回生」「霧笛」「ひびき」「風花」「仙台演劇研究会通信ACT」「a.s.」「とんてんかん」「ココア共和国」「白鳥省吾研究会会報」「よそ見通勤」「想音窟だより」「風の靴を穿いて」「THROUGH THE WIND」「ササヤンカの村」

小説・散文・絵本

第四回仙台短編文学賞は三月六日に決定。大賞「海、とても」森川樹（兵庫県在住・女川町出身）、仙台市長賞「蛭」本郷久美（埼玉県在住）、河北新報社賞「骨」時田日向（神奈川県在住）、プレスアート賞「月にかける」東風谷香歩（福島県在住）、東北学院大学賞「雑踏を奏でる」茂木大地（仙台市）、東北学院大学賞奨励賞「正解」川上新（仙台市）が選ばれた。

全国同人雑誌優秀賞「特別賞」に渡辺光昭の「狐火」が選ばれた。同人誌「仙台文学」が全国同人雑誌賞「特別賞」を受賞。

小説

近江静雄『南三陸 海浜の記憶』 佐伯一麦『アスベスト』 伊坂幸太郎『ペッパーズ・ゴースト』 伊集院静『ミチクサ先生』『いとまの雪 新説忠臣蔵・ひとりの家老の生涯』 恩

田陸『灰の劇場』『薔薇のなかの蛇』『愚かな薔薇』 佐々木ひとみ『みちのく妖怪ツアー オンラインゲーム編』

絵本

あいはいらひろゆき『笑顔が守った命―津波から一五〇人の子どもを救った保育士たちの実話』 吉野作造記念館『ケロッキーパーとおおきなあな』

文芸誌

「仙台文学」「波動」「新生」（東北新生園） 随筆中心の「みちのくふだん記」 詩と随想の「みちのく春秋」「麦笛」

短歌

第六十八回宮城県短歌大会（主催河北新報社・仙台文学館・宮城県歌人協会） 河北新報社賞は萩生初枝（仙台市）「夫逝きてコロナ禍の世をひとり生くAIロボット傍かたへに置きて」、宮城県歌人協会賞は鈴木洋子（石巻市）「芝桜まだ咲かぬ庭一巡し車椅子の母施設へと発つ」。

第三十二回宮城県短歌賞（主催宮城県歌人協会）は上林節江（塩竈市）「テロップ」（新作二十首）が受賞。

令和三年日本歌人クラブ東北ブロック優良歌集賞を梶原さい子（大崎市）歌集『ナラティブ』が受賞。第三回笹井宏之賞の個人賞「染野太朗賞」を石巻出身の嶋稟太郎が受賞。

十一月、「落合直文生誕一六〇年記念祭」が開かれ、生家

の煙雲館（気仙沼市）で直筆の掛け軸や手紙などが十八年ぶりに展示された。

歌集

新沼節子「白鳥のこゑ」 菊地栄子「賢道 Kandon」 岩本句二「みちのく線描」 岡本勝「花の季節」 上林節江「花と濡れつつ」 白鳥光代「風の草叢」 宮城県歌人協会創立七十周年記念合同歌集「あをばの杜」

歌誌

「群山」「収穫」「砂丘」「登米短歌」「波濤みやぎ」「麻刈」「北杜歌人」「個性の杜」

俳句

一月五日、第四十五回「宮城県俳句賞」本賞は丸山みづほ（仙台市）。第二十七回滝愛励賞に齋藤善則、齋藤伸光。第五十一回「宮城県俳句大会」は四月二十九日開催予定であったが、コロナ感染防止のため作品選考のみの大会となった。兼題の部 河北新報社賞は「草生すや棄牛の頭蓋深く抱き」土屋遊瑩（石巻市）、宮城県知事賞「地球の吐息ほどの十年三月末」上田由美子（松島町）、宮城県俳句協会賞は「新地図に津波の記号小鳥来る」伊藤一男（仙台市）。

二月十一日、佐藤鬼房記念第三回塩竈市ジュニア俳句コンクール、佐藤鬼房賞「2020世界全てが凍蝶へ」茂木愛佳

（学習院女子中等科三）、ジュニア俳句大賞「教室に猫背ずらりと冬の昼」新谷桜子（青森県立弘前高一）。

第七十回登米芭蕉祭俳句大会が六月に開かれ、兼題の部のみで実施された。投句は一般四九四句、小・中・高は二五一二句。宮城県俳句協会賞は「鳥交る文化遺産の鬼瓦」小野寺好道（登米市）。

俳人協会主催第三十二回東北俳句大会・岩手大会が九月に紙上大会として開催されたが、大会賞の該当者はなかった。現代俳句協会主催の第三十五回東北大会・岩手大会が九月に紙上大会として開催され現代俳句協会長賞は「幼霊も乗りてかたむく茄子の馬」丸山千代子（仙台市）。十月、第十六回大崎市俳句大会（紙上大会）、宮城県知事賞に「やませ来る子捕ろの唄は今もなほ」伊藤一男（仙台市）。十月十七日、「壺の碑」全国俳句大会はオンライン開催。十一月十四日第六十七回松島芭蕉祭並びに全国俳句大会は二年ぶりの開催となった。ジュニア部門には小中学生四〇五人の七二六句から五十三句が入選。招聘選者は夏井いつき。松島町長賞「政宗の右眼に宿る鷹、孔雀」鈴木隆（仙台市）、宮城県知事賞「しぐれ忌や光の島に翅と羽」八島敏（仙台市）。

活動としては「渡辺世誠一郎展 俳句と写真」（十一月九日）二十一日 塩竈 ビルドスペース

句集

宮城県俳句協会編『十年目の今、東日本大震災句集 わたしの一句』 柏原眠雨編『大震災の俳句―俳句に見る東日本大震災とその後十年―』 赤間学『白露―不断なる詩性』 成田一子『トマトの花』 滝俳句会三十周年記念合同句集『滝俳句集』 渡辺誠一郎『佐藤鬼房の百句』

句誌
「きたごち」「滝」「小熊座」「む」「宮城野」「飛行船」「ほそ道」「花野」「柳絮」「荒星」「むじな」「しろはえ」「冬林檎」「駒草」

川柳

第四十八回宮城県川柳大会は、新型コロナ感染拡大防止のため誌上大会に変更され、宮城県川柳連盟賞に「十年を花束にして鎮魂歌」の鎌田京子（仙台市）。

第七十回東北川柳大会（誌上大会）の河北新報社賞に「トリアージ消してたまるか命の灯」の佐瀬貴子（水戸市）が選ばれた。

第四十八回河北川柳投句大会も誌場大会となり「つまらない大人になってゆくおとな」の高瀬霜石（弘前市）が河北新報賞。

句集

『杜Ⅱ』（杜同人合同句集） 西恵美子『分母は海』

柳誌

「川柳宮城野」

玉^{たま}
田^だ
尊^{たか}
英^{ひで}

（宮城県芸術協会文芸部部長）

洋楽

●はじめに

令和三年は、東日本大震災から十年目となり、昨年開催予定だった東京オリンピック、パラリンピックが一年延期して開催された。特に前者の大震災関連では、多少なりとも宮城県内外の音楽活動に影響を与え、復興コンサートなどの行事が震災の遭った三月十一日の前後を中心として、比較的長期間に渡って行われた。

新型コロナウイルスによる感染症が広まってから、まだ収束する見込みが立たない中では、依然として多くの活動が制限されているが、コンサート、コンクールなどの行事は、感染症対策を講じつつ開催されつつある。しかし、野外で行うイベントを中心として、リスクが懸念される状況と主催者が判断した場合は、開催を断念した事例がいくつもあった。二十回目となる「とつておきの音楽祭2021」、「第三十回定禅寺ストリートジャズフェスティバル」などは中止となった。

コンサートなどの催事を運営する場合、主催者やその関係者は、感染症対策として、一般的な生活でも定着しているマ

スクの着用だけでなく、検温、参加者や観客数の制限など多岐に渡る対策を講じつつ活動を行っている。

感染症対策の一例として、十二月二十五日に開催した仙台フィルハーモニー管弦楽団特別演奏会におけるベートーベン作曲の交響曲第九番では、合唱団を舞台の前方に配置した。しかし、ベートーベンの時代には多かったこの舞台配置にすると、という試みを、演奏者と聴衆が体験する機会にもなった。

また、ユーチューブなどに代表されるオンライン配信は、前年から活性化しているが、県民への情報発信については、新たな方向性を模索し続けている。

海外の動向として、ポーランドで開催された「第十八回シヨパン国際ピアノ・コンクール」では日本人二名が入賞し、また、エリザベート王妃国際音楽コンクールなど権威ある国際コンクールでも日本人数名が入賞したことは、県内だけではなく、国内の多くの音楽関係者に刺激を与えたこととして注目に値する。

●オーケストラ

仙台フィルハーモニー管弦楽団（以降「仙台フィル」と省略）の定期演奏会で特筆すべきプログラムは、没後二十五年の日本を代表する作曲家、武満徹の作品を、一月から三月の演奏会で毎回取り上げたことである。一月は「夢の時」を鈴木優人が、二月は「弦楽のためのレクイエム」を飯守泰次郎が、三月は「系図 ―若い人たちのための音楽詩」（語りは高平響）を尾高忠明がそれぞれ指揮した。



復興の思い込め音織る
仙台フィルハーモニー管弦楽団第344回定期演奏会

仙台フィルは、これまで青少年のためのオーケストラ鑑賞会を開いていたが、感染症の影響で、代替企画として団員による出張コンサートを行い、十月から十一月にかけて多くの仙台市内の小学校を訪れた。また、日立システムズの慈善公演として「エンジョイ！クラシックコンサート」を開催し、東北高校音楽部とも共演した。

仙台フィルは山形交響楽団との合同演奏会を十一月に石巻市で開催した。指揮は仙台フィル桂冠指揮者のパスカル・ベロで、ドビュッシーの交響詩「海」などを演奏した。

東京フィルハーモニー交響楽団は、栗原市で巡回公演を九月に行った。

仙台ジュニアオーケストラは、第二十九回定期演奏会を十月に仙台市青年文化センターで開催した。三年ぶりとなった演奏会で、モーツァルト作曲の交響曲第三十八番「プラハ」などを角田鋼亮の指揮で演奏した。

百周年を迎えた東北大交響楽団は、十二月十一日に百周年記念特別演奏会を川内萩ホールで開催した。指揮は堀俊輔、チャイコフスキー作曲のピアノ協奏曲第一番の独奏は小山実稚恵であった。

●オペラ、合唱

仙台オペラ協会は、一月に「オペラ ガラコンサート」を

仙台市太白区文化センター 楽楽ホールで開催したが、県外在住者の出演を取りやめるなどの感染症対策を講じた。九月には前年の延期公演として、東京エレクトロンホール宮城でモーツァルト作曲の「魔笛」を上演した。

男声合唱団パリンカ創団三十周年記念定期演奏会が、新作を含むプログラムによって六月に多賀城市文化センターで開催された。

●ソロ、室内楽関係

ピアノリストの杉元太は、二番目となるCDの発売に併せて、大和町のまほろばホールでスプリングコンサートを三月に開催するなどの活動を行った。

仙台フィル首席チェロ奏者の吉岡知広が企画するコンサートシリーズ「イズミノオト」は、二月にはメンデルスゾーンを、七月は、チェコの三大作曲家を、十一月にはチャイコフスキーと、それぞれ作曲家をテーマとして、室内楽作品による演奏会を行った。

仙台市宮城野区文化センター・パトナホールを拠点として開催している「ミュージック・フロム・パトナ」では、五、七、十一月に三回の公演があった。音楽監督は、仙台フィル首席チェロ奏者の三宅進で、バロックから現代までの曲目がプログラムされている。

仙台シューマン協会は、第百二十回コンサートを仙台市宮城野区文化センターで十月に開催した。ピアノ三重奏曲第二番など、シューマンが作曲した室内楽、ピアノ独奏曲が曲目として並んだ。

仙台フィルコンサートマスターの西本幸弘は、ベートーベンのバイオリンソナタ全十曲を十年かけて演奏するシリーズのリサイタルで、バイオリンソナタ第八番などを、十二月に宮城野区文化センター パトナホールで演奏した。ピアノは小口真奈。

●作曲

作曲を通しての若い人材育成と、将来に向けて音楽文化の理解を深めるために開催されている「未来の作曲家コンサートin東北2021」は、八月に仙台市内のLVA(アイビー)ホールで行われた。当公演は、二〇一七年より毎年開催しており、今回で五回目となる。なお、第九回サントリー&ウィーン・フィル音楽復興祈念賞を三年連続で受賞した。

小山和彦は、オーケストラ・プロジェクト2021においてピアノ協奏曲第四番、そして、弦楽四重奏曲“Mesto, ed Agitato 2021”を初演した。

宮城純一は、第四十一回宮城県芸術協会音楽コンクール・ピアノ部門の上級A本選課題曲として「冬の記憶」、叶光徳

クラリネットリサイタルにて「ラプソディをこわしちゃった」などを初演した。

● イベント、定期行事関係

県庁で定期的に行われている県民ロビーコンサートは、感染症の拡大によって三月から休止したが、五月に再開し、仙台三桜高校の音楽部が出演した。以降はプロ・アマチュアを問わず多彩な出演者によって、定期的に開催した。

仙台クラシックフェスティバル（愛称「せんくら」）は、感染症の影響で前年は開催を見送ったが、仙台市青年文化センターなどの会場で計八十三公演を行った。出演は、バイオリンの前橋汀子、郷古廉、ピアノの津田裕也ら九十三組であった。フィナーレ公演は、例年仙台フィルがベートローベン作曲の交響曲第九番を演奏するが、舞台上での密集状態を避けるため、ウインナワルツでプログラムを組んだ。

宮城県芸術協会などが主催する第五十八回宮城県芸術祭は九月に開幕した。音楽関連の事業としては、第四十一回音楽コンクールガラコンサート、会員による音楽会が開催された。

東日本大震災からの復興を支援する体験型イベントである「仙台・子供の夢ひろば『ボレロ』」が、十一月に仙台市青年文化センターで開催された。ピアニストの小山実稚恵が企画し、子供たちとも共演するなど様々な催しが二日間に渡って

開催された。

● コンクール

・国際コンクール

翌年五、六月に開催される第八回仙台国際音楽コンクールの概要が、一月に発表された。運営委員長は、野島稔。十二月に仙台市が発表した情報によると、過去最多の五百七十三人の申し込みがあった。

・ピアノ

第六十三回全東北ピアノコンクール（東北放送、東北放送文化事業団、河北文化事業団主催）の開催は、二年ぶりとなった。東北にゆかりのある三十二名が出場し、五月の予選を通過した七名が、六月の本選で演奏した。会場はいずれも仙台市宮城野区文化センター・パトナホール。

第二十一回シヨパン学生ピアノコンクール E: TOHOKU（日本シヨパン協会東北支部主催）が、九月に常盤木学園シユトラウスホールで開催された。

・吹奏楽

第四十四回全日本アンサンブルコンテスト（全日本吹奏楽連盟、朝日新聞主催）が、三月に宮崎市で開かれ、中学校の部の仙台市立上杉山中学校が金賞を受賞するなど、県内のいくつかの団体が健闘した。

第三十六回県管打楽器コンクール（県吹奏楽連盟、加美町、河北新報社主催）が六月に中新田バツハホールで開かれ、県の小学生から一般まで参加者は八十名であった。

第六十四回東北吹奏楽コンクール（東北吹奏楽連盟、朝日新聞主催）が、八月に東京エレクトロンホール宮城で開かれ、向陽台中学校が全国大会に進み、県内の高校数校と一般の団体が金、銀賞を受賞した。

・合唱

第七十三回全日本合唱コンクール県大会（県合唱連盟、朝日新聞主催）は、八月に名取市文化会館であったが、聖ドミニコ学院小学校は全国大会に進み、第七十四回全日本合唱コンクールにおいて金賞を受賞した。

第三十三回県合唱アンサンブルコンテスト（県合唱連盟主催、河北新報社共催）が、十二月に仙台市青年文化センターであり、六十二団体が参加した。その結果、仙台青陵中等教育学校合唱部、古川黎明高校コーラス部、合唱団パリンカが全国大会に進むこととなった。

●その他の動向

・受賞

ピアノを中心に演奏活動する打楽器奏者の會田瑞樹は、宮城県芸術選奨新人賞を受賞した。

・音楽ホール関係

仙台市青年文化センターは、老朽化のために前年の十月より改修工事に入ったが、工事を終え、九月三十日に記念コンサートを行った。仙台クラシックフェスティバル以降、本格的に使用されている。



仙台市青年文化センター改修工事終了
ホールに1年ぶり拍手

東日本大震災の津波で被災した気仙沼中央公民館は、移転新築され、十二月に開館した。

クラシック音楽向けの小規模なホールである仙台青葉区の

IVy (アイビー) ホールは、開設一周年を迎え、独奏や室内楽のコンサートが、数多く開催されている。

・刊行物

仙台市市民文化事業団で発刊していた「季刊まちりよく」が第四十二号(二〇二二年四～六月)で休刊した。この無料配布されていた情報誌は、仙台市内の文化活動を紹介する上で貴重な役割を果たしたが、感染症の影響と広報の媒体としての見直しもあつた上での休刊ということである。

・復興支援

被災地にピアノをとどける会は、東日本大震災後から約十年間の活動の中で被災地を中心に五百台以上のピアノを届けしたが、三月に活動を終えた。

・逝去

尚絅学院大学名誉教授の今井邦男が、十一月に逝去した。混声合唱団「グリーン・ウッド・ハーモニー」など合唱団体の指導に成果を残した。

小山和彦

(作曲家・宮城学院女子大学教授)

邦楽・芸能

古典芸能

令和三年も前年に続き新型コロナウイルスの影響で多くの演奏会や社会的な催事が延期や中止となったり、人数制限を行いつながらの開催となったりした。以下に、令和三年の古典芸能の公演について、開催状況を「雅楽」「能楽（能・狂言）」「歌舞伎」「文楽」の順に報告する。

雅楽

八月十二日の夜に仙台市青葉区の大崎八幡宮の境内で「御鎮座記念祭」が事前申し込みによる人数制限を行った上で実施された。翌十三日には、昨年度は中止した東日本大震災復興祈念「雅楽の夕に、」を無観客の形で開催し、ライブ配信を行った。

能楽

二月二十日に仙台市福祉プラザふれあいホールで「令和二年度謡曲の集い」が開催された。例年開催してきた「謡曲大

会」よりも規模を縮小し、九番の謡曲が披露された。

東京在住の観世流能楽師八田達弥と森田流笛方寺井宏明による「能楽の心と癒やしプロジェクト」は、三月十一日に石巻市の「東日本大震災追悼3・11のつどい」かどのわき町内会会場（鹿島御児神社参道入口付近）で、観世流能「羽衣」を上演した。この上演がプロジェクトの通算百五十回目となった。

三月十三日に白石市の碧翠園において、碧翠園主催講座の「講座生発表会」が開催され、尺八・謡曲・仕舞・日本舞踊の受講生が学習の成果を発表した。

七月十一日に白石市の碧翠園において「伝統芸能フェスティバル」が二年ぶりに開催され、謡曲や仕舞、尺八、詩吟、日本舞踊等が披露された。

八月八日と九日の二日間、仙台市の国際センターにおいて「古の文化に触れる夏休み」と題した小・中・高校生を対象とした文化体験の催しが開かれた。華道・茶道とともに、能の謡と舞の体験講座が開催され、喜多流の佐藤寛泰が講師をつとめた。

毎年夏休みに能—BOXで開催される山中逆晶による「こどものための能講座」は、昨年に引き続き受講生の数を減らし、グループ指導からマンツーマンの稽古方式に変更し、七月二十四日から三十一日と八月二日から五日までの日程で実施された。受講生は五回の稽古を受け、八月六日に三つのグループに分かれて発表会に出演した。感染対策を行いながら、稽古の成果を発表する場が設けられたことは大変に喜ばしい。

十月三日に名取市文化会館大ホールにおいて、東日本大震災復興祈念事業として、復曲能「名取ノ老女」（老女役は人間国宝の大槻文蔵、護法善神役は金剛流の金剛龍護）と狂言「舟渡響」（野村萬斎・野村裕基）が上演された。平成二十九年に名取市文化会館開館二十周年を記念して上演された「名取ノ老女」が、震災から十年目となる節目の年に再度上演されたことは意義深い。



「こどものための能講座」発表会
（於：せんだい演劇工房 能—BOX）

十一月十四日に能—BOXで仙台市能楽振興協会による「令和三年 囃子と仕舞の会」が開催され、東北大学喜多会、金春花修会、仙台囃子会、仙台喜章会、仙台寛松会、仙台金春会、香扇会、みちのく明生会などの団体が日頃の稽古の成果を披露した。



「令和3年 囃子と仕舞の会」
（於：せんだい演劇工房 能—BOX）

十二月十七日に東京エレクトロンホール宮城で「笑いの芸術 野村万作・萬斎狂言公演」が行われ、石田幸雄の解説で小舞「田植」、狂言「文相撲」と「貫響」が上演された。また公演に先立ち十二月六日には、石田幸雄を講師としてプレセミナーが東京エレクトロンホール宮城の会議室で開催された。

能—BOXでは令和三年度から「能—BOXゼミナール」と題する勉強会を開始した。令和三年度は「能を知れば、日本文化が見えてくる」という総合テーマで五回のゼミナールが計画され、十月十六日のゼミナール「能と日本の芸能を考える」（小塩さとみ）の開始前に津村禮次郎が「神歌」と

仕舞「高砂」を、翌十月十七日のゼミナール「仙台藩と能」（菅原友子）の開始前には津村禮次郎と坂真太郎が仕舞「実盛」「芥刈」「海土」を特別出演の形で演じた。十一月二十日の第三回ゼミナールは「能楽アラカルト」武士の文化と能」（村上良信）であった。



「能－BOXゼミナール」初回を祝う仕舞
(於：せんだい演劇工房 能－BOX)

歌舞伎

例年七月に宮城県文化振興財団が主催し、東京エレクトロンホール宮城で行われている松竹大歌舞伎公演は、新型コロナウィルス感染症拡大予防のために二年連続で巡業中止となった。

九月七日に東京エレクトロンホール宮城において、歌舞伎の市川海老蔵が出演する「秋の特別公演 古典への誘い」が開催され、通し狂言「命懸歌舞伎ノ道筋 三升先代萩」が上演された。

文楽

毎年秋に行われる「人形浄瑠璃 文楽」の公演は、十月二日に電力ホールで開催された。昼の部は「一谷嫩軍紀」より「熊谷桜の段」と「熊谷陣屋の段」、夜の部は『曾根崎心中』「生玉社前の段」「天満屋の段」「天神森の段」がそれぞれ休憩なしの形で上演された。

小^お

塩^{しお}

さとみ

(宮城教育大学 教授)

民俗芸能

民俗芸能は年中行事で演じられるだけでなく、舞台公演や地域おこしのイベントなどでも演じられる。令和三年は前年に引き続き新型コロナウイルスの影響で多くの催事が延期や中止となったが、感染対策を講じながら開催された公演等を中心に報告する。

一月十一日に白石市古典伝承の館「碧水園」で舞台開きが行われ、白石市指定民俗文化財の榊流大町神楽が出演した。

一月十七日に栗原市金成の延年閣で南部神楽伝承推進協議会による「舞初め公演」が開催され、県内からは赤谷神楽（登米市）と鶯沢神楽（栗原市）が出演した。

二月十三日に仙台市教育委員会主催「第三十四回民俗芸能のつどい―今こそ舞う祈り



「第34回民俗芸能のつどい」生出森八幡神楽
（於：宮城野区文化センターパトナホール
写真提供：仙台市教育委員会）

の神楽―」が宮城野区文化センターパトナホールで開催された。大崎八幡宮能神楽保存会（青葉区八幡／宮城県指定無形民俗文化財）、生出森八幡神楽保存会（太白区茂庭／仙台市指定無形民俗文化財）、榊流青麻神楽保存会（宮城野区岩切／仙台市指定無形民俗文化財）、秋保神社神楽保存会（太白区秋保町／仙台市登録無形民俗文化財）が出演した。

二月十四日に色麻町の農村環境改善センターで、清水神楽保存会が新調した装束を披露する会を開催し、「三番叟」を上演した。装束の新調は、日本教育公務員弘済会宮城支部からの助成により実現した。

七月十一日に白石市の碧水園において「伝統芸能フェスティバル」が開催され、榊流大町神楽継承会が「四方堅の舞」を披露した。

七月十八日に栗原市の栗原寺で源義経公生誕祭が開催さ



「第34回民俗芸能のつどい」秋保神社神楽
（於：宮城野区文化センターパトナホール
写真提供：仙台市教育委員会）

れ、栗原神楽による義経一人舞、城生野こども神楽による鶏舞、中野神楽による義経一人舞、城生野神楽による「鶉越の逆落とし」が奉納された。

九月十日に大崎市岩出山で「第五十八回政宗まつり」が二年ぶりに開催された。当初は屋外でのパレードが計画されていたが、宮城県が八月二十日にまん延防止等重点措置の対象となったため完全オンライン配信となり、岩出山小学校の「岩小太鼓」や上野目神楽鶏舞伝承クラブによる鶏舞などが配信された。

十月二日に「第十四回くりはら万葉集―土と火のまつり―」が栗原市一迫の風の沢ミュージアム野外ステージで開かれ、栗原市内の中野神楽・栗原神楽・城生野神楽の担い手による神友楽という神楽ユニットが、鶏舞、三番叟、岩戸入り、撥車を上演した。

十月二十四日に村田町の菅生神社で、地元の小学生が伝承している「菅の芽神楽」が二年ぶりに演じられた。旧村田第四小学校で三十年ほど前に菅生神楽を子ども向けにアレンジして創られた菅の芽神楽は、小学校閉校後も地区内で伝承活動が継続されている。

十月三十一日に加美町の中新田パッハホールで「With コロナ 暮らしの安全を守る秋の特別企画 く火伏の虎舞×交通安全ステージ&演奏会」が開催され、中新田中学校の

二・三年生十名が火伏の虎舞を披露した。例年四月に開催される「初午まつり」が新型コロナウイルス感染症予防のために二年連続で中止となったため、中学生にとって貴重な発表の機会となった。

十一月一日から三日まで秋の藤原まつりが岩手県平泉市で開催され、二日に中尊寺と毛越寺で栗原市の栗原神楽が「五穀舞」を上演した。

十一月七日に栗原市金成の延年閣で南部神楽伝承推進協議会が創立十周年を記念する公演を行い、岩手県南と宮城県北の五つの南部神楽団体が神楽を披露した。

十一月七日に登米市登米町の伝統芸能伝承館「森舞台」で「とよま伝統芸能伝承体験会」が開催された。参加者は、とよま囃子（登米市指定無形民俗文化財）、岡谷地南部神楽（登米市指定無形民俗文化財）、登米能（宮城県指定無形民俗文化



「火伏の虎舞×交通安全ステージ&演奏会」火伏の虎舞
（於：中新田パッハホール、写真提供：河北新報社）

化財)の芸能発表を鑑賞した後に、希望する団体の芸能を体験した。例年九月に開催される「登米秋まつり」が二年連続で中止となり、深刻な後継者不足もあって企画された催しで、伝承団体への加入を検討する人を対象とした事前申し込み制で開催された。

十二月五日に丸森町大内地区に伝わる大内山伏神楽が、移住者向けシエアハウスの内覧会で四年ぶりに披露され、「宝剑の舞」や「式舞」が演じられた。

十二月十一日に東日本大震災の被災地に伝わる郷土芸能を紹介する「第三回民俗芸能Now! in東北」が石巻市の複合文化施設マルホンまきあーとテラス小ホールで開催され、岩手県釜石市の鶴住居虎舞、石巻市の雄勝町伊達の黒船太鼓、福島県浪江町の請戸の田植踊の三団体が芸能を披露するとともに、今後の継承についてパネルディスカッションを行った。

コロナ状況下で学校における民俗芸能の伝承活動にも大きな影響が出ているが、感染対策を行いながら演奏や体験の機会を設けた学校もあった。

東松島市赤井小学校では一月三十日に赤井いぶき太鼓の演奏発表会を実施、一・二年生が豊年太鼓、三・四年生がぶち合わせ太鼓、五・六年生がオリジナルの赤井いぶき太鼓を体育館で演奏し、他の学年の児童は教室でリモート中継を鑑賞し

た。

富谷市の富谷小学校では、四年生が総合的な学習の時間を利用して富谷田植踊りについて学び、六月二十二日には富谷田植踊り保存会の会員から「田おこし」や「種まき」などの演目の踊り方を習い、練習した。

川崎町の富岡中学校では、十月二十三日に同校の文化祭で全校生徒が宮城蔵王支倉豊年踊りを保護者や卒業生に披露した。同校では約四十年前から地域伝承活動の一環として地元の保存会から指導を受けている。

遠く離れた地域の学校との交流活動も行われた。沖縄県と宮城県の小学校の児童がインターネット中継を通して交流する「子ども芸能交流会」は、沖縄県立芸術大学准教授の向井大策と呉屋淳子が主催する事業「地域芸能と歩む」の中の企画で、その三回目が二月四日に実施された。山元町立坂元小学校の四年生十三人が「子ども神楽」を演じ、交流先の沖縄本島北部の離島にある伊江村立伊江小学校の五年生四人が「国頭サバクイ」を演じた後、お互いの演舞について質問や感想を交換した。二月一日には、インターネットの接続テストも兼ねて、プレ交流会を実施し、双方の学校の児童が学校や地域を紹介するプレゼンテーションを行った。大学の事業は三年で終了するがこの交流が地域芸能の伝承に力を与えることが期待される。

石巻市の田代島に伝わる田代島獅子舞の保存会が、DVDと教本を石巻市の地域作り基金助成金を活用して再発行し、市内の小中学校などに配布した。DVDには実演の記録や衣装の着付けの仕方が収録され、教本には笛や太鼓の演奏法の解説や楽譜が掲載されている。東日本大震災後の再発行は意義深い。

秋保の田植踊保存会（仙台市太白区）が、令和三年度の伝統文化ポौरア賞（地域賞）を受賞した。保存会が後継者育成を最大の課題として伝承活動に取り組み、地域住民のつながりが伝承の大きな力となることが受賞理由として挙げられている。

小^お

塩^{しお}

さとみ

（宮城教育大学 教授）

三 曲

昨年に発生したコロナの猛威は世界を巻き込む勢いで広がりを見せている。経済は疲弊し社会は混乱する中、文化芸術活動は逼塞状態。まして伝統芸能である三曲は演奏会はもとより大勢での下合わせも出来ない。習う人の足が遠のき存在すら危ぶまれるといって過言ではない情勢。

しかし、こうした危機的な中にも果敢に挑戦する動きも見られた。河北新報に掲載されたが、和歌山で開催された国民文化祭の国際尺八コンクールで、見事に銀賞に輝いたのは仙台の平澤真吾氏。二十代半ばで脱サラし、尺八の道に邁進している。今後の活躍から目が離せない存在である。

その彼が、師匠の大友懂山とエレクトーンの相澤董の三名で立ち上げた「TAKE TO」の存在が注目される。十月三十一日に第一回のコンサートをピアノサロン・ルフランで開催。情熱大陸などのポップスからオリジナルの曲など演奏。日本の伝統楽器と日本で発明された電子オルガンの組み合わせが面白いハーモニーを醸し出す。十二月にはクリスマスコンサートが開かれ、ライブ配信もされた。今後ともか月に一度の間隔で開催される予定。顧客数を増やし、どこまで発展していくか期待をもって見守りたい。

学校への三曲鑑賞授業は皆無かと危ぶまれたが工夫を凝ら

し三件の開催となった。その工夫とは従来のやり方、即ち大勢の生徒を一堂に集めないで、クラスごと小分けに実施した。従って同じ曲をクラスの数だけ演奏することになり、演奏者の負担は増えるが静かによく鑑賞できたようだ。学校側からの感想を紹介したい。「子供たちは本物の邦楽の演奏を見て聴くことで日本古来の音楽の美しさを感じ新鮮な驚きを覚え、とても充実した時間を過ごすことができました」子供たちの生の声を拾うと「尺八はリコーダのように吹いているのかと思ったら体験してみると音を出すだけでも難しかった。箏はなりましたが最初いきいた心響くような音は出せませんでした。演奏を聴いているときはとても心がおだやかな気持ちになりました。今回の授業では日本の音楽の素晴らしさをたくさん知ることができました」「音楽の時間で越天楽今様をCDで聞いたが生でできると全然違ってとてもすてきでした」いつも学校からは子供たちの感想文が寄せられます。子供たちの感想文には逆に励まされ出向いた先生方が勇気づけられ、活動の原動力になっている。学校へ出向いて鑑賞や体験授業をしているグループが「仙台三曲サポート会」。平成十七年に三曲の師匠方で結成され、現在三十六名が参加。コロナ前は年に十回近く学校に出向いており、これまでの実績は小・中学校合わせて四十校以上に上る。私事ですが今年の文化の日に会長である小生が県から教育文化功労賞を受賞。

こうした活動が評価された思いが強い。会としても背中を押されたようで力強く感じる。代表の謝辞でも述べたが、これからも工夫を凝らして子供たちに伝統音楽である三曲を伝え続けたい。

一月

二十六日 三曲鑑賞授業 西中田小学校

六年生 七十名 宮澤寒山 田村亮山 田村雅徹楽

曾根美登利 吉崎真理

三十一日 山田流箏曲演奏会 喜音和会

七月

一日 三曲鑑賞・体験授業 館小学校

六年生 六十一名 宮澤寒山 狩野博山 星寒俊

小林幸子 橘寿好 橘幸菊

九月

十六日 三曲鑑賞・体験授業 荒町小学校

四年生 九十五名 加藤歌峰瑠 内田歌嵯繭

十月

三十一日 TAKE TO 第一回コンサート

大友憧山 平澤真吾 相澤董

十一月

五日 第三十回宮城県高校日本音楽定期演奏会 多賀城文化

市民センター小ホール

十二月

四日 箏・尺八をやってみよう。ワークショップ 南三陸町

入谷公民館

二十五日 TAKE TO ルフラン

大友憧山 平澤真吾 相澤董

宮

澤

寒

山

(仙台三曲協会理事)



今年の西中田小学校での三曲鑑賞授業



2年前の西中田小学校での三曲鑑賞授業



西中田小学校からの感想文

唯一無二のサウンド
 エレクトーンによる
 2本の尺八と

尺八 エレクトーン 尺八
 太友 権山 相澤 堇 平澤 真悟

TAKE/TO

テイク・ツー

テイク・ツーのメンバー

「三曲サポーター会」の活動報告

（4）『伊藤村小の音楽活動』
 ① 等と凡人との合唱（18分）
 ② 『アモーレ・ジ・ジョー』
 凡人合唱と演奏（15分）
 ③ 『歌』：聖歌（8分）
 ④ 『歌は聞く』：等と凡人合唱（15分）
 ⑤ 『歌々々』：等と凡人合唱（18分）
 ⑥ 『歌謡（知らない心）』：等と凡人合唱（18分）
 ⑦ 『手裏剣』：等と凡人合唱（7分）

～生徒の感想～

（1）日本の楽器で演奏する日本人の姿が凄くおもしろい。
 （2）凡人と等の音楽の差がわかる。
 （3）歌や小唄があり、音楽に引き込まれて楽しかった。



（国分寺小学校）

（7）歌を弾いたら音が面白かった。凡人は音も違ったから音が面白かった。
 （8）凡人は自分たちで弾くのが上手でびっくりした。
 （9）楽しい音楽会だった。
 （10）歌は一番上手で良かった。
 （11）音の響きで場所の雰囲気も変わった。

（4）凡人と等とが同じ曲を演奏する姿が凄くおもしろい。
 （5）凡人は自分たちで弾くのが上手でびっくりした。
 （6）歌や小唄があり、音楽に引き込まれて楽しかった。



（中野小学校）

（4）凡人と等とが同じ曲を演奏する姿が凄くおもしろい。
 （5）凡人は自分たちで弾くのが上手でびっくりした。
 （6）歌や小唄があり、音楽に引き込まれて楽しかった。

新鮮な出会いと感動の瞬間と
 継続授業をサポートします。

山竹三曲サポート会

「三曲サポーター会」の活動報告

～独立活動～

独立活動とは、日本の伝統音楽である『三曲』と現代音楽と、『歌』、凡人と等とが同じ曲を演奏する姿が凄くおもしろい。

～事業～

<所蔵楽器の整理>
 ・楽器を整理して『三曲』の演奏をサポートします。
 ・楽器による音の差をわかりやすく、実際に演奏できるように指導します。
 ・必要な楽器は、サポート会から貸出できます。
 ・必要な楽器は、サポート会から貸出できます。
 ・必要な楽器は、サポート会から貸出できます。

<楽器演奏への取り組み～>
 ・文化庁の事業である公民館での演奏。
 ・楽器演奏のサポート。
 ・三曲サポート会が主催する『三曲』の演奏会やイベント、学校の音楽会などに参加して演奏します。

～会員～

三曲を演奏する楽器の音、二曲の演奏や等とに対して興味のある人。

～事務局～

代表 事務局：〒114 東京都荒川区西日暮里 1-1-1
 事務局 事務局：〒114 東京都荒川区西日暮里 1-1-1
 事務局 事務局：〒114 東京都荒川区西日暮里 1-1-1
 事務局 事務局：〒114 東京都荒川区西日暮里 1-1-1

～活動実績（平成30年度実績）～



（国分寺小学校）

～独立活動～

独立活動とは、日本の伝統音楽である『三曲』と現代音楽と、『歌』、凡人と等とが同じ曲を演奏する姿が凄くおもしろい。

～事業～

<所蔵楽器の整理>
 ・楽器を整理して『三曲』の演奏をサポートします。
 ・楽器による音の差をわかりやすく、実際に演奏できるように指導します。
 ・必要な楽器は、サポート会から貸出できます。
 ・必要な楽器は、サポート会から貸出できます。
 ・必要な楽器は、サポート会から貸出できます。

<楽器演奏への取り組み～>
 ・文化庁の事業である公民館での演奏。
 ・楽器演奏のサポート。
 ・三曲サポート会が主催する『三曲』の演奏会やイベント、学校の音楽会などに参加して演奏します。

～会員～

三曲を演奏する楽器の音、二曲の演奏や等とに対して興味のある人。

～事務局～

代表 事務局：〒114 東京都荒川区西日暮里 1-1-1
 事務局 事務局：〒114 東京都荒川区西日暮里 1-1-1
 事務局 事務局：〒114 東京都荒川区西日暮里 1-1-1
 事務局 事務局：〒114 東京都荒川区西日暮里 1-1-1

～独立活動～

独立活動とは、日本の伝統音楽である『三曲』と現代音楽と、『歌』、凡人と等とが同じ曲を演奏する姿が凄くおもしろい。

～事業～

<所蔵楽器の整理>
 ・楽器を整理して『三曲』の演奏をサポートします。
 ・楽器による音の差をわかりやすく、実際に演奏できるように指導します。
 ・必要な楽器は、サポート会から貸出できます。
 ・必要な楽器は、サポート会から貸出できます。
 ・必要な楽器は、サポート会から貸出できます。

<楽器演奏への取り組み～>
 ・文化庁の事業である公民館での演奏。
 ・楽器演奏のサポート。
 ・三曲サポート会が主催する『三曲』の演奏会やイベント、学校の音楽会などに参加して演奏します。

～会員～

三曲を演奏する楽器の音、二曲の演奏や等とに対して興味のある人。

～事務局～

代表 事務局：〒114 東京都荒川区西日暮里 1-1-1
 事務局 事務局：〒114 東京都荒川区西日暮里 1-1-1
 事務局 事務局：〒114 東京都荒川区西日暮里 1-1-1
 事務局 事務局：〒114 東京都荒川区西日暮里 1-1-1

～独立活動～

独立活動とは、日本の伝統音楽である『三曲』と現代音楽と、『歌』、凡人と等とが同じ曲を演奏する姿が凄くおもしろい。

～事業～

<所蔵楽器の整理>
 ・楽器を整理して『三曲』の演奏をサポートします。
 ・楽器による音の差をわかりやすく、実際に演奏できるように指導します。
 ・必要な楽器は、サポート会から貸出できます。
 ・必要な楽器は、サポート会から貸出できます。
 ・必要な楽器は、サポート会から貸出できます。

<楽器演奏への取り組み～>
 ・文化庁の事業である公民館での演奏。
 ・楽器演奏のサポート。
 ・三曲サポート会が主催する『三曲』の演奏会やイベント、学校の音楽会などに参加して演奏します。

～会員～

三曲を演奏する楽器の音、二曲の演奏や等とに対して興味のある人。

～事務局～

代表 事務局：〒114 東京都荒川区西日暮里 1-1-1
 事務局 事務局：〒114 東京都荒川区西日暮里 1-1-1
 事務局 事務局：〒114 東京都荒川区西日暮里 1-1-1
 事務局 事務局：〒114 東京都荒川区西日暮里 1-1-1

三曲サポート会のパンフレット

長 唄

日本の音楽

邦楽チャレンジ！

思えば昨年令和三年は、あの東日本大震災から丁度十年目という節目の年であった。復興も進み、およそ九十%程度まで落ち着きを取り戻したかに見えた途端、想像もしなかった世界的感染が拡大し、あらゆる分野で活動の中止、延期という事態となった。昭和五十二年以来、宮城県芸術祭に長唄という色どりを添えてきた演奏会が二年間も中止となったことは出演者として残念でならない。そうした中で一般社団法人長唄協会が「邦楽チャレンジ」と題して長唄・義太夫・三曲・琵琶の演奏会を主催した事を報告したい。

十一月七日（日）白石市ホワイトキューブにて催されたこの演奏会は、文化庁による「子どもたちのための伝統文化の体験機会回復事業」というもので前記の四分野の演奏家達がそれぞれスクリーンによる映像と、分かりやすい解説と共に演奏した。長唄は協会に属する各流派の家元がチームを作り、各地で公演を続けているが、今回は当派の家元（六世杵家弥七師）が三挺（三味線）三枚（唄方）と囃子の構成で「鞍馬山」「五條橋」を牛若丸（後の源義経）の物語として演奏した。

終演後、演奏家が講師として体験コーナーの場を設け、三味線・小鼓の指導をした。

はじめてバチを持ち弦に触れたり、小鼓を肩にのせたり、それでも興味深々という様子で微笑ましい風景であった。

（杵家会東北支部 杵家 弥島 筆）



邦楽チャレンジ「鞍馬山」



邦楽チャレンジ「五條橋」

うぶすなフェスティバル

今年も中止に

うぶすな（産土）フェスティバルはコロナ禍が続き今回も開催することができなかつた。八本松・郡山地区の市民まつりが仙台市八本松市民センターを会場に、第二十三回を迎えた。演芸・作品展示・縁日・抽選会など賑やかに行われ親しまれている。演芸の部にて、社中十名で「長唄・小鍛冶」を演奏の予定であった。舞台が初めてのメンバーもおり張り切って練習に励んできた。

出曲予定の「小鍛冶」は、狐の稲荷明神と若手名工小鍛冶とが相づちを打ち合い、小狐丸という名刀を作り上げる様を三味線で表現した掛け合いが聞かせ所となっている。

来年は開催できることを願いつつ、練習を重ねて前進したいと思っている。

杵きね 家いえ 弥や 登と 鈴すず
(宮城県芸術協会邦楽部長 副部長)



コロナ禍の中、稽古に励む

民謡

東日本大震災から十年目を迎えた令和三年だが、心の復興は中々進まないように感じる。

心の復興には、やはり音楽が必要と思われるが、とりわけコロナの影響もあり、各種活動が思う通りに行かない。

民謡は心のふるさとよく言われるが、県民同士のあつまりや、皆で一緒に楽しく過ごしての事とつくづく感じる。そんな中、沿岸部の活動、若手の活動等々を中心に令和三年の活動をご報告致します。

□民謡コンクール

県内各地で実施されている宮城県の民謡コンクール

◎ 一月三十一日(日)

「民謡民舞宮城県連合大会」

【主催】公益財団法人日本民謡協会 宮城連合委員会

【会場】気仙沼市「はまなすホール」

【開催目的】来年度の民謡民舞全国大会の宮城県予選会であり、各会派を代表して出演される皆様の日頃の研鑽成果を遺憾なく発揮し民謡人の良き思い出となる大会。また民謡民舞の文化遺産の後世への伝承と普及振興活動を目的とする。

【成果】 出場者百三十一名参加

〔高年三部〕 優勝・藤井浜雄（仙南長持唄）

〔高年二部〕 優勝・阿部信治（夏の山唄）

〔高年一部〕 優勝・尾崎壽明（秋の山唄）

〔中年部〕 優勝・佐藤 勇（稲上げ唄）

〔壮年部〕 優勝・鈴木健太郎（宮城馬子唄）

〔成年部〕 優勝・荒 正久（秋の山唄）

〔青年部〕 優勝・鈴木怜菜（秋の山唄）

総合優勝者 佐藤 勇（稲上げ唄）

春日寿千代会

【由来・目的】昭和六十一年寿千代会を発足、民謡舞踊の習得と普及を通して会員相互の親睦を図ると共に、健康で豊かな生きがいづくり、共に支えあう社会作りを踊りを通して地域へ貢献することを目的として活動している。

【主な活動】例年行っていた行事はコロナウイルスの影響で開催しないが、月三回の定例稽古は継続。

令和三年十月二十四日(日) 唐桑町小鯖地区六本大荒神社奉納をかねて「寿千代会おさらい会」を唐桑教室稽古場のお庭にて開催。

(会主 春日 寿千代)

民謡靖獄会^{せいがく}

【由来】会主は昭和五十四年八月、師匠（佐藤桃靖氏）から師範を允許される。会の活動は平成六年四月から始まり、平成十三年師匠から引き継ぎ本格的に活動を開始する。現在八教室（教室は週一回月一〜二回開催）

小学生一人、二〇代〜三〇代五人、四十〜五十歳代十人、



寿千代会おさらい会

六十歳代以上五十二人。

【活動目的】民謡の保存・普及・発掘活動に取り組む。高齢者の健康維持、介護予防生きがい作り。

【主な活動】例年行っていた行事はコロナウィルスの影響で開催出来なかつた。福祉施設への訪問。将来に向け、民謡普及活動として民謡の社会的地位、価値の向上と民謡による効用（認知症予防、肺機能強化等々）による健康寿命の延伸につなげたい。

（会主 阿部 勝造）

□東北民謡の祭典In栗原

県内で実施された若手による民謡活動「今こそ東北の熱き若人たち」

◎ 十二月五日（日）

【主催】東北民謡の祭典実行委員会

【会場】栗原文化会館大ホール

【開催目的】若手民謡歌手の発表の場を作ろうと二〇一八年に始まったが、開催は二年ぶり。入場を会場収容人数の約四八〇人に制限するなど、感染予防を徹底する努力も忘れないう。若手民謡歌手で今回の事務局の白鳥拓人さんは「この時期にコンサートを企画、開催することは容易ではありませんでしたが、継続して東北の民謡を紹介出来たことが何よりの

喜びです。来場者、関係者のコロナ陽性者を出すことなく無事終演出来安堵しております」

多賀城市の会社員、鈴木怜菜さんは「お客様の前で唄うのは久しぶり。楽しんでもらえる舞台にしたい」と意気込んだ。



民謡の祭典 2年ぶり開催

風俗歌、俚謡、俗謡、民謡。令和になって、時代とともに民謡が変化していることを以前話をしたが、宮城の若手も捨てたもんじゃないと感じてきた。ただ、伝承していく上で楽しみ方にも変化が必要と考える。宮城県の民謡を学びつつ、全国の民謡に目を向け学び、奥の深い、幅のある民謡音楽と

して、今後も伝承する努力を惜しまず進めていくよう願っている。

二代目 藤^{ふじ}本^{もと}和^{かず}夫^お
(民謡・端唄・小唄・現代楽 三味線演奏者)

演劇

とんでもない時代になった。コロナ禍で、芸術全般が「不要不急」とされる中、とりわけ演劇は、企画から発表に至る期間が長く、関わる人数が多いこともあり、公開にストップがかけられると、それまでの過程が水泡に帰してしまう。公演会場として使われることの多い公共施設は、一年前の予約が基本で、仕切り直しをするにしても、また同じくらしい期間を要するし、その場合でも、同じ出演者やスタッフが再集結することは、ほぼ望めない。加えて、準備に要した費用の補償もないので、活動を継続する力のない集団も多数存在するだろう。

そんな中、大きな力を発揮したのは、公共施設である。

仙台舞台芸術フォーラム2011→2021東北

(公財) 仙台市市民文化事業団と仙台市が主催。せんだい演劇工房 10-BOX box-1 を会場に、一月にシア・トリエ(福島市)『キル兄にゃとU子さん』(作・演出…大信ペリカン)、二月に劇團うたたね〈ドット〉『咆哮へ私たちはもう泣かない』(作…文三、演出…三國裕子)、そして、方丈の海

2021プロジェクトとの共催で『方丈の海』(作・石川裕人、演出…渡部ギユウ)を二月から三月にかけて上演している。(なお、この作品は、三月に東京公演も行っている。)いずれも東日本大震災を基点として創作された作品であり、自治体のバックアップがなければ、再演が難しい状況だったと思われるだけに、公共施設の意義を再確認する企画だったと思われる。

せんだい短編戯曲賞 最終候補作品 7作連続上演

一方、Team HaClose が仙台市市民文化事業団と共催で実施したこの企画は、第一回から第七回までのせんだい短編戯曲賞の最終候補作品の中から各回、一作品を取り上げて連続で上演するものだったが、二月に行ったトライアル公演(第五回の候補作)の『歩』(作…寺戸隆之、演出…武田らこ)が地震の影響で上演を一回、中止している。六月に第一回の候補作『目病み猫と水のない水槽』(作…川津羊太郎、演出…武田らこ)、八月に第二回の候補作『いつも心だけが追いつかない』(作…ハセガワアユム、演出…武田らこ)、十一月に

第五回の候補作『海から来た人』（作：古川大輔、演出：武田らこ）、十二月に第三回の候補作『路上芝居』（作：國吉咲貴、演出：大河原準介）と第四回の候補作『或夜の感想』（作：三浦雨林、演出：大河原準介）を上演したものの、四月に予定していた第六回の候補作『×（ペケ）な人々』（作：升浩一郎）は九箇月延期したが、結局、中止となり、第七回の候補作の上演も中止となった。公共施設のバックアップがあつてさえも、上演中止や延期のリスクが高いことが明らかになつた。

仙台市宮城野区文化センター

仙台市市民文化事業団同様、この施設も様々な自主事業を行っている。

二月二十一日、舞台スタッフ・ラボ×みやぶん演劇学校朗読劇『ゼロ弾きのゴースト』（原作：宮沢賢治、演出：茅根利安）。舞台スタッフの養成講座の実践の場として、演劇学校修了者のステージを制作。

二月二十七日、パトナシアター、第三回仙台短編文学賞の大賞受賞作のリーディング・ステージ『境界の円居』（原作：佐藤厚志、演出：伊藤み弥、出演：相澤一成）

十月九日、パトナシアター、みやぶんワンコインシアター

vol.4『チェコSF短編小説を読む』（出演：杉尾宗紀）

十二月九日、パトナシアター、みやぶんワンコインシアター vol.5『籠城のビール』（原作：伊坂幸太郎、演出：箱崎貴司）
十二月には、みやぶん演劇学校を開校。

フェニックス・プロジェクト2021〜10年／今、この地に生きる』

震災後、東京を中心に行われてきた日本演出者協会の企画が、今年には仙台で行われた。

第一期は、『みんなここに居ればいい』あの日からのみちのく怪談』（台本構成：高橋菜穂子、演出：渡部ギユウ）と『ファミリーツリー』（作：相澤一成、演出：伊藤み弥）の二作品のリーディング上演。八月二十八日、二十九日、エル・パーク仙台スタジオホール。コロナの緊急事態が発令され、この翌日から会場を使用できなくなるギリギリの日程であつた。

第二期は、『フクシマを通して見る今と未来』と題して、風煉ダンス（東京）朗読劇『まつろわぬ民2021更地のうた』（作・演出：林周二）を中心としたクロストークと写真の展示が行われた。十一月六日、七日、せんだいメディアアテック。
第三期は、十二月十七日〜十九日、せんだい演劇工房「BOX BOX-1」で、東北在住の若手劇作家の作品のリーディング上演を行った。

コロナの影響で、演劇の上演には、大きなリスクが伴うようになった。それでも上演を継続している劇団は、その体制に見習うべきものがある。

Gin's Bar、アクターズ仙台、Whiteプロジェクト

井伏銀太郎を中心に、良質な芝居を作り続けている集団である。コロナ禍の中で、多くの作品を上演できた要因として、自前のアトリエを保有して、そこを適切に管理していることがあるのだろう。

二月に、せんだい3・11メモリアル交流館で『かえりびな』『Prelude—天使が生まれた日—』を無料上演し、三月には、クオータースタジオで、短編劇集『おんなたちの3・11』を上演。(以下は特記がなければ、会場はクオータースタジオ)六月には、新作『紅 あさき夢みし』、七月には、『やがて春へ』と題して、『イーハトーブの雪』と『桜ひとひら』を再演。八月には、『風邪ひきジュリエット』と『マリリンに濃厚接触』、九月には、新作『TRICOLORE 恋愛映画のように』をダブルキャストで上演。十二月には、『Noie—時の名残り—』(作・演出・出演：井伏銀太郎、演出：西澤由美子、出演：恋宵)を上演している。

また、劇団内劇団として、諸戸祐生に劇団La Binnacを

旗揚げさせ、五月に『諸戸祐生暗闇芝居四部作』を上演させている。戯曲というより小説に近い作品であるが、これを演劇として上演させる度量の広さが井伏銀太郎の魅力だと思える。

仙臺まちなかシアター

昨年引き続き、仙台市内の飲食店を会場に、朗読劇を楽しむ企画である。コロナ対策のため、店内では飲み物だけが提供され、食事は弁当等の持ち帰りと変更されている。

二〇二〇年度第三クールが五作品、第一クールが七作品、第二クールが四作品と計十六作品が上演されている。江戸川乱歩、小川洋子、向田邦子、芥川龍之介、夏目漱石、遠藤周作、岡本かの子、田辺聖子、太宰治、山本周五郎、新美南吉、林芙美子といった様々な作家の作品が取り上げられ、演奏家とのコラボレーションもあり、バラエティに富んだプログラムになっている。

コマイぬ月いち読み芝居 拝み屋怪談郷内心瞳を読む

怪談を読む、それだけの企画であるが、何年も継続している。これからも続いて欲しい。

第二十三夜『おひとり会』(出演：芝原弘、以下特記がなければ芝原は出演)四月二十五日、旧観慶丸商店

第二十四夜『病院の怪談』（出演：原西忠佑、飯沼由和）

五月三十日、旧観慶丸商店

第二十五夜『二人会』（出演：郷内心瞳）七月二十六日、

旧観慶丸商店

第二十六夜『災い百物語』（× cocoro-mille）八月二十三日、

石巻市かわまち交流センターかわべい・市民交流ホール

第二十七夜『緋色の女』（×劇団「スイミーはまだ旅の途中」）

九月二十六日、多目的交流スペース「土音（どん）」

第二十八夜『火だるま乙女』（声の出演：吉水雪乃、吉水恭子）

十月二十四日、旧観慶丸商店

以下に、月を追いながら、一年を振り返ってみよう。

一月

山元町こどもミュージカルプロジェクト『シンデレラ』（脚本・演出・出演：渡辺リカ）、二十四日、つばめの杜ひだまりホール（山元町）。

二月

AZ9 ジュニア・アクトーズ第二十八回公演『しばた観音サミット〜地球温暖化対策会議〜』（作：クマガイコウキ、構成・演出：渡部ギユウ）十三日、十四日、えずこホール大

ホール

三月

若林演劇研究会『山巔の星 慶念坊』（脚本・演出：佐々木則夫）十四日、仙台市福祉プラザふれあいホール。江戸時代から明治にかけて、涌谷で活動した僧侶の物語。

五月

劇団短距離男道ミサイル36発目『みちのく超人伝説 北天鬼神譚アクロロ 阿弓流為乙』（作・演出：本田椋）。二十七日〜三十日、六月一日〜七日、せんだい演劇工房 10-BOX box-1。全国的な人気劇団の新作ロングラン上演。

六月

東北えびす『皆々さまへ』（作：ダニエル・キーン、演出：高橋菜穂子、出演：渡部ギユウ・藤原貢、ピアノ：石垣弘子）十一日〜十三日、せんだい演劇工房 10-BOX box-1

七月

A Ladybird Theater Company 第十八回公演『勿忘草は月に願う』（脚本・演出：箱崎貴司）。二日〜四日、仙台市宮城野区文化センターパトナシアター。仙台で随一のエンター

テイメント集団が神話に題材を得て描いた作品。

演劇ユニット Wreathe 第一回公演『猫と針』（作：恩田陸、演出：相田直宏）。二十四日、二十五日、エル・パーク仙台スタジオホール。小説家・恩田陸が演劇集団キャラメルボックスに書き下ろした作品をこれが初公演となる劇団が上演。

Tie Tone『赤鬼』（原作：野田秀樹、演出：よしためぐみ）二十三日～二十五日、せんだい演劇工房 10-BOX box1。石巻を中心に活動するよしためぐみと大橋奈央のユニットの旗揚げ公演。

最強の一人芝居フェスティバル インディペンデント仙台公演が二十九日～八月一日、せんだい演劇工房 10-BOX box1で開催された。仙台からは、『ずんだクエスト』（脚本：演出：山田百次、出演：菊池佳南）、『アングの日記』（脚本：演出：渡辺陽、脚本：出演：x梨ライヒ）、『はなして』（脚本：演出：生田恵、出演：瀧原弘子）の三作品が参加している。

八月

子どもミュージカル劇団たまごファーム エンターテイメントショー VOL.10『Rin. ♪ 青い鳥が欲しいんだってば！』（プロデューサー：渡部三妙子）十二日、仙台市広瀬文化センターホール

一言 第七回公演『スウィング・アウト・ペアレンツ』（作：

太田善也、演出：飯沼由和、出演：原西忠佑、瀧原弘子、芝原弘、永澤真美、白鳥英一、横山真、武田らこ、キサラカツユキ、大槻桃子、松崎太郎）。二十六日～二十九日、せんだい演劇工房 10-BOX box1。仙台オールスターズで描くコメディ。

劇団えずこシアター第二十三回公演『宇宙戦艦エズコ』えずこホール平土間ホール

九月

劇団ひとりっこ『喜劇 毒きのこ』（作：飯沢匡、演出：なかじょうのぶ）二十五日、二十六日、仙台市市民活動サポーターセンター市民活動シアター。

大人のための演劇クラブ第四回公演『こんにちは、母さん』（作：永井愛、演出：渡部ギユウ）。三十日～十月三日、せんだい演劇工房 10-BOX box1。上演時間が三時間を超える名作に、人生経験豊かな新人の体当たりな演技が新鮮だった。

十月

七日～十日に予定されていた「せんだい卸町アートマルシェ」は、中止となった。県内だけではなく東京などから、約二十の団体が参加するはずだったので、その衝撃は大きかった。

登米・小中高生劇団「ドリーム☆キッズ」第十九回公演『マイ・メロディ』（脚本・演出：渡部三妙子）十七日、登米祝祭劇場

日英共同制作舞台『炎・Honō』二十四日、仙台市宮城野区文化センターパトナシアター。仙台市の「PLAY ART せんだい」とイギリス・スコットランドの劇団「トリッキー・ハット」が共同制作した舞台作品。

仙台シアターラボ公演 Fukushima Meets Miyagi Folklore Project#5『禍の光』（作：ソフォクレス、改作：ベルトルト・ブレヒト、テキスト・構成・演出：野々下孝）三十日、三十一日、せんだい演劇工房 10-BOX 別館能・BOX

十一月

いしのみき演劇祭は、昨年、中止となったので、二年ぶりの開催となった。劇団鳥や『アンーはじめてのうそー』『The Tone『赤鬼』、インプロ仙台PAGE☆ANT『Plant M』あらわれるげきじょう』、劇団「スイミーはまだ旅の途中」が参加している。

演劇ワークショップ Pegg 演劇公演シーズン6『世紀末に乾杯！』（脚本・演出：渡部三妙子、音楽：橋元成朋・玉造美奈子）十三日、十四日、エル・パーク仙台スタジオホール。ミヒヤエル・エンゲの童話をモチーフにした音楽劇。

ナターシャ・プレシコフ第二回公演『月夕〜 Long After Record〜』（作：川口清人、演出：高江智陽）。十九日、二十一日、仙台市宮城野区文化センターパトナシアター

Plant M No.18『あらわれるげきじょう』（作・演出：樋口ミユ、出演「佐々木久美子、熊谷由海、松崎太郎」）十八日、十九日、青葉の風テラス

劇団鳥や公演『アンーはじめてのうそー』（原作：ルーシー・M・モンゴメリ、脚色・演出：芹口十三）二十一日、大崎市民図書館、二十三日、青葉の風テラス

わたりキッズわくわくプロジェクト『おー、サバンナ』（脚本・演出・出演・渡辺リカ）、二十八日、農村環境改善センター（亘理町）

十二月

『てんとせん』（作・演出：柴幸男）四日、五日、仙台市宮城野区文化センターパトナシアター。仙台舞台芸術フォーラムの最後の作品。二〇〇四年に『ドドミノ』で、仙台劇のまち戯曲賞大賞を受賞した柴幸男の最新作。東日本大震災からの十年の時の流れをテーマにしている。出演は、『ドドミノ』の初演にも出演した原西忠佑を初め、仙台と東京の俳優が集まっている。

YONEZAWA GYU OFFICE『エクスペリメンタル貧民街の

善人』(原作…ベルトルト・ブレヒト、訳・台本…宮島春彦、構成・演出・出演…渡部ギユウ、出演…紅絹、芝原弘、原西忠佑、他)二十三日〜二十六日、エル・パーク仙台スタジアムホール。ブレヒトの寓話劇に仙台の演劇人が集結した大作。

鈴 すず

嶋 かみ

久 ひさ

善 よし

(演劇ジャーナリスト)

洋舞

昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染症のパンデミックの収束が見えない日常になり、想像を超える状況となつてしまいました。それに加えて十年前の東日本大震災を思わせるような地震にもみまわれ、ノーマルな生活を維持していく事が難しく精神力をすっかりつけていかなければ生きていけない時代を迎えてしまったのだと、不安な気持ちでいっぱいです。こう言う時こそ、体力や強靱な精神力をつけることが大事な事を再確認し、それをつけるのにバレエ芸術は最適です。芸術文化の必要性を感じて、舞台公演を通じて人とのつながりの大切さを訴えたいです。ネガティブな出来事はマイナスの事ばかりではなく、世界に目を向ける一つのチャンスだともとらえられます。歩みを止めることなく努力をし続けていけば、世界中が相互の思いやりを軸に、多くの心の支援の輪が広がる事でしょう。ポジティブな思考が日常を取り戻せる第一歩と考え、努力の日々を継続していきたいものです。

県内の活動

○二月二十八日 パリエ・クラス・ドウ・バレエ 第二十四回

発表会 バレエコンサート 名取市文化会館大ホール 主宰
辻真弓

○三月七日 沖繩の戦争体験をダンスで表現する「アーカー
シャのうた鯨井巖著『一学徒兵の北部沖繩戦回想録』宮城
県芸術選奨・舞踊部門新人賞のダンサー鯨井謙太郎さんたち
が出演。ダンスと語り、合唱、三線を融合させた舞台。エル・
パーク仙台スタジオホール

○五月一日 バレエスタジオ・テップタップ 第十五回発表
会 コンサート・眠れる森の美女より 仙台市太白区文化セ
ンター音楽楽ホール 主宰 斉藤和美

○五月九日 バレエスタジオアンユニバー 第五回発表会
コンサート・パキータ イズミティ21大ホール 主宰 井出
和香子

○五月二十三日 SENDAI M&M Ballet S
tudio 第二回発表会 バレエコンサート 仙台市太白
区文化センター音楽楽ホール 主宰 チョミンヨン 三好麻
沙美

○七月一日 気仙沼市社交ダンス教室が帰ってきた。津波で

流され、移転先でも立ち退きを迫られた。新天地の南気仙沼地区で三度目のオープンを果たした。背中を押したのは、被災した生徒達の声援だった。被災した時は、思い出も、苦勞した歴史も、跡形なく消えていた。こういう時だからこそダンスが大事と、励ましあった。せっかく生き延びたんだから、みんな楽しく生きねばと。

○七月二十五日 バレエスタジオエスポワール 第十二回発表会 コンサート・クララの夢 多賀城市文化センター大ホール 主宰 太田葉子

○八月一日 ローズマリイバレエスタジオ 第三回発表会 人魚姫・海賊 名取市文化会館大ホール 主宰 スロラク・太田麻里衣

○九月二十日 エトワールバレエ館 第二十五回GALLA CONCERT 不思議の国のアリス・クララの夢 広瀬文化センターホール 主宰 川村美佐子

○十月二十四日 第四十六回なとり文化芸術祭 レクダンス、ステキな仲間。仙台ノイエタンス研究所、振付千尋洋子「陽気な天使たち」他。クレールバレエアトリエ、振付高橋厚子「ライジングスター ヴァリエーション」。裕バレエアクト「海賊」など、昨年中止になったこともあり、改めて喜びをかみしめた芸術祭が開催され、意気込みも充分に個性豊かな作品が披露された。名取市文化会館大ホール

○十一月七日 マイダンスショップ 第二十四回発表会 多賀城市文化センター大ホール 主宰 大前雅信 高橋由紀子
○十一月二十三日 まりなバレエスタジオ フェ・エ・リクララの夢・小品集 名取市文化会館大ホール 主宰 小山真利奈

○十二月一日 ハイパーウィンド仙台 オンラインバレエ&ダンスコンサート「アタシの居場所」くるみ割り人形くららの夢他、七作品・四十名の出演。平多浩子舞踊研究所・バレエ&ダンススタジオパッソ・バレエスタジオティップタツプ他

○十二月二日 インテグレイテッド・ダンス・カンパニー響ーKyo 車いすのダンサーが参加するコンテンポラリーダンス 宮沢賢治の童話「シグナルとシグナレス」をモチーフにした「おどる童話『カタン・カタン』」他を披露する。舞台と社会をつなぐ活動を展開する。

○十二月十八日～十九日 「絆」テーマにダンス公演 ソーシャルアートプロジェクト仙台市の平間文朗さんと川畑えみりさんダンサー五人が出演する。「自助」や「共助」のありようを舞踊で表現し、東日本大震災時にクローズアップされた「絆」を再考する。

○十二月二十一日 佐取純子モダンバレエ舞踊公演 「遠い響 浴く光」 東日本大震災の犠牲者の鎮魂を込めた舞台。

日本舞踊家中川雅寛さん創作の「奥羽綿津見盆踊」別離の悲しみや生命の循環を表現。希望の光が差し込むさまを描く。津軽三味線・和太鼓・落語家の口上もあり、コロナ禍のため昨年八月無観客で上演し、オンライン配信した作品を拡充した。日立システムズホール仙台

県外組織団体の公演

百五十年以上の歴史を誇る名門バレエ団 キエフバレエ団が東京エレクトロンホール宮城で「白鳥の湖」を公演するため二年ぶりの来日予定でしたが、コロナの影響で中止となりました。キエフバレエは、ウクライナ国立歌劇場を本拠地としています。

コンクール（県内）

○二月十三日～十四日 第十六回ダンスコンペティション in 仙台2021、多賀城市文化センター大ホール「モダンダンス」「クラシック」いずれも全国対象。クラシックは地震の影響で会館が使用不可能となり、中止となった。審査委員長・山野博大。主催・DCS実行委員会 共催・宮城県洋舞団体連合会 会長・佐東悦子

○三月三十日 第八回NBA仙台バレエコンクール（全国対象）電力ホール。参加者二百九十九名 主催 NBAバレエ

団

○四月一日～四月三日 第十六回ALL NIPPOND・A・T・E.クラシックバレエコンペティションMIYAGI（通称・伊達コンペティション 全国対象）マスク着用厳守、除菌、検温をした上での開催。仙台市太白区文化センター楽楽ホール。参加者百八十七名。ゲスト審査員オリバー・ホークス、審査委員長・高橋厚子、プレ審査委員長・中村道子

団体（県内・県外）

★今年、松山バレエ団員約六十人が団の草創期に教えを受けた仙台市出身のバレエダンサー東勇作先生の菩提寺である若林区の令源寺を訪れ、恩師への感謝と今後の精進を誓った。

今年、舞踊歴七十年を迎え、理事長・団長を務める森下洋子さんは、東先生が築いた礎のおかげで、私たちは今も舞台を続ける事ができると謝辞を述べた。総代表の清水哲太郎さんは、東先生から物事の本質を追究する精神を学んだと語った。松山バレエ団創設者の松山樹子さんは、東先生が主宰したバレエ団で活躍し、後に東先生を指導者に迎え、そして東先生を支えた。

個人（県内）

★寺嶋花恋さん 仙台市泉区の小学校に東日本大震災の経験を話してほしいと二度招かれた。もう誰にもあんな思いをさせたくないという一心で、自分の言葉で児童らに命の大切さを訴えた。大変な経験を伝える事が誰かの役に立ち、支援への恩返しになるはずと、幼少期から好きなダンスの披露で、勇気を届けた。

★渡辺楓さん ブレイクダンスの国際大会で初優勝。アイルランドの競技団体がオンラインで開催した「SDIワールドダンスチャンピオンシップ」予選通過八名によるトーナメントで争い、難度の高い技を成功させた。今年の全日本選手権は優勝をめざし日本ダンススポーツ連盟に指定されると日本代表に近づくと、世界を見据えている。

★釜沼来美さん 二〇一七年オーストラリアのADPIへ留学。二〇一八年ALL NIPPON D.A.T.E.クラシックバレエコンペティションMIYAGI A・II部門にて第一位。イギリスのRobert Schombergへ留学。ドイツローマ取得。二〇二一年マシューボーンのN



釜沼来美氏 Caspar mott 氏
(Un(i) From sonatas)

ut cracker に出演し、イギリスをツアーで周る。二〇二二年ロイヤルアルバートホールにて行われるマシューボーンのThe Car Man、その後、眠りの森の美女に出演予定。



釜沼来美氏ソロ

個人(県外)

★加治屋百合子さん 名古屋生まれ 十歳で上海バレエ学校に留学、ローザンヌ国際バレエコンクールでローザンヌ賞を受賞。アメリカンバレエシアターやヒューストンバレエでソリスト・プリンシパルとして活躍。芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。

★井関佐和子さん スイス・チューリッヒ国立バレエ学校を経て、モリスベジャールらに師事。ネザラランド・ダンス・シアターIIやクルベルグ・バレエなどで活躍。
芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。

日本の歴史に残るバレエダンサー(県内・県外)

★東勇作さん 仙台出身。日本のクラシックバレエの先駆者。

仙台市西公園の一角に、日本のクラシックバレエの先駆者・東勇作のブロンズ像がある。代表する演目「牧神の午後」の一場面だ。ロシアのバレエダンサー、アンナ・パブロワの舞台に魅了され、バレエを志した。旧制二中（現仙台二高）を卒業して上京し、ロシアの亡命ダンサーに師事した。当時はバレエの草創期で情報が少なく体格も欧米に比べハンディがある。独学でフランス語の技術書読んだり研究会に参加したりして努力と実績を積み、自らのバレエ団を設立した。勇作が特に関心をもったのが伝説的ダンサーのニジンスキーが振り付けて主演した「牧神の午後」勇作のバレエ団の第一回公演で上演し代表作となった。門下生の松山樹子、松尾明美、薄井憲二らはバレエ界に大きな足跡を残した。門下生によく、「立派な踊り手になるためには踊りのテクニクだけでは足りない。他の芸術にも深い理解がなければ」と話していた。

★牧阿佐美さん 東京都出身。舞踊家、指導者として日本のバレエ界をけん引してきた牧阿佐美バレエ団の創設者。母で、日本バレエ界の草分けてき存在の橘秋子さんの下、幼少期からバレエを学び海外のバレエ学校でも指導を受けた。草刈民代さんや金森譲さん、上野水香さんら日本を代表するダンサーを育成し、新国立劇場の舞踊監督も務めた。紫綬褒章受賞。文化功労者。十月東京都内の自宅で死去した。

状況に伴いオンラインのバレエ公演も開催が多くなりました。直接舞台観賞、舞台製作を開催することが希望の本音ですが、バレエ・ダンス芸術に様々な形を通して、触れている日常を取り戻す事が第一です。

高^{たか}

橋^{はし}

厚^{あつ}

子^こ

（宮城県芸術協会舞踊部部长）

日舞

●世の中の動向

昨年から続く世界的な新型コロナウイルス感染症の感染者数は増減を繰り返した。感染が拡大した地域では感染者数に応じて「緊急事態宣言」や「まん延防止重点措置」が発令、発出された。二月からはワクチン接種を医療従事者、高齢者から順次開始。政府はワクチン接種を「感染予防の決め手」と位置づけた。国民は「密」になることを避け、マスクを着用し、手の消毒や手洗いを励行した。家以外でのマスクの着用が当たり前な世の中になった。仕事は自宅での「リモートワーク」が推奨された。感染拡大時は外出や外食の自粛なども要請され、生活様式が大きく変わった。

その中で一年延期された「東京オリンピック・パラリンピック」が様々議論され、開催の是非も賛否両論の中で、無観客等変則的に開催された。

そして東日本大震災から十年目を迎える節目の年、二月には再び最大震度6強を記録する福島県沖の地震に見舞われた。その後も度々余震が起こっている。

七月に東京都議選、九月には菅総理の退陣、岸田総理誕生、

十月に衆議院選挙と政治の世界も目まぐるしく変わった。

長期に渡るコロナ禍の下、感染を防止しながら、止めていた経済活動、社会活動を再開し始めるコロナとの共存「ウィズコロナ」が提唱されるようになった。

「ウィズコロナ」がいわれるようになってから、人それぞれへのコロナに対する考え方、行動に変化や差が出てきた。例えば感染者が減少にある時期、「感染に気をつけ対策をとりながら旅行に出かける」と動き始める人がいる一方で、「感染の可能性はあるのだから自粛を続ける」と引き続き慎重に自粛を続ける人もいるという具合である。

コロナ禍で社会、経済も停滞する中、人の心や行動も変化し混乱をきたし、振り回された一年であった。

◎コロナ禍における歌舞伎座の感染対策

令和二年の緊急事態宣言解除後、業種業態により感染防止のためのガイドラインが設けられた。イベント開催も入場人数の制限、消毒の徹底、出演者の主催者による行動管理など協力が要請されたが本年度もこれを継続した。歌舞伎の興行

が上演される東京・歌舞伎座は国や感染症の専門家の意見を
取り入れ、興行における感染対策のひな形となるべく対策を
施した。座席の前後左右を一席ずつ空けるかたちで入場者数
を五十%削減。座席等消毒の徹底。チケット購入者の連絡先
把握。場内でのマスク着用。場内外での会話と飲食を徹底的
に禁止。出演者・裏方スタッフ全員のPCR検査の徹底。演
目も舞台上で役者が密にならないように登場人物の少ない狂
言が選ばれる等、これ以上ない位の感染予防対策を施し上演
を継続した。

歌舞伎、文楽、日本舞踊、邦楽演奏会などを催す東京・国
立劇場も歌舞伎座に倣い同様の感染防止対策を施し上演し
た。

●宮城県内の日本舞踊界の動向

本年度の（公社）日本舞踊協会宮城県支部の会員を中心と
した舞踊家は昨年終息をみない新型コロナウイルス感染
拡大と頻発する地震に見舞われ、不安と混乱の世相の大きな
影響を受けた。新型コロナウイルスとの共存がいわれる中で、
感染状況を鑑みながら、様々制約を受けつつの活動となった。

◎コロナ禍における日常の稽古

緊急事態宣言の自粛期間中、多くの指導者は稽古を休みに

せざるを得なかった。門戸は開き稽古に通うかどうかの判断
は弟子にまかせた指導者もいた。パソコン等の端末を利用し
遠隔で稽古が出来る「リモートでの稽古」を採用した舞踊家・
指導者もいた。

緊急事態宣言があげた後、大方の稽古は再開されたが、弟
子同士が稽古場で「密」にならないよう工夫したり、稽古時
もマスクを着用するなど対策が取られた。

しかし長引くコロナ禍と重症化の心配から個人の判断や
「人との接触は避けた方が良い」との家族の強い意見で、や
めてしまう弟子、退会する人も多かったと聞く。師匠の側で
も、高齢や基礎疾患をもつ指導者の中にも感染を恐れ、稽古
を再開できない先生方もいる。只でさえ、日本舞踊人口が減
少傾向にある今日、コロナ禍での「非日常の稽古」は大きな
痛手である。

◎コロナ禍での宮城県内舞踊公演の開催

今年度予定されていた舞踊会、発表会は「感染状況を鑑み
ながら感染防止策をとりながらの開催」と「延期・中止」に
分かれた。

開催された会はコロナと社会活動を共存させていく社会状
況、方向性を踏まえ、感染状況を鑑み、前述した歌舞伎座の

感染対策を参考に感染防止のガイドラインに沿った対策を施した。有事の際の為、入場者の連絡先を把握し、舞台上の立方以外は出演者も観客もマスクやフェイスシールドを着用、場内での飲食や会話は控え、出演者以外楽屋への出入りも遠慮してもらおうなどの対策をとった。会主をはじめ演者、観客双方の心構えと対策の順守が功を奏し、舞踊公演からクラスターが発生することは無く無事に会を納めることが出来た。

舞踊会、発表会を開催するためには、数年前から出し物の稽古に励み、様々な準備を重ね、多くの費用もかけて当日に至るので、開催出来ても、延期となっても、先が見通せないコロナ禍の影響は甚大である。会を延期したり、新たに来年再来年の会を計画したくても、いつコロナ禍が終息するか現時点では不明なので不安を抱えざるを得ない。そのために先々の舞踊会・発表会の計画も明確には立てにくい。出演を予定していた演者も、月日が延びれば様々な事情が生じ出演できないかもしれないし、意欲よりも心配が先に立ってしまう。

舞踊を修練する者にとって目標となる会が開催出来ないことは、意欲を失い、習う魅力も半減し、ひいては日本舞踊の衰退の危機にも繋がって行く。

一方で、無くてはならない、かけがえのない「支える人々」もコロナ禍で危機的状况に置かれている。日本舞踊の舞台を

支えているのは大道具、小道具、衣裳、かつら、床山、地方と呼ばれる三味線やお囃子などの演奏家など、多くの裏方職人である。その職人達がコロナ禍による舞踊公演の延期・中止、激減で仕事がなく、生活のため他の職種でアルバイトをして凌いでいる。中には転職や廃業をする人も現実に出てきた。裏方や職人の後継者不足は元々言われていたが、コロナ禍でそのスピードが急速に速まった感がある。一旦失ったものは容易には戻らない。

コロナ禍が長期になればなるほど日本舞踊の世界は全体的に存亡の危機に陥る恐れがある。

●(公社)日本舞踊協会宮城県支部六十年史の発刊

宮城県支部の創立六十周年の節目にあたり、編集に四年の歳月をかけて発刊された。創立以来の支部の歩み、年表、記録、写真が掲載された先人の努力や功績が偲ばれる内容で意義ある記念誌となった。水木歌泰支部長のもと、藤間寿和枝を中心に吉村花照・水木歌惣・水木和歌那・若柳梅京の五名の支部役員により編集。

●東京オリンピックと日本舞踊

延期された東京オリンピック・パラリンピックが賛否両論あるなかで、無観客など条件付で開催された。各国のオリ

ピック選手達は世界的にコロナがまん延し制約のある中、連日素晴らしい競技を披露した。

東京オリンピックでは全世界に日本の文化も発信されるはずだった。と同時に日本人も日本の文化を再認識する機会になるはずだった。日本舞踊の良さを内外に知ってもらうための多彩な企画が準備されていたが、コロナ禍で海外からの渡航が禁止され外国人観光客も無し。オリンピック競技会場は無観客。そして感染防止のため公演も自粛や中止ですべてが水泡に帰した。

オリンピックは日本文化の更なる発展の起爆剤として期待されていた。日本の伝統文化である日本舞踊を多くの方に見て貰い、楽しんで貰い、知って貰い、理解して貰う無二の機会だっただけに、残念で残念でならない。

●コロナ終息後の日本舞踊の可能性

コロナ禍が終息すると、人々の気持ちも前向きに晴れ、新しい事を始めたり、心や人生の充実を求め文化的なことに目を向け、習い始める人も多いのではないだろうか。

日本舞踊は、体と頭両方を使う。健康維持にはもってこいである。また稽古では着物や浴衣を着るので、着物を着慣れる。季節や人の感情の機微に敏感になり、音曲や絵画、歴史にも興味や教養が深まる。「日本舞踊のよさ」を知ってもら

う機会を工夫し、コロナ終息後の好機を是非活かしてもらいたい。

●宮城県内外での舞踊公演の記録

◎開催

○【仙台市】

第六回 梅京会

令和三年四月二十五日

仙台 電力ホール

会主 若柳 梅京

子供舞踊 娘三番叟

碧水園子ども日本舞踊講座

常磐津 屋敷娘 若柳 京天

常磐津 松 島 若柳 京之朗

義太夫 櫓のお七 若柳 京杏

長 唄 島の千歳 若柳 京瑠璃

長 唄 藤 娘 若柳 京友里

義太夫 廿四孝 若柳 園結

大和楽 団十郎娘 若柳 佐枝美

長 唄 三日月女太夫 若柳 梅京

他 計十九番

コロナ禍で一年延期しての開催。舞台も客席も裏方も、喜びと華やきに満ちた会になった。子供達も大勢出演し、会主の地元での文化活動への寄与や子供達への育成事業への取組の成果が着実に実を結んでいる。口上で九名の新名取を披露。会主は女大夫で粋で仇な洒落た踊りを見せた。

○【仙台市】

第一回宮城県各流子ども舞踊発表会

令和三年六月二十七日

仙台市戦災復興記念館ホール

(公社) 日本舞踊協会宮城県支部主催

催

十社中 二十六名参加

次世代を担う子供達に日本舞踊を伝え、自粛中に希望を持ってもらう機会として開催された。四歳から中学三年生までの子供達が真摯に踊る姿は将来



三日月女太夫 若柳梅京



子ども舞踊発表会出演者

の大きな希望に結びついた。この輪が広がって欲しい。意義のある会だった。

○【仙台市】

寿和枝会

令和三年九月二十三日

仙台 電力ホール

会主 藤間 寿和枝

第一部 藤間 寿和枝 リサイ

タル

「江戸の粋」常磐津二題

常磐津 景 清

常磐津 雷船頭

藤間 寿和枝
他 計三番

第二部

長唄 藤 娘 藤間 寿海華

清元 卯の花 藤間 寿枝幸

長唄 鷺 娘 藤間 和寿葉

常磐津連中 望月太喜右衛門社中 他 計八番

常磐津連中 望月太喜右衛門社中 出演

第一部のリサイタルで会主が「江戸の粋」と題し、立役と



景 清 藤間寿和枝

女形、素踊りと衣裳付けの変化にとんだ対照的な二曲を披露。見事にその魅力を演じ分けた。「景清」は藤間流においては重い難曲。平家の強者が廓通いをする柔軟を格調高く大きく見せた。「雷船頭」は女船頭の仇な色気を遊び心いっぱいに魅力的に表現した。常磐津の演奏も艶があった。第二部は門弟会。古典を華やかに格調高く踊った。



雷船頭 藤間寿和枝

○【白石市】

文化庁アートキャラバン事業

東・西古楽器の競演と舞

パイプオルガンと笙と日舞を楽しむ

令和三年九月二十五日

白石市ホワイトキューブ

長 唄 雛鶴三番叟 若柳 梅京

日舞と競演

日本歌曲より春夏秋冬メドレー

お正月、さくら、おぼろ月夜、浜辺の歌、村祭り、

七夕さま、赤とんぼ、うさぎ、ふるさと

若柳 梅京

花柳 寿美衡

社中

パイプオルガンと笙の演奏で「さくら」「ふるさと」などの日本の懐かしい曲を踊る斬新な公演。

○【白石市】

文化庁アートキャラバン事業

平家物語の世界〜日本舞踊×琵琶×能舞

令和三年十一月二十三日

白石市古典芸能伝承の館「碧水園」

日本舞踊「八島官女」 若柳 梅京

新作朗読舞踊音楽劇「耳無シ芳一」

舞踊 若柳 梅京

他

能舞台で「平家物語」をテーマに日本舞踊と琵琶と仕舞の意欲的な異色の共演。新作朗読舞踊音楽劇「耳無シ芳一」では若柳梅京が一人八役を演じた。



若柳梅京

○〔仙台市〕

歳末たすけ合い

第五十八回各流舞踊大会

令和三年十二月五日

仙台 電力ホール

水木歌泰社中「新曲浦島」・花柳雅好社中「老松」・花柳登
 代尋社中「蓬萊」・水木歌惣社中「松の縁」・水木和歌那社中
 「京の四季」・「祇園の夜桜」・吉村花照社中「元禄花見踊」・「祇
 園小唄」・若柳尋寿賀社中「春雨」・「一円玉の旅がらす」・「海」・
 藤間勘そめ社中「城」・「うかれ瓢箪」

他 計二十二社中出演

二部構成での上演。コロナ禍で
 二年ぶりの公演。収益と募金は「N
 HK歳末たすけ合い」と「宮城県
 社会福祉基金」「仙台市社会福祉
 協議会」へ贈呈された。



ご挨拶

◎延期

○日本舞踊協会宮城県支部各流舞踊公演

○歌泰会 会主 水木 歌泰

○尋葉奈会 会主 花柳 尋葉奈

大須賀

（日舞名取・歌舞伎大向弥生会副会長）豊

茶 道

令和三年に入っても新型コロナウイルス感染拡大は終息が見られず、各流派とも計画していたお茶会・行事等を、止むを得ず取り止められたようである。

コロナ禍の中、感染予防に徹しつつ、オンラインやZoom等を利用しての行事やお茶会を開かれた流派もあり、又、お稽古を続けられた社中もあつたようである。

十月、十一月、十二月には終息の兆しが見られ、少しずつ平常に戻りつつあつた。

令和四年は千利休生誕五〇〇年を迎える。利休の生まれた町・堺では、生誕五〇〇年を記念して、「まち歩きイベント」を行うようである。

宮城県内の各流派でも、記念の行事等を持たれるのではないだろうか。

新型コロナウイルス感染症が一日も早く終息し、以前のようにお茶会等の行事が活発に開かれる事を、心より念ずるばかりである。

第二十五回社の都大茶会

宮城県芸術協会茶道部（加入十一流派）と河北新報社との共催の「社の都大茶会」は毎年五月に開催されていたが、今年も昨年同様、コロナ禍のため中止となった。

第五十八回宮城県芸術祭茶会

輪王寺に於て、毎年十月に開催されていた茶会が、コロナ禍のため、昨年同様中止となった。

「藩制期の茶の湯 紙芝居で」

山元町坂元地区にある町指定文化財の茶室の価値を発信する住民グループ「山元いっ茶組」が企画し紙芝居を作った。藩制時代の坂元城主大條家ゆかりの建築物（茶室）の概要や歴史、活用法等を、坂元地区に引越してきた親子が大條家の歴代当主や「茶室さん」から教えてもらうという内容。「代々大切にしてきた茶室。たくさんの人が集い、楽しんで欲しい」と結んでいる。

紙芝居はCDに収められ、町内の小中学校や幼稚園などに配られた。

「町の未来を担う子ども達に茶室の大切さを理解してほしい。手軽に学べるツールとして活用できる」と山元いっつ茶組の担当者は語っている。

大條家ゆかりの茶室

木造平屋の約四十五平方メートルの書院風の茶室。天保三年（一八三二）、大條家当主の道直が十二代仙台藩主伊達斉邦から賜り、仙台城から城下の大條家に移した。一九三二年に現在地へ移設。東日本大震災等で外壁や基礎が損壊した。町は修復し、二〇二四年度の一般公開を目指している。



(写真提供：河北新報社)



(写真提供：河北新報社)

「心の豊かさを味わう一服」

コロナ禍の中、令和三年三月茶室「面白庵」がオープンした。（青葉区錦町公園近くのビル）主宰は茶道教室を営む小谷一仁氏である。企画当時、新型コロナウイルス感染の禍中であり、以前のように人が集まらないのではと悩んだ。悩んだ末の答えは、資本主義の最前線に立つ証券マンとして感じ取った「時代の変わり目」だった。「お金と時間に追われ続ける社会で、さらにコロナ禍で気持がすさむ。心の豊かさに目を向ける時代に入ったのではないか」。約五十平方メートルの一室を改装し、八畳と二畳の茶室を設けた。

茶室「面白庵」の利用は若い世代に人気で、お点前を習得する本格的な稽古をはじめ、単発の体験やリモート、マントーマンなどのコースを設け、多様なニーズに応じる。

次世代型の多目的茶室と銘打ち、現代アートや書道の作品展、和菓子作りのワークショップにも活用する。



(写真提供：河北新報社)

「気軽に立ち寄れて、和の魅力や美しさを感じることができ空間にしたい。心の渇きをお茶で潤して欲しい」と小谷氏は語る。

茶の湯文化にふれる市民講座

千利休の孫 元伯宗且と三千家の成立

四月十七日(土)、仙台市福祉プラザふれあいホールにおいて、表千家同門会宮城支部主催により、原田茂弘先生(表千家不審菴文庫主席研究員)をお迎えして、標記の講演会が開催された。

今回は、本部からの指示のもと、コロナウイルス感染症対



茶の湯文化にふれる市民講座



新型コロナウイルス感染症対策による会場

策に万全を期しての開催だった。講演の内容は、元伯宗且が、主に江岑宗左にあてた手紙から、宗且の心中や子息への思い、表千家の基礎を築き、江岑を仕官させるため奔走したことなどを、大変分かりやすく解説された。盛況ながらも静粛な講演会であった。

二〇二二仙庵一般公開茶会

城下町せんだい日本伝統文化未来プロジェクト主催により、昨年同様、「茂ヶ崎庵」と「仙庵」を会場に茶会が開かれた。

五月・六月・七月・九月・十月・十一月・十二月と七回である。コロナ禍の中、亭主も客もマスクを付け、新型コロナ



仙庵八畳茶室



仙庵立礼席

ウイルス感染症対策に万全を期しての茶会である。自粛生活が続き、心の疲れている人々にとり、安らぎのひとつとなったことであろう。

表彰

令和三年度

宮城県芸術協会功績者表彰

唐澤宗淳・講江宗江（表千家）、篠原宗由（裏千家）、加藤清梢・佐藤和祥・関口静香・田中松賜・丹野茗彩（煎茶道三彩流）、高平宗悦（宗徧流）
心よりお祝い申し上げます。

謹弔

織田流煎茶道 鹿野南栄殿
煎茶道三彩流 星 清華殿

主な茶会と関連事項

一月 十日 遠州流茶道宗家点初ライブ動画配信、オンライン参加
織田流煎茶道明德会初煎会

二月 七日 玉川遠州流初釜総会（仙台市民会館）
初釜（鳥歌庵）

三月 十四日 玉川遠州流（渡邊晋祥社中）
裏千家宮城支部総会（書面）

四月 十七日 茶の湯文化にふれる市民講座
表千家同門会（仙台福祉プラザ）

五月 十八日 大日本茶道学会仙台支部総会（書面）
五月 三日 第十九回塩竈神社観桜茶会（中止）
仙庵一般公開茶会（城下町せんだい日本伝統文化未来プロジェクト）
五月 二十二日 渡邊晋祥（玉川遠州流）（八畳茶室・立礼席）
第二十四回杜の都大茶会（各流派）
二十九日 コロナ禍のため中止
三十日 コロナ禍のため中止（勾当台公園）

六月 五日 栄西忌（裏千家）
（瑞鳳寺）
（コロナ禍のため供養のみ）

十三日 遠州流茶道仙台支部研修会

(オンラインにより実施)

九月二十六日 玉川遠州流(佐藤晋路社中)

(オンラインにより実施)

二十日 玉川遠州流支部茶会

(茂ヶ崎庵)

中伝披露茶会

(養心庵)

二十七日

仙庵一般公開茶会(城下町せんだい日本伝)

二十六日

仙庵一般公開茶会(城下町せんだい日本伝)

統文化未来プロジェクト)

統文化未来プロジェクト)

畑山宗照(表千家)

(八畳茶室)

嵯峨宗有(裏千家)

(八畳茶室)

高橋宗昭(表千家)

(立礼席)

畠山宗照(表千家)

(立礼席)

七月

一日 玉川遠州流仙台支部①勉強会

(仙台市民会館)

十月

五日

鹽竈神社献茶式(裏千家)

(コロナ禍のため献茶式のみ)

十日 裏千家宮城支部第一回研究会

十一日 (Zoom 視聴・宮城支部道場参加)

十七日

玉川遠州流(渡邊晋祥社中)

中伝披露茶会

(鳥歌庵)

十一日 煎茶道三彩流売茶忌

(龍雲院)

二十四日

仙庵一般公開茶会(城下町せんだい日本伝)

二十五日

仙庵一般公開茶会(城下町せんだい日本伝)

統文化未来プロジェクト)

統文化未来プロジェクト)

(八畳茶室)

黒崎宗夏(表千家)

(八畳茶室)

二十四日

畠山宗照(表千家)

(立礼席)

小野宗智(裏千家)

(立礼席)

遠州流茶道全国大会大茶会参加

二十五日

裏千家宮城支部臨時総会(書面)

(岡山市岡山後楽園他)

八月

一日 玉川遠州流(渡邊晋祥社中)

(茂ヶ崎庵)

十一月

三日

表千家同門会宮城支部茶会

(輪王寺)

初伝披露茶会

(茂ヶ崎庵)

七日

玉川遠州流(松田晋好社中)

七日 仙台七夕茶会

(裏千家宮城支部)

第四十二回宮城支部文化協会茶会

八日 (コロナ禍のため中止)

(宮城センター)

二十九日

遠州流茶道仙台支部研修会

十三日 裏千家宮城支部第三回研究会

十四日 (Zoom) 視聴・宮城支部道場参加)

十四日 玉川遠州流仙台支部㊶勉強会

(仙台市民会館)

二十八日 遠州流茶道オンライン研修会

二十八日 仙庵一般公開茶会(城下町せんだい日本伝

統文化未来プロジェクト)

渡邊晋祥(玉川遠州流)

(八畳茶室・立礼席)

十一月 年納め茶会

渡邊晋祥(玉川遠州流)

十二日 遠州流茶道長寿祝茶会

十九日 宗旦忌・茶筥供養(裏千家)

(コロナ禍のため供養のみ)

十九日 仙庵一般公開茶会(城下町せんだい日本伝

統文化未来プロジェクト)

畠山宗照(表千家)

秋田宗優(裏千家)

(八畳茶室)

児

玉 宗 睦

(裏千家宮城支部参与)

華道

コロナ禍で華道の底力を知る

令和二年初頭に起こった新型コロナウイルスという感染症。
それによって世界はそれまでと違う世界に変わり果てた。

我々が生きる日本という国、そして芸術という世界も一時、すっかり変わってしまった。

新型コロナウイルスという未知の感染症に怯えてステイホームしながら思い思いの活動をし、作品を発表していた令和二年。そこから少しだけウイルスのことが解り（解った気になっているだけかも知れないが）、その中でいかに有観客で催しを開催するか、出来るかを模索した令和三年。

今年はオリンピック・パラリンピックも前年からの延期を経て、見事に開催された。

芸術の世界もそうで、観客数を制限しながら、ソーシャルディスタンスを取りながら、意識しながらの芸術・美術鑑賞が行われるようになった。もちろん変異株のデルタ株、オミクロン株という変異種が現れるごとに感染者数は増えたが、

我々はその都度模索しながらも対処し、現在芸術・美術をそ
れなりに楽しめる今日を迎えている。

宮城県の華道に目を向けると、筆者が常務理事を務めている一般社団法人宮城県華道連盟では、毎年開催している「春のいけばな展」を中止し、その代わりにの事業としてオンラインでも華道・いけばなを楽しめる「オンラインいけばな展」を制作しユーチューブ上で発表した。

これは公益財団法人仙台市市民文化事業団からの「多様なメディアを活用した文化芸術創造支援事業」という助成を受け、行った物で、平成三十年に開催した「創立八十周年記念春のいけばな展」宮城の華のおもてなし」から役員出品作、招待出品作、流派推薦作等を連盟としては初めて、オンライン形式のいけばな展へ転換した物となった。

また全部を五部制とし、第一部から第三部までは前述の創立記念華展作品をオンラインで発表とし、第四部は「花の力を信じて」と題し、コロナ禍にあっても花の力を信じ、その力を借りて生け続ける、華道連盟在籍流派を代表する華道家の作品と、その製作風景、そしてコロナ禍での活動や今後

の展望をインタビュー形式でお伝えする内容とした。

これまで余りクローズアップされることが少なかった生け手、つまり華道家がこの困難に際しどの様に活動したかを尋ねてみた。

やはり最初の頃、ステイホームが言われていた頃は各流派研究会等を休止し、家で花をせめてもの慰めに楽しんでいた方も多く、花に救われたとの声も聞かれた。そして段々とコロナが下火になるにつれて活動を再開し、仲間との旧交を温め、花を楽しみ、またコロナが盛んになると一時休止という様に、コロナとの付き合い方にも変化が見られるようになってきたこと。やはり相手の正体が分かってきたことは対処する上でも大きかったようだ。

また第五部では「心の復興と華道」と題した動画を発表した。

内容は東日本大震災から十年という年月が過ぎる中で、インフラの整備は着々と進む。だが、その一方で果たすべき「心の復興」は未だ道半ば…。

そしてその後も大規模な災害は毎年のように日本各地で続いている。

そこに華道・いけばなが果たせる役割はあるのか？あるならばそれは如何なる役割なのか？

真剣に考え、取り組み、その答えの一端に辿り着けたこの

日の活動。令和三年十二月一日、南三陸町さん商店街を舞台にしたワークショップ、震災語り部講話の模様と、連盟参加流派の震災への想いをインタビュー形式で伝える内容となった。

「心の復興」は非常に難しい。土を盛り、壁を作るのとは違い相手は人間。人それぞれ勘所も違えば、その日の気分でも違う。そんな中で「華道・いけばな」に出来ることは何か？と考えると風化させずに寄り添いながら一緒に生けること、そして褒め、少しだけアドバイスとして手直しを加えることである。この加減が難しいのだが、だいたいの方は喜んでくれる。

今回のワークショップ動画を撮影する際も、最初は緊張の面持ちで花を手にした参加者の皆さんが段々と笑顔になり、嬉しそうに花を生けているのが見られる。それは華道家としても大変嬉しい瞬間であった。

また同日には南三陸町さん商店街より語り部を迎え、震災当時の話も伺った。

我々自身も多かれ少なかれ被災した身であったが、この十年という月日の中で忘れていたこと、知らなかったことなどを当時の写真を交えて聞くことでまざまざと思い出すこともあった。

そして今現在の被災者に求められているものはやはり心の

復興である、というお話しは、我々の活動、しようとしているものが誤ってはいなかったと裏付けが取れ、背中を押してもらえたような気持ちにもなった。その中で行政としては手の届かない部分に華道・いけばなが加わることで目が届き、手厚くなるのでは？ということも解った。今後も宮城県華道連盟として「心の復興」に向けた取り組みを続けていきたいと常務理事という立場で考えている。

ここまでは宮城県の華道団体である宮城県華道連盟の活動について述べた。

ここからは県外在住（東京）の現代いけばな作家松田隆作氏が県内のミュージアムを会場に開催した個展「華思行II」をご紹介したい。

栗原市一迫にある「風の沢ミュージアム」を皆さんはご存じであろうか？恥ずかしながら私は今回の華展のご招待を受けるまで存じ上げなかつたのだが、仙台から車で約一時間半北へ走ると一迫の自然の中に佇む築二百年の古民家がある。そしてその一帯、裏山やその中に佇む御堂などもミュージアムのギャラリーとして利用できる超自然的ミュージアムになっている。

そのミュージアムで松田氏は震災の年に「華思行」を開催し、十年目の令和三年にもう一度個展を開催した。

節目の年ということもあろう。また松田氏の案内文にはこ

の様な言葉も載っていた。

「十年前、被災された方々が多勢おいでくださいました。その方々のお一人でもお会いできれば嬉しいと思っております。」

十年経ってまた帰ってきたよ、と。あなたたちのこと、東北のことを忘れていないよ、という松田氏の心の表れだろう。心の復興にもつながるこの企画に、感謝の心でいっぱいである。

筆者は個展がオープンしたての風さわやかな五月と本格的な暑さの中、自然の緑が一層濃くなった八月の二度ほど訪れた。

自然豊かな中で観る数々の作品からは深さ、濃さ、そして儂さといった沢山の感情と共に作者である松田氏の死生観といったモノが押し寄せてきた。

「十年の間に身体の衰えを無視し命を削るように植物と向かい合ってきました」

という松田氏の言葉には嘘偽りが無い。作品を見ればそれがわかる。彼自身の手による作品解説の中にもそれは綴られている。

母屋に生けられた、この十年間に亡くなられた方を思いながら孟宗竹を使い制作した「カタチ」を生けた「命のカタチ」。仏間に生けられた「Eros 生の本質」では山桜、桜染め

の絹布、桜のエキスを使用し「生の本質」を突き詰める。それは詰まるところ「人は必ず死ぬ。生の本質とは常にそこにある死を意識して自己の命を十全に生きる」（解説書より）事であると提示する。

更に直接的に死生観を表した作品が板倉に生けられた「T h a n a t o s 死の本質 桜から」と題された作品。T h a n a t o s (タナトス)とはギリシア神話に登場する死そのものを人格化した神。前述のエロスが生という本能であればタナトスは死という逃れられない運命。しかし松田氏はこの作品を解説する結びに「死は決して暗いだけのものではないと思います。E r o s の項に述べたのと逆で終わりは始まりと同義と思います。ということと死の本質とは決して恐れるべきだけのものではないと思います。」と少し軽妙なくらいの語り口で述べた。いけばな・生け花という植物の命を貫つて紡ぎ出す「美」に生きるいけばな作家らしい死生観でもあると感心してしまった。

余談だが夏に伺った際には、近くの伊豆沼で蓮の咲き誇る中を小舟で奔った後で拝見したので死生観、死ぬということには暗い、怖いことだけとは限らない、という松田氏の解説が一度目よりもストンと腑に落ちた様に感じた。

またその鋭い視線は現代の問題にも向けられる。御堂を舞台に生けられた「菓ごもりの果ては」は、コロナ禍のステイ

ホーム下にあつて、御堂の中に籠もる卵（竹を切ったときに落ちた粉を固めて作った物）を、御堂ごと守るかのごとく取り囲む小枝が繋がれ、不安な心を表現した作品であつた。

古民家そして野山を散策しながら拝見したこの個展はテーマとロケーションが相まって、とても素晴らしい展覧会であつた。

県内在住の各流派、支部による展覧会もご紹介しよう。九月十九日・二十日に成田山仙台分院を会場に開催されたのは「十周年く華への想い」と題した池坊仙台中央会グループ展。同じ池坊では十月二十九日から十一月三日まで秋保・里センターで開催された秋保の里池坊いけばな展もあつた。どちらも季節の花材が所狭しと生けられた素敵華展であつた。

本原遠州流が毎年秋に開催している本原遠州流いけばな展く秋・華・祭く二〇二一では例年のごとく古典花、現代花が織りませながら生けられ、会場のせんだいメディアアテークのモダンさとも合い、良い華展であつた。

十月二十九日・三十日に仙台キャピタルタワーの地下一階を会場に開催されのは「小原流みんなの花展「花の響き」P a r t 四く笑顔をここから」であつた。流派独特の瓶花・盛花からマイフレームという額縁風花器に生けられた作品が並び楽しさがあふれ、生け手も観客も皆笑顔になつてしまうよ

うな展覧会であった。

他にも私の把握しきれないところで様々な花・植物を活かした催しが開催されたと思う。コロナ禍にあっても花は変らず咲き、緑は濃くなり、また赤く染まって落葉するものも……。生きるとは、死ぬとはどういうことか、生けるとは、生け花とは何か。そこについてもまた一段と深く考察できた令和三年の宮城の華道界であった。

西^{にし}村^{むら}一^{いっ}観^{かん}

(一般社団法人宮城県華道連盟 常務理事)

一般社団法人宮城県華道連盟オンラインいけばな展
第四部 コロナ禍にあっても花の力を信じて： 収録作品

池坊



小原流









メディア芸術

新型コロナウイルスの感染拡大から二年あまりが経過しても、変異するウイルスへの対応に追われ終息の兆しは見えないままである。一時的に「ポストコロナ」というテーマが浮上したこともあったが、より巨大な第六波に押しやられてしまった。なおも活動が制限され続ける多くの表現者に向けて、国や地方公共団体では助成金による支援事業がおこなわれている。支援の個別内容についてここでは問題にしないが、個人事業主として活動する大半の表現者に向けた支援とは、どのようなかたちが適切なかをあらためて考えさせられる。独自におこなわれている個別の活動自体を別個に評価し査定することは難しいために、助成金の提供側は、某か実施しようとする助成事業の枠組のなかで優劣を付けることになる。そして申請者は結果的に提供側の要望を満たす構図に収まる。要するに活動に紐が付く訳である。コロナによる事態はそうしたことを問う余裕すらない切迫した状況であるため、資金的な支援を何もしないとなれば、それはそれで大問題である。しかし経済的な困難を理由に、個人単位の活動ですら、国や行政に紐付けられ、束ねられていくことへの批判

的視点を持ち得なければ、表現の自由な批評性や、個別の芸術の理念の探求は失われていくだろう。そしていま、もつとも懸念すべき標語はSDGsである。地球環境保全のための脱成長の概念は「持続可能な成長」へと転化している。結局、経済成長が目標化されているのである。こうした標語に紐付いた新自由主義的な政策に、コロナ禍を理由に、芸術表現が絡め取られつつある。

また、一連の助成に関わる情報のなかでは、助成対象者として、プロの芸術関係団体やプロのアーティストという言葉も頻繁に目にしてきた。プロという言葉が出てくるのは主に産業化されている音楽や舞台芸術を前提としているからなのだが、近年は、アート全般についてもより商業主義的に捉え、市場の評価を得た表現者をプロと捉える趣がある。しかし一般的な意味で近代以降の社会におけるアーティストの在り方を言うのであればアマチュアであるのが自然である。むしろ積極的にアマチュアであることで自由な表現が維持されるのである。こうした芸術表現やアーティストへの認識が、コロナ禍による活動の制限下で実体験を伴う事の無いまま、情報

の提供者すら気が付かない無自覚な情報操作や、意図しない刷り込みで、人びとの認識を変えてしまうことには十分な注意が必要だろう。

*

二〇二一年は東日本大震災から十年目である。言うまでも無く震災は、宮城県の芸術表現に大きな影響を及ぼしてきた。なかには活動を休止したり、場をたたむことを余儀なくされたケースもあるだろう。現在確認できる活動の背景にも、この十年間の幾多の困難があり、今日の活動の継続があることを覚えておきたい。

二月十日から七月十一日まで、せんだいメモリアル交流館で、「わたしは思い出す 十年間の子育てからさぐる震災のかたち」という展覧会がおこなわれた。これは、仙台在住の女性・かおりさん(仮名)の十年間の育児日記をとおして、彼女の思い出とともに、震災後の日々の想起を促すものである。企画者であるAHAI [Archive for Human Activities / 人類の営みのためのアーカイブ] (主宰・松本篤)は、これまでも全国各地で、市政のさまざまな生活記録を公共的な知財として捉えるための展示やワークショップを開催してきた。家族や地域を撮影した古い八ミリフィルムであったり、写真や手紙であったりと、扱うメディアは多岐にわたる。今回は、震災のあと十年間で書き溜められた育児日記を素材と

した。筆者自身が再読し、その語りを企画者が書き起こし、再編するかたちで、展示につなげている。会期中にもその作業は続けられ、テキストは徐々に増えていった。ただ、日記を再掲するのではなく、本人自身の過去の振り返りと、第三者による編集過程を加えることで、個人の記憶は再把握され、他者に開かれていく。こうしたアナムネーシスのプロセスを地に足の付いたかたちで実践した企画であった。

塩竈市の杉村惇美術館では、七月十七日から九月五日にかけて「若手アーティスト支援プログラム Voyage 大久保雅基・佐竹真紀子展 波紋のかなたに」が開催された。このシリーズは公募制で実施されており、毎回選ばれた作家二組によつて構成される展覧会である。七回目を数える今回は、作曲家・大久保雅基と美術作家・佐竹真紀子を選出された。大久保も佐竹も拙稿で以前に紹介している(平成三十年度・大久保、令和二年度・佐竹)。積層させた絵具を掘るといった竹の絵画表現は、本展において技術的な円熟をみせていた。震災の記憶を漂わせながら、港町や沿岸地域を描いた一連のシリーズは、彫刻刀の堀跡が日光や月光にきらめく波の表現としてますます精度と魅力を増している。佐竹の表現については前年度との重複ともなるため本稿では詳細を省く。さて、もう一名の作家である大久保雅基は、電子音楽を専門としておりコンピューター・プログラミングを用いて創作をおこな

う。平成三十年版ではカルテット編成による演奏会について紹介したが、今回はインスタレーションである。展示と演奏会ではずいぶんと思われるかもしれないが、情報の入力と出力をプログラムでリアルタイムに制御する作品において、システムを 작동する意味では展示も演奏会も大差は無い。制御システムの外部に、どのように作者のアイデアを反映した物語や状況を設定するかが、作品としての枠組を決めていく。今回、大久保は展示空間を神社にみたく、震災やウイルスのパンデミックをもたらす自然という制御不可能なシステムに敬意や畏怖を払いながらも、コンピューターシミュレーションという人為のシステムで防災・防疫に備えようとする仮想装置のような展示をした。サーキュレーター、風鈴、いくつかの液晶モニターに映し出された幾何学的なCG、これらの装置が神社の構造を模して配置されている。観客の存在を感じしつつ、各装置が互いの動作に影響を与え合うものである。装置は視覚的な動作を見せるだけでなく、楽器であり自動演奏者でもあって、空間内で連関する作動音は音楽とも呼べるものである。鑑賞者は、そうした一連の作動に、自分の存在がなんらか作用していることは気が付くが、その全てを把握することは難しい。このあたりは、コロナウイルスの流行に対する個人の振る舞いを暗示するようで興味深い。地震などの自然現象をコンピューターシミュレーションに置

き換えることは成されているが、大久保がおこなっているのはコンピューターシミュレーションのなかに自然現象のような状況をみせ、鑑賞者へ類似性や差異の覚知を促すことである。あるいは倒錯的ともいえるそうした人為性の肯定こそが大久保作品に独特のシニカルさをもたらしており、同時代的なメディア環境への批評にもなっている。

*

さて、今年「NFTアート」が話題に登った。NFT (Non-Fungible Token / 非代替性トークン) とは、ブロックチェーン上で扱われる暗号資産である。取引ごとに暗号化され履歴が保管されるブロックチェーンによって、データの固有性が証明されることで資産価値が生まれ、取引が可能になるものである。デジタルデータは、複製可能であることが特徴だが、それによって海賊版の流通や価格の低減などの問題が発生する。また現状は、データをコンテンツとして提供するプラットフォームに依存しており、そのプラットフォームがサービスを停止するとデータは無効化するという問題もあった。NFTによって、所有権を明確にすることで違法な複製を抑制し、プラットフォーム間を跨いでの利用が可能になれば、データの長期的な取引や、それに伴う製作者への金銭的なフィードバックなどについても解決する可能性がある。こうしたNFTの利点や特徴を示しやすいのが、唯一性

を持つ芸術作品である。NFTアートとは、こうしたNFT利用を前提として名付けられた取引対象の呼称である。フィジカルとデジタルが拮抗しつつある現在の世界で、NFTは画期的な仕組みであることは疑うべくもない。現状はフィジカルが優位にありデジタルはまだ実験的な位置づけだが、今はデジタルでの取引が先行し結果がフィジカルへ反映されるケースも出てくるだろう。NFTアートも今のところは、従来の芸術作品、モノノ物質としての唯一性の相対化を特徴とする程度であり、それ自体の表現がさほど新しいという訳ではないが、今後はNFTを前提とした独自の批評性を持ちうる表現が生まれてくるかもしれない。あくまでも取引の仕組みが先行している現在の状態でアート云々を考えるのではなく、そうしたときにこそNFTを基盤としたアートが確立されたのだと言えるだろう。

もう一つの話題は映画である。今年は、震災後の仙台になじみ深い、濱口竜介監督の2作品が公開された。『偶然と想像』と『ドライブ・マイカー』である。前者はオムニバス形式の物語であり、その三話目では、仙台駅のペDESTリアンデッキをはじめ市内のいくつかの場所が登場している。いずれも作品の内容について詳細は触れないが、受賞歴の多さがこれらの作品の高い評価を物語っているのだ、あえてそれだけを記しておく。『偶然と想像』は第七十一回ベルリン国際映画

祭で銀熊賞、シカゴ国際映画祭でシルバー・ヒューゴ賞を受賞するなど、五つの映画賞においてノミネートされ四つの賞を受賞している。『ドライブ・マイカー』は、二〇二一年内にも、カンヌ国際映画祭にて脚本賞、国際映画批評家連盟賞など三つの賞を受賞、アジア太平洋映画祭にて作品賞と脚本賞を受賞したほかにも、十二の映画賞にて十六の賞を受賞している（本作はこの後、二〇二二年にも更に多くの映画賞を受賞し、本稿執筆中の三月には、米国アカデミー賞の国際長編映画賞の受賞が発表されたのである）。国内の賞については、第四十五回日本アカデミー賞にて最優秀作品賞のほか八つの賞を受賞、ほかに第七十二回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。そのほかにも七つの映画賞にて十三の賞を受賞している。

*

県下では、三回目の開催となるReborn-Art Festival 2021-22が実施された。今回は会期が前期と後期に分かれている。前期が二〇二一年八月十一日から九月二十六日にかけて、石巻市街地、牡鹿半島（桃浦、荻浜、小積、鮎川）、女川駅周辺にておこなわれ、キュレーションは窪田研二が担った。後期は、二〇二二年の八月から開催される予定である。コロナウイルスが警戒されるなかでの滞在制作はさぞ困難を極めたのではないかと推察するが、継続的な開催ができたことは喜

ばしい。そのなかで、印象に残った作品は、岩根愛の作品《Coho Come Home》と、雨宮庸介の作品《石巻13分》だった。

旧茨浜小学校の放送室と視聴覚室を利用して展示した岩根作品は、女川とカリフォルニア北部の二箇所を舞台にした銀鮭（Coho）をめぐるドキュメンタリー映像である。岩根が高校時代を過ごしたカリフォルニア北部のマートル川流域では、河川の環境保全をおこなう住民たちと、開拓をすすめる牧場経営者たちとが一九七〇年代から対立してきたが、銀鮭の記憶を対話によって共有し、銀鮭が遡上するマートル川を地域の過去として物語化していった。こうした時間を経て再びマートル川には銀鮭が戻ってきたのである。放送室に展示されたのは、マートル川の銀鮭をめぐる物語を現地の人へのインタビューした映像である。片や太平洋を隔てた女川では銀鮭の養殖が盛んだが、これは一九七七年に株式会社マルキンの創業者の鈴木欣一郎氏によって始められたのが最初である。銀鮭養殖は、当初は漁業関係者からも批判されていたが、今は宮城県のある漁業において有数の産業である。先の震災によって女川の銀鮭養殖が危機的な痛手を受けたことは言うまでも無いが、そこから再び回復し、国内有数のブランドとして現在に至っている。岩根はこの銀鮭養殖に密着して映像化した。ドローンを駆使して生け簀を海上から撮影するなど、映像制作の技術や美しさも際立っている。この二つの地域の

銀鮭と人の物語は決して扱いやすい事象ではない。しかし岩根は、エスノグラフィを紡ぎ出すように丁寧な取材によって描きだしている。際だって見えてくるのは岩根の、他者を理解・信用しようとする姿勢とまなざしの温かさである。

日和山公園の元レストランを使った雨宮庸介の作品は、家具や日用品が無造作に置かれブラインドが下ろされた薄暗い倉庫のような空間のなか、私小説のような物語が、床に転がったモノやブラインドや柱に映しだされて展開していく上演型のインスタレーションである。十三分間の物語の最後にはブラインドが自動で巻き上げられ、眼前に石巻の現在の風景がパノラミックに広がりカタルシスをもたらす。震災から十年目の石巻との関わり方の困難、あるいはコロナウィルスのパデミックという状況下でアートフェスティバルへ参加することなど、さまざまな逡巡を抱えながら、それでもどうにか主題を内面化して制作を志向する苦悩や混乱を一人称で語っていく。緻密にタイミングをコントロールされた映像や音は観客をその真摯な語りに同調させ、終局に向かってそのテンポは加速していく。そして最後に、暗い状態から、明るさとともに現れる石巻の風景を見ると、観客は共時間性らしきものを意識する。眼前の風景は、展示会場に入るまに確かに公園から眺めていたものであるが、作品をとおして新たに出会い直すのである。

せんだいメディアアテークでは開館二十周年展として十一月三日から翌年一月九日にかけて「ナラティブの修復」が開催された。これは震災以降に仙台や宮城で活動してきた作家たちによる十のナラティブIIものがたりの術を展示したものである。参加作家は、阿部明子、磯崎未菜、菊池聡太郎、工藤夏海、小森はるか+瀬尾夏美、是恒さくら、佐々瞬、佐藤徳政、伊達伸明、ダダカン連（細谷修平、三上満良、関本欣哉、中西レモン）である。それぞれの表現は異なる主題であり、映像や絵画など、用いているメディアも異なるが、いずれも過去の語り継ぎや、他者との対話を試みたものであった。字数の都合もあり、十作品全てを紹介することは出来ないが、今日の地域性に言及した作品として、仙台市内の追廻地区の開発について触れた佐々瞬の《追廻住宅記録／最後の家（仮）》がある。行政との長い折衝の末に、ついに最後の一軒となった住宅について、家主との長年の交流を経て実現した作品である。家を模した構造物の外壁には、追廻の歴史年表や、かつての住民へのインタビュー映像、六百世帯が暮らしたかつての街並みの模型などが配置された。そして内部に映し出された映像は、家主のナレーションのもと、追廻の幽霊のような鎧武者や帝国軍人など複数の人物が、残された家のなかを一緒に片付けるといふものである。また、仙台在住であった日本現代美術史上の伝説的な前衛美術家・糸井貫二（ダダ

カン）の資料保存をおこなう有志グループ、ダダカン連（細谷修平、三上満良、関本欣哉、中西レモン）は、道路拡張で取り壊されようとしている糸井宅（通称・鬼放舎）に残された膨大な資料を預かり受けて整理し、鬼放舎の間取りを模した空間の中に展示した。彼らはダダカンを現代美術界のカリスマとして祭り上げるのではなく、多くの関係者のインタビュー映像とおして、地域に生きた美術家としてその姿を浮かび上がらせた。（惜しむべきことに糸井貫二さんは十二月にご逝去された。謹んでご冥福をお祈りします。）

*

Reborn-Art Festival が二〇一七年に始まって以降の石巻における展示や創作環境の動きも注目すべきものがある。市街地にいくつもアートのための場所が開かれ、大きな都市では難しい「界限」の形成に向かっていくようだ。Reborn-Art Festival をきっかけに石巻に移り住んだ美術家の有馬かおるやパルコ木下が、それぞれ独自に活動しながら、若い人たちを牽引している。さて、これらの場所を紹介していくが、まずは「キワマリ荘」である。キワマリ荘とは、有馬かおるによって開かれた民家を利用したギャラリーである。有馬は一九九六年に愛知県犬山市に、次いで二〇〇七年に茨城県水戸市にキワマリ荘を開いてきた。続く二〇一七年の石巻は三箇所目である。展示場所でありアートに関わる人の集う場所

でもあるキワマリ荘は、各地で芸術拠点としての重要な役割を担ってきた。石巻のキワマリ荘は現在、同地出身の映像作家、鹿野颯斗に運営が委ねられ、精力的に活動が続けられている。キワマリ荘に続き有馬は、「Art Drug Center」を開く。これは、もともと犬山のキワマリ荘のなかで実施していた貸し画廊の企画であったが、二〇一九年に石巻で再開させた。現在は、石巻出身の兄弟によるアートユニット守章（守雅章と守喜章）と有馬によって運営されている。また、有馬の薫陶を受けた画家の平野将麻は、二〇二一年五月にギャラリー「THE ROOMERS GARDEN」を開いた。ここは、まちづくりを進める団体「ISHINOMAKI2.0」が管理する「復興バー」が一階にある建物の三・四階を用いたものである。また、Reborn-Art Festivalの際には、総合案内所となる旧観慶丸商店も、さまざまな展示など多目的に使うことができる貸しスペースとして機能している。こうした展示場所にくわえ、クリエイティブ集団「巻組」によって開かれ、パルコ木下に命名されたシェアハウス「日和坂アート研究舎」などの宿泊環境もある。こうした環境のなかで、前述した石巻キワマリ荘代表の鹿野颯斗のキュレーションによる企画展「手つかずの庭」が、キワマリ荘「Art Drug Center」「THE ROOMERS GARDEN」の箇所へ二〇二二年八月十四日から九月二十六日にかけて開催された。さらに、Reborn-Art

Festival事務局に努める志村春海と、地元出身の美術家・ちばふみ枝、そして鹿野によって「石巻アートプロジェクト」も開始された。直裁な名称だが、彼らがアーティストを選定し招聘して制作や発表を長いスパンでおこなっていくようにするものである。このように石巻では、Reborn-Art Festivalだけに頼らず、より深みのある芸術文化の醸成がおこなわれている。それはこのコロナ禍にあっても熱量を維持したまま歩みをとめていない。

所はかわって遠刈田温泉には、アーティストが滞在し展示もできる場所、「遠刈田レジデンス マルヨシ」が二〇二一年二月二十八日にオープンした。「一般社団法人とおがったプロジェクト」が運営する。開かれて一年足らずではあるが、すでに多くの作家が利用し、展示発表がおこなわれているようだ。温泉地であることを活かした滞在制作の環境は興味深い。今後、遠刈田温泉や蔵王の歴史に触れるような壮大なプロジェクトも期待できるだろう。こちらも長く継続されていることを期待したい。

人の移動と交流を前提する今日のアートにとって、コロナウイルスは冷や水を浴びせかけた。ただ、それを従来からのステレオタイプなレジデンスプログラムや制作支援を見直す機会と捉えてもよいだろう。単年度で結果を求めるといった縛りをとき、より長期に、複数年にわたって滞在や制作を進め

ることの必要性があらためて確認できるはずだ。石巻のこの五、六年の様子をみればそれは明らかであろう。

清^{しみず} 水^{みづ} 建^{けん} 人^{ひと}
(せんだいメディアアテーク主任学芸員)



佐竹真紀子《花の相席》



「わたしは思い出す」 展示風景写真：佐々瞬



大久保雅基《あなたが来たときに私はここにいた》



岩根愛 《Coho Come Home》 ©Reborn-Art Festival 2021 (Photo by Taichi Saito)



雨宮庸介 《石巻 13分》 ©Reborn-Art Festival 2021 (Photo by Taichi Saito)



佐々瞬《追廻住宅記録／最後の家（仮）》写真：小岩勉



ダダカン連《絶対的自由と絶対的肯定の人・ダダカン 糸井貫二の日々～資料アーカイブ構築にむけて～》写真：小岩勉



キワマリ荘での「手つかずの庭」展示風景

(左：鹿野颯斗《解かれる水平線》右：ちばふみ枝《untitled (三角形と揺れる影)》)

写真：鹿野颯斗



ART DRUG CENTER の展示風景

「守章 展 ビデオ・スクリーニング・プラス 東京—北九州の往復書簡より」

広域文化団体の 文化活動記録

(公社) 宮城県芸術協会
宮城県文化協会連絡協議会
(公社) 日本舞踊協会宮城県支部
宮城県吹奏楽連盟
宮城県合唱連盟
宮城県おかあさん合唱連盟
仙台三曲協会
宮城県能楽振興協会
宮城県洋舞団体連合会
宮城県歌人協会
宮城県俳句協会
宮城県川柳連盟
宮城県詩人会
(一社) 宮城県華道連盟
宮城県民芸協会
(公財) 日本民謡協会宮城県連合会
全国民謡連盟宮城県連合会
宮城県民謡道連合会
宮城県写真連盟
宮城県文化財友の会

■凡 例

- ㊦……………所在地
㊧……………電話番号
㊨……………代表者
㊩……………構成員数
㊪……………所属流派
㊫……………構成員の資格
㊬……………創立年月
㊭……………定期刊行物

県内の文化団体のうち二十団体を掲載。
(令和三年十二月三十一日現在)

公益社団法人 宮城県芸術協会

⑧ 千九八〇―〇八〇二 仙台市青葉区二日町十六―一

二日町東急ビル五―B

⑨ 〇二二―二六一―七〇五五

⑩ 理事長 雫石 隆子

⑪ 二千二十二名

⑫ 正会員になるためには会員二名以上の推薦を受け、理事

会の承認を得なければならない

⑬ 昭和三十九年五月

⑭ 機関誌「はなやま」(年四回発行)

「宮城県文芸年鑑」(年一回発行)

開催月日 催事名

場 所

3 / 27 みやぎミュージックフェスタ 白石市文化体育活動セン

inしろういし ター ホワイトキニユーブ

6 / 27 第一回宮城県各流子ども 戦災復興記念館

舞踊発表会

10 / 28 ~ 11 / 1 第二回杜のみやこ工芸展 T F U ギャラリーミニモリ

12 / 6 ~ 12 第八回定禅寺フォトコンテスト展 東京エレクトロンホール宮城

12 / 14 ~ 20 第五十八回宮城県芸術祭 東京エレクトロンホール宮城

絵画展受賞者作品展

〈第五十七回宮城県芸術祭〉

2 / 14 第四十一回音楽コンクール予選 仙台銀行ホールイズミティ21

(第四回ヴァイオリン部門)

2 / 21 第四十一回音楽コンクール予選 仙台銀行ホールイズミティ21

(ピアノ部門)

3 / 14 第四十一回音楽コンクール本選 仙台銀行ホールイズミティ21

(第四回ヴァイオリン部門)

3 / 21 第四十一回音楽コンクール本選 仙台銀行ホールイズミティ21

(ピアノ部門)

〈第五十八回宮城県芸術祭〉

9 / 25 ~ 28 華道展 せんだいメディアアテーク

9 / 25 ~ 28 書道展 せんだいメディアアテーク

10 / 2 ~ 5 写真展 せんだいメディアアテーク

10 / 2 ~ 5 フォトサミット in Sendai 2022 せんだいメディアアテーク

10 / 2 ~ 5 絵画展(公募の部) せんだいメディアアテーク

10 / 2 ~ 5 彫刻展・彫刻公募展 せんだいメディアアテーク

10 / 9 ~ 12 絵画展 せんだいメディアアテーク

10 / 7 第四十一回音楽コンクール 仙台銀行ホールイズミティ21

ガラコンサート

10 / 7 文学散歩 石巻・東松島方面

10/15 「宮城県文芸年鑑」発行

10/23 文芸祭

東京エレクトロンホール宮城

10/28、11/1

工芸展

T F U ギャラリーミニモリ

11/12 音楽会

日立システムズホール仙台

11/25 表彰式

ホテルメトロポリタン仙台

宮城県文化協会連絡協議会

⑨ 千九八七〇五一― 登米市迫町佐沼中江二丁目六一―

登米市まちづくり推進部市民協働課内

⑩ ○二二〇―二二―二一七三

⑪ 会長 鈴木 敬一

⑫ 六十二文化協会（約三万五千名）

⑬ 市町村（合併前）を単位とした文化・芸術協会

⑭ 昭和五十三年六月

⑮ 会報「くぐなり」（年一回発行）

宮城県文化協会運営状況「心の華」（隔年発行）

開催月日 催事名

場所

11/3・4 第二十四回みやぎ県民文化祭 マルホンまきあーとテラス

12月上旬 第四十一回宮城県文化協

会運営研修会（中止）

本会は、宮城県内の文化（芸術）協会相互の連絡調整を図

り、その発展を助長するとともに、文化芸術活動を通じて県

民文化の振興と向上に寄与することを目的としており、加盟

団体は六十二を数えます。

本会は二つの大きな事業を行っております。一つは、加盟団

体が一堂に会して作品や演目を発表する「みやぎ県民文化祭」

をブロック毎の持ち回りで開催しています。

もう一つは、「文化協会運営研修会」で、各協会の事例報

告や意見交換のほか、協会が抱える課題や目標などを話し合

い、交流を図っています。

令和三年度については、新型コロナウイルス感染症の影響

により運営研修会を中止としましたが、文化の灯を消さぬよ

う、国・県の動向等を踏まえた活動方法を模索しています。

公益社団法人日本舞踊協会宮城県支部

① 千九八一―〇一一二 宮城郡利府町利府字八幡崎一〇八

（水木歌泰方）

② ○二二―三五六―二三三九（水木歌泰方）

③ 支部長 水木 歌泰

④ 百九十八名

㊦ 公益社団法人日本舞踊協会会員であるとともに宮城県支部会員（扇の会会員含む）、師範名取・普通名取であること

㊧ 昭和三十五年十一月

㊨ 公益社団法人日本舞踊協会宮城県支部六十年史（令和三年四月二十九日 発行）

開催月日 催 事 名 場 所

6 / 27 第一回宮城県各流子ども 戦災復興記念館 記

舞踊発表会 念ホール

12 / 5 （公社）日本舞踊協会宮城県支部 電力ホール

歳末たすけ合い

第五十八回各流舞踊大会

宮城県支部に加盟している各流派は、コロナウイルス感染症の対策を万全にしそれぞれ活動をした。

現在、子ども舞踊が衰退している状況。次世代に継承出来るよう令和三年六月二十七日「第一回宮城県各流子ども舞踊発表会」開催。

令和四年七月二十四日「第二回宮城県各流子ども舞踊大会」開催予定。

令和四年十二月四日「歳末たすけ合い第五十九回各流舞踊

大会」開催予定。

隔年に行われる「各流舞踊公演」三年ぶりに令和四年六月五日開催。

その他（公社）日本舞踊協会本部の指示による事業への協力並びに県下、関連団体との連絡提携及び地域交流の親睦を深めることに努めている。

（庶務 吉村 花照）

宮城県吹奏楽連盟

㊰ 〒九八一—〇九〇四 仙台市青葉区旭ヶ丘三—三四—

一〇キャピタル旭ヶ丘三〇二

㊱ 〇二—二七五—六七六一

㊲ 会長 三塚 尚可

㊳ 数 九千四百九十七名（三百四十二団体）

㊴ 宮城県内の小学校、中学校、高等学校、大学、職場、一般の吹奏楽団体

㊵ 昭和三十三年

㊶ すいそうがく（全日本吹奏楽連盟発行）（年四回発行）

HP 「宮城県吹奏楽連盟」 www.ajba.or.jp/miyagi/
Facebook 「楽器BANK 宮城県吹奏楽連盟」

開催月日 催 事 名 場 所

1/9・10	全日本アンサンブルコンテスト 予選第五十四回宮城県大会	仙台銀行ホール イズミティ21
3/13	第十回六十二万石吹奏楽祭 (中止)	
5/22・23	第三十六回宮城県管打楽器 ソロコンテスト予選	仙台市立上杉山通小学校
6/6	第三十六回宮城県管打楽器 ソロコンテスト	中新田バツハホール
8/5〜8	第六十四回宮城県吹奏楽 コンクール	仙台銀行ホール イズミティ21
8/28・29	第六十四回東北吹奏楽コ ンクール	東京エレクトロンホール宮城
9/18	第四十回全日本小学生バンド フェスティバル宮城県大会	カメイアリーナ仙台
12/26	第三十四回全日本マーチング コンテスト宮城県大会 第四十三回東北吹奏楽の日 演奏会(中止)	カメイアリーナ仙台

令和三年は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大する中、

感染対策が十分に担保できない一部の事業を除き、ほとんどの事業を様々な感染対策を講じて開催することができた。

また、平成二十七年九月から継続して行ってきた「二千席規模の音楽ホールを！市民会議」の活動が実を結び、音楽ホールの建設地が「せんだい青葉山交流広場」になる見通しが発表された。今後は早期建設を後押しするような活動ができるよう努めていきたい。

令和四年も新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策を万全にし、加盟団体や各関係機関と協力して全ての事業を開催できるようにしていきたい。

今後の事業については「宮城県吹奏楽連盟ホームページ」と「Facebook 宮城県吹奏楽連盟」などインターネット等でも確認していただきたい。

(事務局長 菊地 憲昭)

宮城県合唱連盟

- ⑧ 〒九八〇—〇〇〇—1 仙台市青葉区中江二—二四—五
(事務局 八巻輝子方)
- ⑨ 〇九〇—二九五七—二九五五
- ⑩ 理事長 水口 裕子
- ⑪ 千八百名

㊦ 宮城県内の小学校・中学校・高等学校・大学・職場・一般の合唱団

㊧ 昭和二十四年五月

㊨ ハーモニー（全日本合唱連盟発行）（年四回発行）

開催月日 催事名 場所

1/11 第二十二回男の合唱まつり

inみやぎ（中止）

8/6、8 宮城県合唱講習会（中止）

講師：清水雅彦

8/9 第七十三回宮城県合唱祭 太白区文化センター

（職場・一般部門） 楽楽ホール

講師：吉川和夫、佐藤寿一、三野宮まさみ

8/28・29 第七十三回宮城県合唱祭（小学 名取市文化会館

生・中学生・高校生・大学部門）

講師：浅井道子、伊東恵司、堀俊輔

※第七十三回全日本合唱コンクール宮城県大会の

日程の中で合唱祭部門として開催

第七十三回全日本合唱コンクール宮城県大会

名取市文化会館

審査員：浅井道子、伊東恵司、堀俊輔

12/18・19 第三十三回宮城県合唱ア 日立システムズホール仙台

ンサンプルコンテスト

審査員：吉川和夫、木村政巳、原田博之

例年開催される全日本おかあさんコーラス東北支部大会は各行事中止となった。

開催にあたっては、「合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン第三版（全日本合唱連盟／二〇二一年六月七日策定）に基づき運営し、歌唱にあたってはマスクの着用を義務付けています。

（事務局長 八巻 輝子）

宮城県おかあさん合唱連盟

㊦ 〒九八一―八〇〇三 仙台市泉区南光台二―二―二七

（事務局 塩川裕子方）

㊧ ○二―二七―〇九五六（塩川裕子方）

㊨ 副理事長 平川 敬子

㊩ 五百七十二名

㊪ 宮城県内の当連盟に加入する女声合唱団

㊫ 昭和四十八年十月

㊬ 機関紙「うたごころ」（年一回発行）

開催月日 催事名

場所

2/25 定例理事会(年七回開催) 仙台市戦災復興記念館

第一会議室

令和三年度総会

書面開催

「うたごころ」第九十号

発行

7/8 臨時副理事長会

仙台市民サポートセンター

11/9 第四十九回宮城県おかあ

日立システムズホール仙台

さん合唱祭

コンサートホール

令和三年度は新型コロナウイルス感染予防のため総会・幹事会は開催せず書面総会で始まった。六月に予定していた合唱祭も二回延期の末やっと十一月に約半分の団が参加して開催にこぎつけた。その直後副理事長今井邦男が逝去。合唱講習会も出来ず困難の連続だったが、元副理事長の方々の力も借りて副理事長中心に理事が一丸となって運営した一年だった。

(事務局 塩川 裕子)

仙台三曲協会

⑧ 千九八二—〇〇二 仙台市太白区長町南三一—八一—

⑨ 〇二二—二四七—八五二八

⑩ 会長 渡辺 悦子

⑪ 五百八十名

⑫ 協会所属の各流派会員で教授資格の有する者並びに音楽を愛好する者

⑬ 昭和三十年十月

⑭ 仙台三曲協会三十年史(昭和六十二年九月発刊)

⑮ 仙台三曲協会年史・続編一(平成三年十一月発行)

⑯ 仙台三曲協会年史・続編二(平成八年十一月発行)

⑰ 仙台三曲協会年史・続編三(平成十三年十一月発行)

⑱ 創立五十周年記念仙台三曲協会年史

(平成十八年十一月発行)

⑲ 仙台三曲協会年史・続編五(平成二十四年十一月発行)

開催月日 催事名

場所

1/26 三曲鑑賞業 仙台市立西中田小学校

7/1 三曲鑑賞・体験授業 仙台市立館小学校

9/16 三曲鑑賞・体験授業 仙台市立荒町小学校

(仙台三曲協合理事 宮澤 寒山)

宮城県能楽振興協会

⑧ 千九八一一八〇〇二 仙台市泉区南光台南三丁目二一―一九

(鈴木敏彦方)

⑨ 〇二二―二五二―一四七〇 (鈴木敏彦方)

⑩ 会長 鈴木 敏彦

⑪ 九百七十名

⑫ 謡曲・仕舞・囃子・狂言の指導者及びその指導者に師事している者

⑬ 昭和四十九年六月

開催月日 催事名 場 所

11/14 囃子と仕舞の会 能―BOX

○仙台市

一 令和三年の活動予定の事業は、新型コロナウイルス感染防

止のため、「囃子と仕舞の会」のみとなっていた。

二

(一) 「能―BOXゼミナール」能―BOX

仙台市能楽振興協会は、能―BOX開館十周年の年に当たり、(公財)仙台市市民文化事業団が主催する「能―BOX

ゼミナール」に協力の立場で企画段階から参画し、記念事業

の盛り上げを図っていた。このゼミナールは、東北と日本の

伝統文化にまつわるさまざまな題材を集めて講義/演説/放

談/討論の場を設け、学び考えるシリーズ企画となっていた。

開催初年度となる令和三年度は、「能を知られば日本の文化が見えてくる」をテーマとして、五回にわたりさまざまな切り

口から能と日本文化を考えるものであった。

(二) 「古の文化に触れる夏休み」仙台国際センター

文化庁の「子供たちのための伝統文化の体験機会回復事業」

として、古の文化に触れる夏休み実行委員会が主催した事業

「古の文化に触れる夏休み」が、八月八日と九日の二日間仙

台市能楽振興協会の共催、仙台市・仙台市教育委員会の後援、

(株)寛松能および(公財)仙台市市民文化事業団の協力に

より開催されていた。これは、小・中・高校生を対象に能の

謡と仕舞・茶道・華道の三つの伝統文化を体験してみようと

するものであった。参加人数は四十九名であった。

○白石市

一

活動予定の「碧水園能」及び「碧水園観世流能」は、新型

コロナウイルス感染防止のため中止となっていた。

二

文化庁の伝統文化親子教室事業を活用し、「こどもの能楽教室」を実施していた。十二回の教室で、延人数は七十四名であった。

○登米市

一

例年実施している「登米狂言」及び「登米秋祭り薪能」は新型コロナウイルス感染防止のため中止となっていた。

二

登米謡協会の活動として、

・六月二十五日 登米中学校能体験

謡体験、能装束の着付け

森舞台

・六月三十日 登米高校文化講演会

登米能の歴史と祝言小謡・仕舞

登米高等学校

・十月二十九日 登米高校創立百周年記念事業参加

祝言小謡三番と仕舞一番

登米高等学校

・十一月七日 登米伝統芸能伝承体験会

森舞台

などが開催されていた。

(会長 鈴木 敏彦)

宮城県洋舞団体連合会

⑧ 千九八九―六一二七 大崎市古川旭二丁目一三―一〇

(佐東悦子方)

⑨ 〇二二九―二二―八四八八(佐東悦子方)

⑩ 会長 佐東 悦子

⑪ 七団体

⑫ 宮城県内に在住し、洋舞活動をしている団体の主宰者及び指導者

⑬ 昭和四十五年十一月

⑭ 洋舞公演十年の歩み(昭和五十五年四月発行)

洋舞公演二十年の歩み(平成三年三月発行)

洋舞公演三十年の歩み(平成十二年十月発行)

洋舞公演四十五年の歩み(平成二十八年三月発行)

開催月日 催事名

場所

2/13 第十六回ダンスコンペティション 多賀城市文化センター

in 仙台(モダンダンス部門)

市民会館大ホール

2/14 第十六回ダンスコンペティション

in 仙台(クラシック部門)(中止)

コンペティションの二日目は、地震の影響で中止になりま

した。十一月に予定していた、芸術祭参加洋舞公演も新型コロナウイルスのため、中止することになりました。来年を目指し、頑張ることにいたします。

(副会長 千尋 洋子)

宮城県歌人協会

⑧ 千九八一—〇九二三 仙台市青葉区東勝山三丁目一五—二九

(岡本勝方)

⑨ 〇二二—三九三—六一八七 (岡本勝方)

⑩ 会長 岡本 勝

⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

個人会員 二十二名

⑬ 宮城県内の短歌結社等の団体に所属する者、又は宮城県

内に在住し若しくは活動する歌人

⑭ 昭和二十四年四月

⑮ 宮城県歌人協会年報(年一回発行)

創立七十周年記念合同歌集『あをばの杜』

(令和三年三月刊)

第三十二回宮城県短歌賞作品集二〇二二(年一回発行)

開催月日 催事名 場所

6 / 18 第六十八回(再)宮城県 仙台文学館

短歌大会

11 / 28 第三十二回宮城県短歌賞 東京エレクトロンホール

授賞式・歌人の集い

宮城 (会長 岡本 勝)

宮城県俳句協会

⑧ 千九八五—〇〇七二 塩竈市小松崎一—一九

(渡辺誠一郎方)

⑨ 〇二二—三六七—一二六三(渡辺誠一郎方)

⑩ 会長 高野 ムツオ

⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

⑬ 宮城県在住者及び出身者で、本会の目的に賛同する者

⑭ 昭和二十九年六月

⑮ 宮城県俳句協会会報(年三回発行)

開催月日 催事名 場所

1 / 11 新春賀詞交歓会(中止)

2／23 定時総会（令和三年度）

（中止）

4／29 第五十一回宮城県俳句大会

応募句のみの選考実施

11／14 第六十七回松島芭蕉祭・瑞巖寺・松島町文化

全国大会 交流会館

第四十五回宮城県俳句賞は、丸山みづほさん、準賞に坂下遊馬さん、鈴木幸子さんが受賞。

（幹事長 渡辺 誠一郎）

宮城県川柳連盟

⑨ 千九八〇―〇〇二一 仙台市青葉区上杉二丁目四―八

朝日プラザ上杉六〇七（川柳宮城野社内）

⑧ 〇二二―二二七―〇五七五

⑦ 理事長 雫石 隆子

⑥ 理事十八名・評議員二十二名

⑤ 加盟川柳吟社・句会（計二十三）の代表など

④ 昭和四十八年九月

③ 連盟会報（年一回発行）

② 連盟川柳大会報（年一回発行）

開催月日 催 事 名 場 所

4／18 第四十八回宮城県川柳大会 誌上開催

（事務局長 堀之内 稔夫）

宮城県詩人会

⑨ 千九八〇―〇八〇五 仙台市青葉区大手町二―二五―

五〇三 汐海治美方

⑧ 〇二二―七二一―三一五八

⑦ 会長 佐々木 洋一

⑥ 四十一名

⑤ 宮城県在住または出身者及びそれに準ずる者で、詩作品

の実作者及び研究者

④ 平成十七年三月

③ 宮城県詩人会会報（年一回発行）

② アンソロジー『宮城の現代詩』（年一回発行）

団体紹介文

宮城県詩人会は平成十七年に発足して以来、詩に関係する者の交流・切磋琢磨する場となってきました。コロナで二年間、カフェや詩祭など交流行事は中止となり、今年も会報と

アンソロジーの発行だけになりましたが、コロナ後を見据え、活動の質を上げるべく会員はそれぞれ原点に立ち返っているところですよ。

(理事長 汐海 治美)

一般社団法人宮城県華道連盟

⑨ 千九八〇—〇〇二四 仙台市青葉区本町一丁目四—四十五
西村方

⑩ 〇二二—二二—〇八六〇 西村一観方

⑪ 理事長 朴澤 一堂

⑫ 二百三十八名

⑬ 池坊、小原流、古流松藤会、清泉古流、仙昇池坊、道風流、本原遠州流、龍生派

全八流派

⑭ 華道教授者(諸流師範)の資格を有し、門下を育成する者

⑮ 昭和十二年三月

⑯ 会報 「はないづみ」 年一回発行

開催月日 催事名 場所

講演会(中止)

12/23

福祉厚生

施設訪問 宮城県啓佑学園

新型コロナウィルス感染拡大に伴い事務局長のみ訪問

〈加盟流派いけばな展〉

9/19・20 「十周年〜花への想い」池坊 成田山仙台分院

仙台中央グループ いけばな池坊展

9/25〜28 公益財団法人宮城県芸術協会 せんだいメディアアテーク

宮城県芸術祭 華道展

芸術協会所属十二流派が参加(うち連盟所属八流派)

10/23〜25 本原遠州流いけばな展 せんだいメディアアテーク

〜秋・華・彩〜二〇二二

10/29・30 小原流みんなの花展「花の響 仙台キャピタルタワー

き」part4〜笑顔をここから〜 (地下一階)

10/29〜11/3 秋保の里「池坊いけばな展」 秋保・里センター

1月から 宮城県庁 挿花 宮城県庁ロビー 他

12月 連盟所属の八流派が毎月 交代で担当

(事務局長 西村 一観)

宮城県民芸協会

⑰ 千九八〇—〇八一— 仙台市青葉区一番町二丁目四—一〇

(光原社内)

電 〇二二―二二三―六六七四（光原社方）

代 会長 濱田 淑子

数 五十一名

創 昭和四十三年一月

刊 「民芸みやぎ」（年一回発行）

（事務局長 及川 陽一郎）

公益財団法人日本民謡協会宮城県連合会

所 千九八二―一〇二 仙台市太白区袋原六丁目七―二七

電 〇二二―二四一―八一七六

代 宮城県連合委員長 阿部 勝造

数 五百五十名

格 公益財団法人日本民謡協会に入会していること

創 昭和二十五年六月二十四日

刊 公益財団法人日本民謡協会の会報（年六回発行）

（参与 小野 春城）

全国民謡連盟宮城県連合会

所 千九八九―六一二二 大崎市古川桑針字谷地中一四

（及川政芳方）

電 〇二二九―二三―一〇九〇（及川政芳方）

代 会長 及川 政芳（桃城）

数 二百五十名

格 民謡の好きな方

創 昭和五十三年十月

刊 会報本部作成（年一回発行）

（本部連合会常務取締役 及川 政芳（桃城））

宮城県民謡道連合会

所 千九八〇―〇〇〇二 仙台市青葉区福沢町一―四三

電 〇二二―二三―四四一（事務局）

代 会長 衣川 喜仁

数 二十五名

格 民謡指導者・プロ伴奏者・プロ歌手・各会の会主

創 昭和五十五年七月

開催月日 催事名 場 所

3 / 9 令和二年度定期総会 仙台市福沢市民センター

8 / 20 第三十七回さんさ時雨全国大会

実行委員会（第三十七回さんさ

時雨全国大会開催について）

R3・1 第三十七回さんき時雨全国大会

(中止)

(事務局長 二代目 藤本 和夫)

宮城県写真連盟

⑨ 千九八三―〇八五二 仙台市宮城野区榴岡四丁目一―八

パルシティ一階(カラーデューブ内)

⑩ ○二二―二五六―二一四一

⑪ 会長 永井 優

⑫ 百七十一名

⑬ 県写真展に参加し、会費を納入した方

⑭ 昭和五十四年四月

⑮ 会報 (年一回)

開催月日 催事名

場所

5/12 宮城県写真連盟総会

まるまつ成田店

6/15 役員会

まるまつ成田店

7/20 役員会

まるまつ成田店

10/17 令和三年度宮城県写真展

南光台コミュニティセンター

審査

10/30 令和三年度宮城県写真展 事務局

の中止決定

11/30 各応募者に中止の通知 事務局

(事務局長 高橋 潤一)

宮城県文化財友の会

⑨ 千九八四―〇〇四二 仙台市若林区大和町一丁目二六―二三

(遠藤方)

⑩ ○二二―二三九―一三二四(遠藤方)

⑪ 会長 遠藤 哲雄

⑫ 六十三名

⑬ 文化財保護に関心を持ち、文化財に関する認識を深めよ

うとする者

⑭ 昭和四十九年八月

⑮ 宮城県文化財友の会だより(年四回発行)

開催月日 催事名

場所

9/26 仙台市若林区連坊方面の

歴史散歩(中止)

10/17 松島方面の歴史散歩(瑞

巖寺く雄島)(中止)

11
/
14

文化財研修会「新寺・連
坊界限の歴史・文学散歩」

JR仙台駅東口～藤村

広場、宮城野通り、林

香院、大林寺、松音寺、

瑞雲寺

(会長 遠藤 哲雄)

宮城県における 文化行政の概要

消費生活・文化課、長寿社会政策課、障害福祉課、生涯学習課、文化財課、宮城県図書館、宮城県美術館、東北歴史博物館、(公財)宮城県文化振興財団、(公財)慶長遣欧使節船協会における令和三年度の概要を掲載。(一月から三月までに実施したものは令和四年に行われた。)

一 知事部局関連

(一) 消費生活・文化課

1 表彰

令和三年文化の日（教育文化功労）表彰受賞者

○宮澤 利彰（宮澤 寒山） 〓尺八演奏家

○今野 桂子（花柳 登代尋） 〓日本舞踊家

○竹内 英典 〓詩人

○浅野 治志 〓陶芸家

○高野 静枝（高野 芳月） 〓篆刻・書家

2 文化行政の基礎づくり

県民ロビーコンサートの開催

県庁舎を県民により開かれたものとし、文化の香り高い交流の場にするため、各月の第四水曜日に県民ロビーにおいてコンサートを開催した。

開催日	出演者
四月二十八日	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止
五月二十六日	宮城県仙台台三桜高等学校音楽部 (女声合唱)

開催日	出演者
六月二十三日	snow do. (アルパ(ラテンハープ)による演奏)
七月二十八日	七ヶ浜町立七ヶ浜中学校吹奏楽部 (アンサンブル)
八月 四日	南部流角力節語り部協会 (相撲甚句)
八月二十五日	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止
九月二十二日	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止
十月二十七日	TAKE TO (尺八とエレクトーンによるアンサンブル)
十一月 五日	仙台フィルハーモニー管弦楽団 (オーケストラによるクラシック演奏)
十一月二十四日	古川マンドリンクラブ (マンドリン楽器によるクラシック演奏)
十二月二十二日	聖和学園短期大学ハンドベルクワイア (ハンドベル演奏)
一月二十六日	宮城県涌谷高等学校吹奏楽部 (吹奏楽の演奏)
二月二十四日	栗原市立高清水小学校金管バンド (金管合奏(ブラスバンド))

開催日	出演者
三月二十三日	熊谷 駿、齋藤 めぐむ (サクセスとピアノによるジャズ演奏)

3 文化創造の風土づくり

トモシビ・プロジェクト

新型コロナウイルス感染症の影響により活動の自粛を余儀なくされた文化芸術活動の再開・継続を支援するとともに、県民が在宅で文化芸術に触れることができる機会を提供するため、Web上での動画配信事業を実施した。

募集期間 七月一日～七月三十一日

応募件数 百二十九件(四百四十八人)

採択件数 六十一件(二百六十六人)

みやぎ県民文化創造の祭典二〇二一

みやぎらしい創造的な文化芸術圏の創出を目的として、平成九年度から開催。九月から十一月までを重点期間として、主催事業(十事業)、共催事業(十二事業)及び協賛事業(十六事業)を県内各地で開催した。

〈主催事業〉

①舞台ワークショップ

普段は演劇やダンスなどの舞台芸術に触れる機会の少ない方々に、体で表現する楽しみやコミュニケーションの大切さを実感していただきながら、舞台芸術に親しんでいたため、県内の劇団で活躍するアーティストなどを講師とした少人数・体験型のワークショップを開催した。

○名取市教育委員会

・ダンスミュージカル講座(那智が丘)

講師 朝日陽子

期間 九月十三日～十二月二十日

会場 名取市文化会館(名取市)

・ダンスミュージカル講座(名取が丘)

講師 朝日雅宏

期間 九月十六日～十二月二十日

会場 名取市文化会館(名取市)

○えぞこ芸術のまち創造実行委員会

・楠原竜也とダンスであそぼ!

講師 楠原竜也 ISOPP

期間 九月一日、二日、令和四年二月一日

会場 村田小学校(村田町)、大河原小学校(大河原町)、

川崎小学校(川崎町)

・スズキ拓朗と色んな動きで表現してみよう！

講師 スズキ拓朗

期間 十一月二十五日～二十七日

会場 横倉小学校（角田市）、角田小学校（角田市）、

桜保育所（大河原町）

○多賀城市立図書館

・多賀城ウサギニゲン劇場

音と映像がおりなすスペシャルステージ

講師 usaginigen

期間 九月十七日

会場 多賀城駅北ビルA棟（多賀城市）

○角田市教育委員会

・かくだ田園ホール寄席

講師 六華亭遊花

期間 十月十五日

会場 かくだ田園ホール（角田市）

○多賀城市文化センター

・WAKU☆WAKU☆舞台スタッフ体験2021

講師 渡辺祥子、松崎太郎、梅内久仁生、藤野準

期間 十一月二十三日～令和四年一月三十日

会場 多賀城市民会館（多賀城市）

○公益財団法人仙台市市民文化事業団

・舞台スタッフ・ラボ2021

講師 石井忍 ほか

期間 令和四年二月五日～二十日

会場 仙台市宮城野区文化センター（仙台市）、せん

だい演劇工房10 | Box

②美術ワークショップ

県内で活躍する芸術家を講師に、ワークショップ等の少人数・体験型講習会を開催し、参加者自身が作品を製作・表現することを通じて、文化芸術活動への関心を高め、新たな美術愛好者層の拡大を図ることを目的として開催した。

◆市町村との共催事業

○宮城県南郷高等学校

・漆の文化を学び作品を作ろう

講師 佐藤建夫

期間 九月九日

会場 宮城県南郷高等学校（美里町）

○塩竈市杉村惇美術館

・子ども探偵事務所「ざくろの実を調査」

講師 吉田愛美

期間 十月十七日、十一月二十一日

会場 塩竈市杉村惇美術館（塩竈市）
・ flower art museum

（絵画の中の花を組む）

講師 大塚のぞみ

期間 十一月二十八日

会場 塩竈市杉村惇美術館（塩竈市）

○蔵王町

・加川広重アートプロジェクト vol.6 巨大絵画を描こう

講師 加川広重

期間 十二月五日

会場 蔵王町ふるさと文化会館（蔵王町）

○公益財団法人登米文化振興財団

・令和三年度 絵画ワークショップ〜油彩編〜

講師 亀山陽逸、亀山武宏

期間 令和四年一月十五日〜二十五日

会場 登米祝祭劇場（登米市）

◆普及事業

・施設をPRするチラシづくり

講師 本田翔子

期間 八月〜十月

会場 東部南部地域包括支援センター（塩竈市）ほか

・醤油のオリ（澱）で大きな木を描こう

講師 一関恵美

期間 八月十三日

会場 塩竈市立第一小学校（塩竈市）

・Coppa（木っ端）でカタチをつくろう

講師 佐野美里

期間 八月十四日

会場 多賀城市立図書館（多賀城市）

・海のアクリルチャーム&乾漆プローチづくり

講師 Fablab Sendai-PLAT

期間 十月九日

会場 あすと長町第二市営住宅集会所（仙台市）

・カラージュネクタイをつくろう

講師 ビルド・フルーガス

期間 十一月七日

会場 本町くるくる広場（塩竈市）

・リズムにあわせて身体を動かそう

講師 段家亜紀子

期間 十一月十九日〜令和四年一月十七日

会場 月見ヶ丘小学校、第一小学校、第二小学校、第

三小学校、杉の入小学校（塩竈市）

・みんなでつくろう！ひかりのはこinかくだ

講師 松村泰三

期間 十一月二十一日、十二月十八日

会場 角田市市民センター(角田市)

- ・原土の採取から粘土づくり

講師 工藤玲那

期間 令和四年一月二十一日、一月二十四日、二月五日

会場 利府春日地域(利府町)

- ・親子でつくろう！キラキラ光る防災バックづくり

講師 すがわらじゅんいち

期間 令和四年二月十一日

会場 多賀城市市民活動サポートセンター(多賀城市)

- ・自宅で気軽に楽しむダーツづくり

講師 小野寺志乃

期間 令和四年二月二十三日

会場 イオンモール新利府(利府町)

- ・反古紙を使って起き上がり小法師をつくろう

講師 丹野萩逕

期間 令和四年三月二十日

会場 書ギャラリー親かめ子かめ(仙台市)

- ・木の声と手の記憶にふれる〜グリーンウッドワークショップ

講師

かんぶうざわ雑貨店

期間 令和四年三月二十三日

会場 J O C A 東北(岩沼市)

- ・人形について考え、お気に入りの人形を描き、話し合う

講師 福田一実、佐々木克真

期間 令和四年三月二十六日

会場 秋保の杜 佐々木美術館&人形館(仙台市)

- ・身体でなぞる、とらえる風景画

講師 川畑えみり、福田美里

期間 令和四年三月二十八日

会場 松島カフェロマン(松島町)

- ・七ヶ浜パークでつくるマイダーツ

講師 小野寺志乃

期間 令和四年三月二十九日

会場 七ヶ浜町子育て支援センター(七ヶ浜町)

③音楽アウトリーチ

アーティストを講師に、生演奏を間近で体験できる少数を対象としたアウトリーチを実施し、普段はなかなか触れることのできない楽器の面白さや音楽の魅力を伝え、音楽愛好者層の拡大を図った。

また、地域の公共ホール等で、講師による芸術性の高いコンサートを開催した。

◆市町村等との共同事業

○えずこ芸術のまち創造実行委員会

・きらめく！フルートの七変化

出演 荒川洋（フルート）、中川賢一（ピアノ）

期間 十月十二日～十五日

会場 船岡小学校（柴田町）、西根小学校（角田市）、

金ヶ瀬小学校（大河原町）、館矢間小学校（丸

森町）、富岡小学校（川崎町）

・声楽つてすごい！カラダが楽器になるよ！

出演 村上敏明（テノール）、中川賢一（ピアノ）

期間 十一月八日～十日

会場 大河原中学校（大河原町）、柴田小学校（柴田町）、

藤尾小学校（角田市）

○大和町文化振興協会

・杜のピアノ三重奏団『ピアノ三重奏で様々な曲を聴いてみよう』

出演 叶千春、塚野淳一、杉元太

期間 十月二十一日～十一月一日

会場 宮床小学校、吉田小学校、吉岡小学校、落合小

学校（大和町）

○大郷町

・ヴァイオリン、フルート、ソプラノ、ピアノの合奏鑑賞

出演 仙台室内合奏団

期間 十二月九日

会場 大郷小学校（大郷町）

○角田市

・光の回廊を巡る音の旅

出演 一般社団法人 陽だまりハーモニー

期間 令和四年二月十二日

会場 かくだ田園ホール（角田市）

○多賀城市文化センター

・文化センター×山響 アウトリーチプロジェクトin多

賀城

出演 山形交響楽団

期間 令和四年二月十六日～三月十四日

会場 多賀城市文化センター、多賀城市立図書館、高

橋地区生活センター、すくつびー広場（多賀城市）

◆普及事業

・出演 大岩千華、佐藤瑛利子

期間 十一月一日

会場 登米小学校（登米市）

・出演 マリンピエ

期間 十一月十二日

- 会場 東大崎小学校（大崎市）
 - ・ 出演 マリンピア
 - 期間 十一月十五日
 - 会場 錦織小学校（登米町）
 - ・ 出演 大村麻衣子、阿部玲子
 - 期間 十一月十八日
 - 会場 鹿折小学校（気仙沼市）
 - ・ 出演 ムジカノヴァ
 - 期間 十一月二十二日
 - 会場 新田小学校（登米市）
 - ・ 出演 阿部玲子、宮地夏海、吉岡知広
 - 期間 十一月二十九日
 - 会場 川崎町健康福祉センター（川崎町）
 - ・ 出演 仙台木管五重奏団
 - 期間 十二月一日
 - 会場 三本木小学校（大崎市）
 - ・ 出演 Sendai Saxophone Quartet
 - 期間 十二月七日
 - 会場 沼部小学校（大崎町）
 - ・ 出演 民族歌舞団ほうねん座
 - 期間 十二月十四日
 - 会場 平沢小学校（蔵王町）
-
- ・ 出演 長谷川康、東歩美
 - 期間 十二月十五日
 - 会場 鶴ヶ谷児童館（多賀城市）
 - ・ 出演 杜の弦楽四重奏団
 - 期間 十二月二十日
 - 会場 川崎第二小学校（川崎町）
 - ・ 出演 長谷川康、東歩美
 - 期間 十二月二十一日
 - 会場 山下第一小学校（山元町）
 - ・ 出演 櫻井希、田原さえ、佐藤こずえ
 - 期間 令和四年一月十八日
 - 会場 大谷小学校（気仙沼市）
 - ・ 出演 渡辺文江
 - 期間 令和四年一月十九日
 - 会場 鶯沢小学校（栗原市）
 - ・ 出演 トレンス
 - 期間 令和四年一月二十八日
 - 会場 米岡小学校（登米市）
 - ・ 出演 櫻井希、田原さえ、佐藤こずえ
 - 期間 令和四年一月三十一日
 - 会場 矢本西小学校（東松島市）

④みやぎ芸術銀河作品展

令和三年度宮城県芸術選奨の受賞者の作品等を一堂に会し、受賞者の作品やこれまでの活動などを紹介し、芸術をより身近に感じられる機会を提供した。

期間 令和四年一月二十四日～三十日

会場 東京エレクトロンホール宮城五〇一・五〇二展
示室

⑤若手芸術家育成事業

県内高校生の文化芸術に係る表現力を育み、強化するとともに、宮城県の文化芸術の振興・発展に寄与することを目的に、講習会等を開催し、参加者同士の交流を深め、表現力等の向上を図った。

共催 宮城県高等学校文化連盟

期日 五月～十二月

会場 宮城県内七会場

⑥地域文化発信支援事業（地域芸能等現況調査）

地域芸能を担う各団体への今後の支援のあり方について検討するため、コロナ禍の状況も踏まえた地域芸能団体の活動実態の調査を行った。

⑦こどものための舞台芸術見本市

県内の子どもたちや、学校・保育所等の施設職員に対し、舞台芸術及びアウトリーチ活動の推進を図ることを目的に、オンラインを活用した舞台芸術アウトリーチを実施した。

実施主体 A R C T（アルクト）
期 日 三月

⑧新型コロナウイルス対策事業（文化芸術活動再開支援事業）

文化芸術活動の再開・継続を支援する目的として、県内に文化芸術団体又は芸術家が、新型コロナウイルス感染症対策を適切に講じた上で開催する公演又は展覧会等の活動に対し、支援した。

募集期間 十一月五日～令和四年二月二十五日
交付件数 六件

4 文化活動の促進

(1) 令和三年度宮城県芸術選奨の顕彰

授賞式 十一月二十九日 宮城県行政庁舎十一階
第二会議室

(2) 文化芸術関係行事の後援、知事賞の贈呈等

後援行事 百七件

知事賞交付 三十四行事 六十七件

(3) 文化事業への助成

県内文化団体事業への補助（公財）仙台フィルハー

モニー管弦楽団ほか）

(4) 文化振興基金の造成

民間と行政が一体となって文化活動の助成を図るため、文化振興基金を設置し、昭和六十二年頃から基金の造成を図っている。

(5) 宮城県芸術年鑑の発行

(二) 長寿社会政策課

第二十九回宮城シニア美術展

高齢者の創作による作品（日本画・洋画・書・写真・工芸）の募集・展示を通して、高齢者の文化活動を促し、ふれあいと生きがいづくりを促進するとともに、第三十四回全国健康福祉祭神奈川・横浜・川崎・相模原大会（ねんりんピックかながわ2022）への宮城県代表作品として選考することを目的に開催した。

出品 二百十点

期日 十二月二日～十二月五日

会場 宮城県美術館 県民ギャラリー

主催 社会福祉法人宮城県社会福祉協議会

共催 宮城県・公益財団法人宮城県老人クラブ連合会

(三) 障害福祉課

1 とうっておきの音楽祭

障害の有無に関わらず参加できる音楽祭が開催された。YouTubeにより配信し、延べ九十一団体が参加した。

配信日 六月六日～六月二十日

主催 NPO法人とうっておきの音楽祭

2 表彰

(1) 「第二十五回ピュア・ハーツアート展」（仙台市知的障害者芸術文化協会主催）の最優秀作品を「宮城県知事賞」として表彰を行った。（令和四年二月六日）

○佐藤隆（絵画）

(2) 「第七回 Art to You! 東北障がい者芸術全国公募展」（公益社団法人東北障がい者芸術支援機構主催）の入賞作品のうち一点を「宮城県知事賞」として表彰を行った。（十月二十四日）

○成田真梨菜（絵画）

3 障害者による芸術文化活動の支援

令和三年度宮城県障害者芸術文化活動支援事業

県内障害者の芸術文化活動の振興を図ることを目的に、宮城県障害者芸術文化活動支援センターを設置し、以下の事業を実施した。

(1) 相談・支援

芸術活動を行う障害者本人や家族、支援者等からの相談に応じ、支援を行った。

(2) 障害者芸術文化活動を支援する人材の育成支援

芸術文化活動の支援方法、著作権等の権利保護、障害特性への理解等に関する研修等を対面方式及びオンラインで行った。

① 七月二十一日 「アートと工賃支給規程」

② 八月二十三日 「重度の障害のある人と芸術文化活動」

③ 十月十九日 「芸術文化活動を〈生涯学習〉の視点からとらえてみよう」

④ 十一月十一日 「ひろがる世界・ひろがる私〈美術館〉に行こう！」

(3) 展示会開催

第四回 障害のある人と芸術文化活動に関する大見本市 「きいて、みて、しって、見本市。」

開催日 令和四年二月四日～二月八日

会場 せんだいメディアテーク一階オープンスクエア

二 教育委員会関連

(一) 生涯学習課

1 表彰

令和三年度地域文化功労者文部科学大臣表彰受賞者

○大場 尚文Ⅱ芸術文化Ⅱ洋画(富谷市)

○後藤 文二Ⅱ芸術文化Ⅱ小説(仙台市)

○米川の水かぶり保存会Ⅱ文化財Ⅱ文化財保護(登米市)

2 文化芸術の振興

(1) 第五十八回宮城県芸術祭

(公社) 宮城県芸術協会・宮城県・仙台市・宮城県教育委員会・仙台市教育委員会・河北新報社・(公財) 宮城県文化振興財団・(公財) 仙台市市民文化事業団の八者が共催
九月二十五日～三月十三日(せんだいメディアテーク 他)

書道、工芸、絵画、写真、華道、彫刻等の展示及び音楽コンクールが行われた。

(詳細は「広域文化団体の文化活動記録」(公社) 宮城県芸術協会)に掲載。

(2) 宮城県高等学校文化連盟事業

▲は新型コロナウイルス感染拡大の影響などにより、当初の予定を変更したことを表す。

① 第二十八回宮城県高等学校総合文化祭

テーマ「いま芽吹く時 すべてが輝く未来の種」

ア 総合開会式〔式典・ステージ部門・展示部門〕

十月九日～十日（白石市中央公民館）

イ 部門別開催

○合唱〔第六回みやぎ高校合唱祭〕▲中止

○英語〔第七十四回宮城県高等学校英語弁論大会〕

十月四日（尚絅学院高等学校）▲動画審査、〔第

六十八回宮城県高等学校英作文コンクール〕十月

二十八日（宮城第一高等学校及び各地区会場校）

○吹奏楽〔第六回みやぎ高校吹奏楽祭〕十月二日（多

賀城市民会館）▲一般客なしで開催

○演劇〔第五十九回宮城県高等学校演劇コンクール

地区大会・中央大会〕十月二日～二十四日・十一

月十二日～十四日（広瀬文化センター、県内各地

区会場）

○囲碁〔第二十二回宮城県高校囲碁九路盤大会〕十

月十五日（東京エレクトロンホール宮城）

○小倉百人一首かるた大会〔第三十回宮城県高等学校小

倉百人一首かるた大会〕十月十二日（宮城県武道

館）

○新聞〔第八回宮城県高等学校新聞コンクール〕十

月九日～十日（白石市中央公民館）

○郷土芸能〔第八回宮城県高等学校郷土芸能大会〕

十一月四日（名取市文化会館）

○器楽・管弦楽〔第四十四回宮城県高等学校音楽祭〕

十月二十六日（若林区文化センター）

○文芸〔第二十八回県高総文祭文芸部門交流会・研

修会〕十月二十二日（東京エレクトロンホール宮

城）

○放送〔第四十回宮城県高等学校放送コンテスト新

人大会〕十月二十三日～十一月十日（多賀城市文

化センター 他）▲一般公開中止 アナウンス・

朗読部門の予選はCD審査

○ダンス〔第二十九回宮城県高等学校ダンスフェス

ティバル二〇二一〕十月十九日～二十日（広瀬文

化センター）

○工業〔第三十回宮城県高等学校生徒活動成果発表

会〕十一月十三日（白石工業高等学校）

○日本音楽〔第三十回宮城県高等学校日本音楽定期

演奏会〕十一月五日（多賀城市文化センター）

○写真〔第二十八回宮城県高等学校写真展〕十一月

三日～七日（宮城県美術館県民ギャラリー）

○自然科学〔第七十四回宮城県高等学校生徒理科研究発表会〕十一月二日（東北大学大学院工学研究科）▲オンラインでのポスター発表審査

○軽音楽〔第十八回宮城県高等学校対抗バンド合戦新人大会〕十一月六日（デジタルアーツ仙台）

○将棋〔第三十八回宮城県高等学校将棋新人戦〕十一月三日（エスポールみやぎ）▲個人戦のみ実施、男子は前年度新人戦A級上位四名及び各学校一名のみの参加、スイス式トーナメント戦からトーナメント戦に変更

○書道〔第七十回宮城県高等学校書道展覧会〕十二月七日～十二日（宮城県美術館県民ギャラリー）

○弁論〔第八回宮城県高等学校弁論大会兼第三回吉野作造記念高校生弁論大会〕十二月十日（吉野作造記念館）

○商業〔プログラミング研修会〕十二月二十四日（東京ITプログラミング&会計専門学校仙台校）

○美術・工芸〔第七十四回宮城県高等学校美術展〕二月三日～六日（宮城県美術館県民ギャラリー）

② 第四十五回全国高等学校総合文化祭和歌山大会

七月三十一日～八月六日（和歌山県内十市町）

本県生徒二百八十名が総合開会式、パレード及び以下の部門に参加（合唱、器楽・管弦楽、日本音楽、郷土芸能、マーチング・バトントワリング、美術・工芸、書道、写真、放送、弁論、新聞、文芸、自然科学、軽音楽）

③ 専門部事業

ア 演劇〔第二十九回宮城県高等学校演劇総合研修会〕七月十日～十一日（宮城野区文化センター）、〔第三十一回宮城県高等学校演劇リーダー研修会〕七月二十四日～二十五日（宮城野区文化センター）

イ 合唱〔令和三年度第一回発声講習会〕五月十六日（名取市文化会館）▲中止、〔第七十三回宮城県合唱祭〕六月五日～六日（仙台銀行ホールズイズミティ21）▲八月（楽楽ホール）・二十八日～二十九日（名取市文化会館）に代替開催、「合唱講習会」八月一日～三日▲会場は仙台三桜高等学校音楽室、常磐木学園シユトラウスホール、及び出前講習、「第八十八回NHK全国学校音楽コンクール宮城県大会」八月二十二日（多賀城市文化センター）、〔第七十二回全日本合唱コンクール宮城県大会〕八月二十八日（名取市文化会館）、〔令和三年度第二回発

声講習会」▲中止、「第三十三回宮城県合唱アンサンブルコンテスト」十二月十八日（日立システムズホール仙台）、「令和三年度パト別発声講習会」一月九日（仙台三桜高等学校）▲中止

ウ 吹奏楽（全日本吹奏楽コンクール第六十三回宮城県大会）七月三十日（仙台銀行ホールイズミティ21）▲無観客で開催、「第九回高校生のための吹奏楽部運営講座」十一月七日（仙台第三高等学校）、「第四十二回東北吹奏楽の日演奏会」十二月二十六日（東京エレクトロンホール宮城）▲中止、「全日本アンサンブルコンテスト第五十五回宮城県大会」一月十六日（仙台銀行ホールイズミティ21）

エ 器楽・管弦楽（マンドリン部合奏講習会）十月二日（東松島市コミュニティセンター）、「ギター部合奏講習会」十二月十八日（聖和学園高等学校）、「管弦楽楽器別講習会」十一月三日（尚綱学院中学高等学校）

オ 美術・工芸（各地区美術展（仙南、仙台、泉・黒川、塩釜、大崎、登米・栗原、石巻、本吉））仙台地区七月七日～十一日（宮城県美術館県民ギャラリー）

カ 放送（春季校内放送研修会）五月十五日（仙台北百合学園高等学校）、「第六十八回NHK杯全国高校

放送コンテスト宮城県大会）六月十二日～十八日（仙台銀行ホールイズミティ21 他）▲一般公開中止
アナウンス・朗読部門の予選はCD審査、「夏季校内放送研修会」八月十日（仙台商業高等学校）、「冬季校内放送研修会」一月二十二日（仙台二華高等学校）▲中止

キ 囲碁（第四十五回文部科学大臣杯全国高校囲碁選手権大会宮城県大会）六月二十六日～二十八日（仙台第二高等学校、宮城第一高等学校）、「第三十九回宮城県高校囲碁新人大会」一月三十日（東京エレクトロンホール宮城）▲中止

ク 将棋（第五十七回全国高校将棋選手権宮城県予選大会）五月二十二日（仙台第一高等学校）、「第二十二回東北地区高等学校将棋新人大会」十二月十八日（エスポール宮城）

ケ 自然科学（第一回生徒研修会）七月四日（東京エレクトロンホール宮城）▲参加人数を制限してYouTubeで限定公開、「第二回生徒研修会兼全国高総文祭最終選考会」十二月二十四日（仙台銀行ホールイズミティ21）

コ 写真（第三十回写真技術講習会）五月二十九日～三十日（東北歴史博物館）、「第十八回写真部夏季写

真撮影大会)八月八日～十日(戦災復興記念館、トールネットホール仙台台)、(写真部冬季写真撮影大会)

▲延期

サ 小倉百人一首かるた(第四十五回全国高総文祭小倉百人一首かるた部門宮城県予選)五月二十五日(本山制作所仙台市武道館)、(第四十三回全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会宮城県予選)六月十日(宮城県武道館)、(第十三回東北・北海道高等学校かるた選手権大会) ▲中止

シ 日本音楽(令和三年度日本音楽研修会)十一月五日(多賀城市文化センター)

ス ダンス(第三十三回全日本高校・大学ダンスフェスティバル)八月十一日～十四日(神戸文化ホール)、(ダンス技術リーダー講習会)十二月十八日(宮城第一高等学校)

セ 軽音楽(第二十七回宮城県高等学校対抗バンド合戦)七月十八日(デジタルアーツ仙台)、(第六回ハイスクールプレミアアマライブ二〇二一)八月十三日(仙台PIT)、(第七回宮城県高等学校対抗バンド合戦一年生大会)十二月十八日(デジタルアーツ仙台)、(北部地区技術講習会)(ROCK ON Music School本町教室) ▲中止、(生徒技術

講習会)一月▲中止、(顧問技術講習会)二月八日(ROCK ON Music School本町教室) ▲中止

中止

ソ 文芸(宮城県高文連文芸専門部新人研修会)一月十五日▲オンラインで短歌研修会、(第十八回高校生文芸作品コンクール)八月二十七日必着

タ 新聞(前期研修会)七月二十一日(配信元「石巻高等学校」)▲オンライン開催、(後期研修会) ▲中止

チ 吟詠剣詩舞(強化練習会)五月二十九日、六月三十日、七月三日・十日・十四日・十七日・二十二日・三十日、八月五日(古川黎明高等学校)

④ 支部事業

ア 仙台北・仙台南(第三十一回仙台支部総合文化祭「ふれんどりとくく」)十月二十六日(宮城野区文化センター)、(広報誌『にしき木』第三十号発行)二月十五日

イ 仙南(第二十七回仙南支部高等学校総合文化祭)九月三十日～十月二十六日(岩沼市民会館、しばたの郷土館、白石市中央公民館) ▲音楽・郷土芸能・茶道・演劇・美術・写真は開催、書道は不参加、軽音楽は中止、(専門部研修会)九月～冬季休業中(専

門部毎各会場) ▲書道・写真・美術・茶道は開催、
軽音楽・演劇・郷土芸能は中止

- ウ 大崎〔第四十九回古川管内高校演劇祭〕五月十五日(パレット大崎) ▲中止、〔令和三年度古川管内高等学校美術クラブ連合展〕六月四日～七日(市民ギャラリー緒絶の館) ▲中止、〔第二十八回大崎支部総合文化祭〕十月九日(美里町文化会館、美里町中央コミュニティセンター、美里町近代文学館) ▲中止、〔令和三年度アンサンブルコンテスト大崎地区大会〕十二月十八日(大崎市岩出山文化会館)、〔第十六回大崎吹奏楽祭〕二月六日(美里町文化会館) ▲中止

エ 東部〔第三回東部地区高等学校美術展〕七月三十日～八月一日(松島町文化観光交流館)、〔第四回東部支部総合文化祭〕十月九日～十一月三日(松島町文化観光交流館) ▲華道部研修交流会、華道・美術・書道・写真展覧会は開催、合同開会式、合同音楽祭は中止

- オ 栗原・登米〔第二十八回栗原・登米支部総合文化祭〕六月二十六日～二十七日(ドリームパル) ▲中止
カ 本吉〔第十六回本吉支部総合文化祭〕七月三日～四日(気仙沼市はまなすホール、本吉公民館) ▲中

止、〔第五十九回気仙沼・本吉地区高等学校美術展「けせもい展」〕九月八日～十二日(リアス・アーク美術館) ▲十月六日～十日(かまなすの館) で開催、〔本吉支部写真展示会〕十二月 ▲中止、〔第二十八回気仙沼・本吉地区生徒科学発表会〕十二月(気仙沼向洋高等学校) ▲一月十五日にオンライン開催
定通部事業

⑤ 〔第四十九回宮城県高等学校定時制通信制生徒の集い〕九月四日(大河原商業高等学校) ▲中止、〔第六十九回全国高等学校定時制通信制生徒生活体験発表宮城県大会〕十月二日(パレット大崎) その他

⑥ 〔機関紙「高文連ニュース第三十一号」発行〕十月一日
〔宮城県高等学校文化連盟PR事業〕十月十八日～二十八日(県庁一階ロビー・二階回廊)、〔令和三年度宮城県高等学校文化連盟賞表彰式〕二月十日(ホテル白萩) ▲中止、〔年間集録「みやぎ高文連年報三十号」刊行〕三月十五日

(3) 文化庁事業

① 文化芸術による子供育成総合事業(巡回公演事業)

九月 九日 登米市立米山東小学校 (ミュージカル)
 ▲中止
 九月 十四日 栗原市立高清水小学校 (オーケストラ)
 九月 二十八日 村田町立村田第二中学校 (合唱)
 ▲中止
 十月 五日 川崎町立富岡中学校 (歌舞伎・能楽)
 ▲中止
 十月 二十五日 気仙沼市立小泉小学校 (演芸)
 十月 二十五日 石巻市立開北小学校 (人形浄瑠璃)
 十月 二十六日 栗原市立栗原西中学校 (演劇)
 十月 二十六日 宮城県立聴覚支援学校小牛田校 (演芸)
 十月 二十六日 村田町立村田第一中学校 (人形浄瑠璃)
 十月 二十七日 丸森町あの内小学校 (オーケストラ)
 十月 二十七日 気仙沼市立面瀬小学校 (演劇)
 十月 二十七日 大崎市立鹿島台中学校 (バレエ)
 ▲中止
 十月 二十八日 気仙沼市立新月中学校 (演劇)
 十月 二十八日 大崎市立鳴子小学校 (バレエ)
 十月 二十九日 塩竈市立第二中学校 (オーケストラ)
 十月 二十九日 女川町立女川小学校 (ミュージカル)
 十月 二十九日 柴田町立西住小学校 (バレエ)

十一月 四日 美里町立南郷小学校 (演芸)
 十一月 十五日 大崎市立古川西中学校 (オーケストラ)
 十一月 十六日 気仙沼市立面瀬中学校 (オーケストラ)
 十一月 十八日 東松島市立鳴瀬桜華小学校 (オーケストラ)
 十一月 二十二日 角田市立西根小学校 (児童劇)
 十二月 十四日 石巻市立二俣小学校 (歌舞伎・能楽)
 十二月 十五日 富谷市立日吉台中学校 (歌舞伎・能楽)
 十二月 二十日 名取市立高館小学校 (ミュージカル)
 ② 文化芸術による子供の育成事業(芸術家の派遣事業)
 八月 二十六日 宮城県南郷高等学校
 七月 二十六日 宮城県東松島高等学校 (中止)
 七月 十四日・九月 三十日・十一月 十日 宮城県立支援学校小牛田高等学園
 十月 七日 宮城県田尻さくら高等学校 (洋楽)
 七月 十五日 宮城県田尻さくら高等学校 (落語)
 十二月 二日 宮城県田尻さくら高等学校 (現代劇)
 八月 二十五日 宮城県白石高等学校七ヶ浜校
 十二月 九日・十一日 西山学院高等学校
 七月 十二日 塩竈市立第一中学校
 十二月 三・十・十七日

塩竈市立玉川中学校

十月 十五日 多賀城市立高崎中学校

十一月二十五日 気仙沼市立面瀬中学校

十一月 二日 多賀城市立城南小学校

九月 三十日 多賀城市立多賀城八幡小学校

九月三・二十四・十月一日

塩竈市立浦戸小学校

六月二十五日・十月二十九日

亘理町立高屋小学校

六月八日・七月十三日・九月二十八日

大崎市立敷玉小学校

十一月 八日 大崎市立大貫小学校

十月 五日 角田市立枝野小学校

③ 文化芸術による子供の育成事業（子供 夢・アート・

アカデミー）

一月二十日 利府町立利府第二小学校

高木 茂行 （書）

④ 文化芸術による子供の育成事業（芸術家の派遣事業）

〔東日本大震災復興支援対応〕

「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」みやぎ実

行委員会が委託を受けて、県内百二十五会場（中止
事業を含まず）に講師を派遣して事業を実施

(4) 宮城県巡回小劇場

① 音楽…宮城県教育委員会、開催市町村教育委員会、

（公財）日本青少年文化センターと共催

九月二十七日～十月一日・二十九日六会場）

『LEP'S Swing! くブラックボトムプラスバンド』

鑑賞者数六百七十六人

新型コロナウイルス感染症の影響で二公演中止

② 演劇…宮城県教育委員会、開催市町村教育委員会、

（公社）日本児童演劇協会との共催

九月七日～九月十七日（県内九会場）

プログラム

『給食番長』（小学生用）劇団 仲間

『スクラップ』（小学生用）劇団 笑う猫

鑑賞者数九百三十七人

新型コロナウイルス感染症の影響で三公演中止

(5) 青少年劇場小公演

開催市町村教育委員会、（公財）日本青少年文化セン

ターの共催により、地域の児童生徒に優れた生の芸術を鑑賞する機会を提供した。

五月二十四日～十月六日（二十六公演）

『揚琴（ヤンチン）コンサート』悠久のしらべ ..
グォ・ミン』

『話の伝統芸能 落語 .. 柳家禽太夫』

『サクソフォンとピアノのコンサート .. 中村均一、玉井美子』

鑑賞者数 二千八百三十八人

(6) 宮城県地方音楽会：開催市町村教育委員会と共催

① アンサンブル公演

令和三年七月十七日 大和町まほろばホール

令和三年十一月十三日 蔵王町ふるさと文化会館ごさ

いんホール

② オークストラ公演

令和四年二月十二日 七ヶ浜国際村（中止）

令和四年二月十三日 気仙沼市民会館

鑑賞者数 七百十五人

(7) 優秀映画鑑賞推進事業：文化庁、国立映画アーカイブ、

開催町と共催

九月二十六日

加美町中新田文化会館 中新田バッハホール

(8) 国民文化祭派遣事業：和歌山県・宮崎県

(9) 地方青年文化祭

県内青年の文化活動の促進、青年相互の交流、地域文化の振興を目指すもの。（令和三年十一月～令和四年二月、各教育事務所毎、県内七地区）

(10) 第六十九回宮城県青年文化祭

令和三年七月十八日（動画配信）

合唱一、舞台発表四、以上五団体三十一名と、のど自慢四、文化部門六、個人十名、合わせて四十一名の出場参加数であった。動画視聴回数は延べ二百四十四回であった。動画配信のみの開催としたため、受賞等は行わなかった。

(11) 第六十九回全国青年大会

令和三年十一月十二日から十一月十五日（芸能部門のみ動画配信）

舞台発表十一名、合唱四名、郷土芸能八名、写真展三

名、合わせて二十六名の出場参加数であった。

(二) 宮城県図書館

情報拠点としての図書館の機能を強化し、県民のより充実した生涯学習を支援するため、各種の展示や講座、子どもの移動展示会等多様な活動を展開している。

1 展示

(1) 常設展

「本と人の文化史 ―アジア・日本を中心に―」

(2) 企画展

① 「東日本大震災文庫展XI あの日はいつもどおりのはずだった」

令和三年二月二十七日～令和三年五月三十日

② 「みやぎとオリンピック 1964↓2020」

令和三年六月五日～令和三年八月二十九日

③ 「視聴機器今昔ものがたり」

令和三年九月四日～令和三年十一月九日

④ 「公文書館企画展 災害と公文書―地震・津波と宮

城県―」

宮城県公文書館による展示

令和三年十二月四日～令和四年二月二十七日

⑤ 「東日本大震災文庫展XII 震災伝承 つたえつづけ
てゆく記憶」

令和四年三月五日～令和四年五月二十九日

(3) 子どもの本展示会

令和三年四月二十二日～令和三年五月九日

入場 千七百三十二名

子どもの本移動展示会

・県内市町村図書館・公民館 十六会場

入場 二千八百九十六人

・県内小中学校・特別支援学校 四十五会場

入場 九千二百六十人

(4) 一般図書・児童視聴覚・資料情報・震災文庫各フロア
での季節・催事等に関する資料展示

令和三年四月～令和四年三月

開催回数 八十九回

(5) 情報エントランス(外部機関・団体によるパネル等展示)

令和三年四月～令和四年三月

開催回数 十二機関・団体 十二回

2 講座・講演会等

(1) みやぎ県民大学専門施設開放講座

動画配信による開催

令和三年十二月二十五日～令和四年三月四日

「図書館の今と未来」

① 「図書館のシゴト―宮城県図書館の事例を中心に―」

講師 宮城県図書館 宇野 亮一

② 「市町村図書館等との連携・協力」

講師 宮城県図書館 天野 洋介・中島 美雨

③ 「宮城県図書館の歴史と貴重資料」

講師 宮城県図書館 佐尾 博基

④ 「図書館とゲーム」

講師 宮城県図書館 宇野 亮一

(2) ビブリオバトル

令和三年十二月十一日

参加者 バトラー 五人

オーディエンス 十八人

(3) ベガ号天体観望会

令和三年八月四日

参加者 二十九人

3 各種上映会（DVD・16ミリ）

上演回数八回

(1) 上映会

十月～三月の月一回（十一月除く）

(2) こども映画会

令和四年三月五日

(3) 懐かしの16ミリ映画フィルム上映会

① 令和三年十月二十三日

② 令和四年一月十五日

4 おはなし会

令和三年十月～令和四年三月

第三木曜日、第一～第四金曜日、毎週土曜日・

日曜日 実施

実施団体 四団体

5 親子新聞スクラップ道場

令和三年七月十日

参加組数 七組 十五名

6 複製資料貸出

石巻市図書館、築館高等学校他二十一会場 七十点

(三) 宮城県美術館

様々な美術文化活動に積極的に参加できる多角的機能を備えた場、また、美術と関わりの深い表現領域にも接すること

のできる施設として、展覧会（常設展・特別展）や、多くの講演会・各種の講座等多彩な鑑賞・創作普及活動を積極的に展開している。

※は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、計画変更となったもの。

1 常設展

本館では、所蔵作品による展示を三ヶ月単位で入れ替え、特色ある展示を行い、収蔵作品等を用いて特集展示を開催した。また、毎月、美術館学芸員がギャラリー・トークを行った。佐藤忠良記念館では、佐藤忠良の彫刻・素描や他の作家の絵本原画などを三ヶ月単位で入れ替え、テーマ展示を行った。

(1) 特集「新ヨーロッパ版画集」

四月十四日～六月二十七日

（四月十四日～十九日は地震による休館）

(2) 特集「松本竣介」

六月三十日～九月十二日

(3) 特集「所蔵名品展」

九月十八日～十二月二十六日

(4) 特集「芸術誌の時代」

二月三日～四月十日

2 特別展

(1) 「足立美術館展 横山大観、竹内栖鳳、華やかなる名品たち」

四月二十四日～六月六日

鑑賞者数 二万五千五百六十三人

講演会 四月二十四日 ※中止

展示解説 五月九日 ※中止

五月二十三日、六月六日

(2) 「生誕一一〇年 香月泰男展」

七月三日～九月五日

鑑賞者数 五千三百八十二人

講演会 七月三日

まちなか美術講座 八月二十一日 ※中止

展示解説 七月十八日、八月九日

八月二十九日 ※中止

(3) 「ランス美術館コレクション 風景画のはじまり コロから印象派へ」

九月十八日～十一月七日

鑑賞者数 二万二千五十九人

講演会 十月二日

まちなか美術講座 十月九日

展示解説 十月十七日、十月三十一日

(4) 「宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 皇室の名品展 皇室の美
東北ゆかりの品々」

九月十八日～十一月七日

鑑賞者数 二万六十五人

講演会 十月十日

まちなか美術講座 十月十六日

展示解説 九月十九日 ※中止 十月一日

十月十二日、十月三十日

(3) 「絵本原画の世界二〇二二」

二月五日～三月二十七日

鑑賞者数 九千七百八十九人

まちなか美術講座 二月二十六日

展示解説 二月二十三日

3 教育普及活動

自由に創作活動を楽しめるオープンアトリエ、各種教育プログラム、一般や高校生を対象にした実技と鑑賞の講座等、多彩な教育普及活動を実施した。

(1) 通常活動

① 美術なんでも相談

開館中随時

② オープンアトリエ

開館中随時 ※感染予防のため利用制限有り

③ 造形遊戯室

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため閉室

④ 教育プログラム

ア 概要説明「宮城県美術館の特色等の概要説明」

随時、団体の要望に応じて実施

イ 展示解説「学校等団体に向けたコレクション展、特別展の解説」

随時、団体の要望に対して実施

ウ 美術館探検「概ね十歳未満の来館者を対象に、美術館施設を活用した丁寧に見る活動」

※中止

エ 美術探検「概ね十歳以上の来館者を対象に、コレクション展を活用した対話型の鑑賞活動」

※中止

オ ワークショップ「学校団体等を対象に、創作室等

で行う要望に応じた表現などの活動」

※中止

カ 建物見学「美術館施設の機能性を見学」

随時、団体の要望に応じて実施

※中止

キ 自主活動「自主的な鑑賞活動等」

随時、団体の要望に応じて実施

随時、団体の要望に応じて実施

随時、団体の要望に応じて実施

(2) 特別活動

① 公開講座

ア 実技ワークショップ

- 「はじめての彫刻 足されるかたち／削られるかたち」

五月三十日、六月二十七日

- 「絵の色 クレール」

五月十五日、十六日

- 「はじめてのコラージュ」

六月二十日

- 「見えないエネルギーと立体造形」

七月十八日

- 「世界と画面をつなぐ身体 ドローイング」

十月十六日、十七日

- 「絵の具をつくる」

十二月十八日、十九日

- 「記録が表現に変わること」

二月十三日、十九日、二十日、三月二十日

- 高校生対象ワークショップ

- A 「地面とみどりのとびら (デッサン)」

八月七日、八日

- B 「絵を描く」

十一月十四日

- C 「かたちをつくる」

十一月二十一日

- D 「作品を見る」

十一月二十八日

イ どうよびキッズ・プログラム

毎月第一土曜日など

- 四月 「北庭であそぶ日」 ※中止

- 五月 「北庭であそぶ日①」

- 六月 「北庭であそぶ日②」

- 七月 「土とあそぶ日」

- 八月 「水とあそぶ日①」

- 九月 「水とあそぶ日②」 ※中止

- 十月特別企画「色とあそぶ」

- 十一月 「木とあそぶ日」

- 十二月 「紙とあそぶ日」

- 一月 休演

- 二月 「光とあそぶ日①」 ※延期

- 三月 「光とあそぶ日②」 ※中止

② 美術講座

ア まちなか美術講座―一番町で、美術を身近に感じ

る

会場 東北工業大学一番町ロビー

講師 美術館学芸員

※八月二十一日の回はまん延防止のため中止

イ 県民大学（美術館担当）

講師 美術館学芸員

○「目の前の物事をみつめる」

十月三日、二十四日、十一月七日、十二月五日

ウ 美術館講座「作家と絵本 『こどものとも』の周
辺を探る」

○第一回 二月二十日

講師 松本育子（刈谷市美術館・館長代理）

○第二回 二月二十七日

講師 山田志麻子（うらわ美術館・学芸員）

○第三回 三月六日

講師・長沢 明（美術家・東北藝術工科大学教授）

③ 学校との連携

ア アウトリーチ

※中止

イ 中学生招待事業

※中止

ウ 東北大学病院院内学級招待事業

※中止

エ 美術館を活用した鑑賞教育研修会

※中止

④ ハイビジョンギャラリー

上映日 毎週土曜日、日曜日、祝日

上映内容

○ 四月 「絵巻の世界、日本の巨匠たちその二」

※新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点か

ら中止

○ 五月 「印象派展覧会」

○ 六月 「フィレンツェ・ルネサンスⅠ」

○ 七月 「十九世紀の絵画運動」 「都市の表情」

○ 八月 「日本で見られる十九世紀のフランス美
術」

○ 九月 「エルミタージュ美術館Ⅰ」「フレンツェ・
ルネサンスⅡ」【前編】

○ 十月 「オルセー美術館Ⅱ」

○ 十一月 「平成本 おくのほそ道」 「フレンツェ・
ルネサンスⅡ」【後編】

○ 十二月 「ルーブル美術館Ⅱ」

○ 一月 ※メンテナンス休館中のため休み

○ 二月 「オルセー美術館Ⅲ」 「美術のたのしみ」

○ 三月 「パリで見られる十九世紀フランス美術Ⅰ」

⑤ 公演会

※中止

(3) 特別展

① 関連事業

ア 講演会「足立美術館の魅力―日本庭園と日本画コ

レクシヨン」

四月二十四日

講師 安部則男（足立美術館学芸部長）

※中止

イ 講演会「香月泰男とシベリア・シリーズ」

七月三日

講師 萬屋健司（山口県立美術館学芸員）

ウ 講演会

「印象派による戸外制作の意味 ヴァランシエン

ヌから、コロ、印象派へ」

十月二日

講師 古谷可由（ひろしま美術館学芸部長）

エ 講演会「皇室と東北ゆかりの美 ―宮内庁三の丸

尚蔵館の所蔵品から―」

十月十日

講師 五味 聖（宮内庁三の丸尚蔵館主任研究官）

② 展示解説

ア 足立美術館展 横山大観、竹内栖鳳、華やかなる

名品たち

五月二十三日、六月六日 ※五月九日は中止

イ 生誕一〇年 香月泰男展

七月十八日、八月九日 ※二十九日はまん延防止

等重点措置適用のため中止

ウ ランス美術館コレクション 風景画のはじまり

コロから印象派へ

十月十七日、十月三十一日

エ 宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 皇室の名品展 皇室の

美―東北ゆかりの品々

十月一日、十二日、三十日 ※九月十九日は中止

オ 宮城県美術館所蔵 絵本原画の世界二〇二二

二月二十三日、三月八日、十五日、二十一日

※三月八日、十五日はキャンパスメンバーズ対象

(4) コレクション展示ギャラリー・トーク

① ギャラリー・トーク

ア 特集・新ヨーロッパ版画集

五月八日 ※中止

イ 現代の木彫

五月二十二日

- ウ 菅野聖子
六月十二日
- エ 特集…新ヨーロッパ版画集
六月二十六日
- オ 特集 松本竣介
七月十日
- カ 大泉茂基の版画
七月二十四日
- キ 日本の近現代美術
八月十四日
- ク 特集…松本竣介
八月二十八日 ※中止
- ケ 学芸員おすすめ
九月十一日 ※中止
- コ 所蔵名品選
九月二十五日 ※中止
- サ 学芸員のおすすめ
十月九日
- シ 所蔵名品選
十月二十三日
- ス 佐藤忠良
十一月十三日

- セ 日本の近現代美術
十一月二十七日
 - ソ 学芸員のおすすめ
十二月十一日
 - タ 洲之内コレクション
十二月二十五日
 - チ 特集…芸術誌の時代
二月十二日
 - ツ 遠藤速雄と東北の日本画
二月二十六日
 - テ クレーとカンディンスキーから
三月十二日
 - ト 特集…芸術誌の時代
三月二十六日
 - ナ 日本の近現代美術
四月九日
- ② 絵本原画のギャラリー・トーク
- ア テーマ「雨の日のおはなし」
なかのひろたか「ぞうくんのあめふりさんぽ」、
林明子「はっぱのおうち」ほか
五月十三日、六月三日
 - イ 佐藤忠良「いちごつみ」「ババヤガーのしろいとり」

七月八日、八月十二日

ウ 山脇百合子「ぐりとぐらとくるりくら」

十月十四日、十一月四日

③ ウィークデーコレクション展示ギャラリー・トーク

A 絵本原画・山脇百合子「ぐりとぐらとくるりくら」

十一月十八日

B 野外の彫刻、室内の彫刻

十一月二十五日

C 記念館コレクション散歩…佐藤忠良の彫刻&洲之

内コレクション

十二月二日

D 洲之内コレクション

十二月九日

E 彫刻の見方

十二月十六日

5 県民ギャラリーの運営

県民の創作活動の発表及び鑑賞の場を提供するため、県民ギャラリーを運営した。

6 美術に関する調査研究

美術館の事業を充実するため、その基礎となる調査研究を

行った。

7 美術作品の収集、保存

優れた美術作品や資料の散逸、損傷、亡失を防ぎ、これらの作品等を後世に伝えるため、正確な基礎調査に基づいて、美術作品・資料の収集、保存を行った。

8 広報

「2021年度の催し」「美術館ニュース」「宮城県美術館マップ&ガイド」「小中学生向けグループ学習用ガイド」等の広報資料や展覧会ごとにポスター・チラシ等を制作し、配布した。

また、美術館ホームページや共催メディア等の広報媒体を広く活用するとともに、ツイッターを利用し、広報活動の積極的な推進に努めた。

9 刊行物の出版

「美術館年報／研究報告」を発行し、美術館活動の成果を公表した。

(四) 文化財課

表彰関係

令和三年度地域文化功労者文部科学大臣表彰受賞者

○米川の水かぶり保存会（登米市）

(五) 東北歴史博物館

1 特別展

(1) 「デンマーク・デザイン」展

期日 四月二十三日～六月二十七日

※新型コロナウイルス感染症の影響で開幕式、ゴール
デンウィーク期間の関連行事はすべて中止

(2) 「ジュラシック大恐竜展」

期日 七月十七日～九月十二日

・開館延長日

「恐竜バッジハンター」

①八月十三日

②八月十四日

③八月十五日

④八月二十一日

⑤八月二十八日

⑥九月四日

⑦九月十一日

(3) 「みちのく武士が愛した絵画」

期日 十月九日～十二月五日

・関連行事

① 「国宝瑞巖寺本堂ツアー」【本展観覧者限定】

開催日 十月十七日 十一月七日 十一月二十日

場所 瑞巖寺

② 展示解説

開催日 毎週日曜日

解説者 東北歴史博物館職員

2 パネル展

(1) 「令和二年度宮城の発掘調査」

期日 五月十八日～六月二十日

主催 宮城県教育庁文化財課 共催 東北歴史博物館

(2) 「海図一五〇周年記念パネル展」

期日 十月一日～十月十日

主催 第二管区海上保安本部 共催 東北歴史博物館

(3) 「記念物百年展」

期日 二月十五日～三月二日

主催 文化庁 共催 宮城県教育委員会

3 館長講座

「東北グローバル考古学―宮城の先史を再発見―」

第一回 「比較考古学の地平」

期日 四月二十四日

第二回 「ハンドアックスの東と西」

期日 五月二十二日

第三回 「ホモ・サピエンス東北へ」

期日 六月二十六日

第四回 「氷河時代のハンターたち」

期日 七月二十四日

第五回 「美術と思想の起源」

期日 九月二十五日

第六回 「石器製作のハイテク」

期日 十月二十三日

第七回 「地球温暖化の中で」

期日 十一月二十七日

第八回 「縄文への道」

期日 一月二十二日

講師 東北歴史博物館長

※新型コロナウイルス感染症の影響で第五回以降の日程を変更

4 博物館講座

(1) 古文書講座

入門編

期日 九月十九日・十月十日・十月二十四日

中級編

期日 十月三十一日・十一月二十八日・一月三十日・

二月二十七日

講師 東北歴史博物館職員

(入門編、中級編いずれも)

(2) 史料講読講座

期日 五月十六日・六月二十日・七月十一日

講師 東北歴史博物館職員

(3) れきはく講座

第一回 「東アジアのなかの古代蝦夷

―唐・日本と蝦夷の関係をめぐって―

期日 一月二十九日

第二回 「宮城で守られた貴重図書

―東洋文庫の疎開―

期日 二月五日

第三回 「中世のやきもの

―どこで作られ、どこへゆくか―

期日 二月十九日

第四回 「縄文人の水辺のくらし」

期日 二月二十六日

第五回 「プレイバック「戦後昭和」

―豊かさを求めた若者と

―豊かさの中の若者―

期日 三月五日

第六回 「日本海東縁の古津波堆積層と遺跡

―青森県深浦椿山―秋田県男鹿

―山形県飛鳥―新潟県佐渡―」

期日 三月十九日

講師 東北歴史博物館職員

(第一―第六回いづれも)

7 多賀城跡巡り

期日 五・六・九・十月の主に第二・第四日曜日

講師 東北歴史博物館職員

※新型コロナウイルス感染症の影響で九月の「多賀城

政庁跡コース」は中止

8 民話を聞く会

期日 十月二十四日

語り 多賀城民話の会・利府民話の会

5 体験教室

第一回 「昔の絵の具を作ってみよう！」

期日 一月八日

第二回 「自分だけの多賀城碑を作ろう！」

期日 一月十日

第三回 「トンボ玉を作ろう！」

期日 一月十五日

第四回 「切り紙を作ろう！」

期日 一月二十二日

6 展示解説

期日 随時

講師 東北歴史博物館職員

9 体験イベント

(1) 「春のわくわく体験見本市二〇二二」

期日 五月十五日

(2) 「秋の『見』覚まるかじり博物館二〇二二」

期日 十月十六日

※新型コロナウイルス感染症の影響で冬の体験イベン

トは中止

10 調査研究

歴史・文化に関する分野を対象とし、東北全体を視野に入れた調査研究活動を展開して、その成果を定期的に公開した。

三 (公財) 宮城県文化振興財団

(平成四年十月一日設立 理事長 青木 直之)

1 文化芸術に係る鑑賞及び参加の機会の提供並びに情報の発信

(1) 鑑賞機会の提供

イ 東京エレクトロンホール宮城における鑑賞及び参加の機会の提供

① 笑いの芸術 野村万作・萬齋 狂言公演

期 日 十二月十七日

会 場 東京エレクトロンホール宮城

内 容 小舞「田植」、

狂言「文相撲」、「貰智」

出 演 野村万作・野村萬齋・石田幸雄 他

② 定禅寺フォトコンテスト展

期 日 十二月六日～十二日

会 場 東京エレクトロンホール宮城 五階展示室

作 品 宮城県文化振興財団賞「ファンタジーナ

イト」矢部珠美

宮城県芸術協会賞「こもれびに唄えば」

佐々木朋子

全一・二九点

③ みやぎ文化芸術応援事業「トモシビ・プロジェクト」

配信期間 十一月十九日、

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止に伴い、活動の自粛を余儀なくされたプロのアーティスト等が制作した動画作品をWeb上に掲載・発信する機会を設け、その活動を支援するとともに、県民が在宅でも文化芸術に触れられる機会を提供分野…文化芸術全般

団体…teamトモシビ、黒瀬寛幸グループ

他 六一作品、二一六人参加

ロ 地域文化会館との共催事業

① 仲道郁代ピアノリサイタル〜いつもあなたとショパン〜

期 日 八月二十九日

会 場 七ヶ浜国際村ホール

演 目 ショパン「ノクターン第13番」ハ短調 作品48-1」他

出 演 仲道郁代

② えずこプレミアムライブ2021

パプロ・シーグレル ジャズ・タンゴ・アンサン

ブル スペシャル・ゲスト 熊谷和徳

期日 十二月二日

会場 えぞこホール 大ホール

内容 Once Again…Milonga (ミロンガをもう一度) 〃 TAP SOLO (タップソロ)

他

出演 パプロ・シグレル (piano) 〃 鬼怒無

月 (guitar) 〃 北村聡 (bandoneon) 〃 西

嶋徹 (double bass) 〃 ヤヒロトモヒロ (percussion) 〃 熊谷和徳 (tap dance)

③ 渋澤久美 クリスマスパイプオルガンコンサート

期日 十二月四日

会場 白石市文化体育活動センター

演目 J. クラーク・トランペット・ヴォラン

タリー、J. S. バッハ：「目覚めよと

呼ぶ声が聞こえ」 BWV645 他

出演 渋澤久美 (パイプオルガン) 〃 小野なおみ (パイプオルガン)

④ 陸上自衛隊東北方面音楽隊コンサート2021

期日 十二月二五日

会場 多賀城市民会館 大ホール

曲目 行進曲「雷神」、そりすべり他

出演 陸上自衛隊東北方面音楽隊

⑤ しおがま・みんなのコンサート Vol. 2

期日 令和四年一月二十二日

会場 塩竈市遊ホール

曲目 塩竈市民歌、私のお気に入り、紅蓮華、炎、星に願いを他

出演 大浦智弘 (指揮)、三浦梓 (ソプラノ) 〃

朗読)、斎藤めぐみ (チェロ)、伊藤亜紀 (ピアノ)、伏木卓也 (朗読)

(2) 参加する機会の提供

① みやぎアートファミリアの日々子どもが主役のワークショップ

クシヨップ

期日 九月二十六日、十月十七日、十月二十四日

会場 東京エレクトロンホール宮城 会議室棟

講師 合同会社メリーメリークリスマスランド、

Botanical People 〃 佐野美里
対象 幼児から大人まで

(3) 文化芸術に係る情報の収集及び提供

① ホームページの管理運営

ホームページ等を活用し、県民に文化施設、文化団

体の状況及びその催事等の情報を提供した。

(4) 文化芸術活動に係る人材の育成及び体験機会の提供

① 文化芸術ボランティア育成事業

福島県沖地震の被害により鑑賞事業が実施できないため、参加者予定者に会館の被害の状況や新型コロナウイルスウィルス感染拡大の防止対策等について情報提供した。

② 笑いの芸術 野村万作・萬齋 狂言公演 プレゼミナー

期 日 十二月六日

会 場 東京エレクトロンホール宮城 六〇一会議室

講 師 石田 幸雄

内 容 狂言公演のみどころを解説、基本的な演技の体験

③ 芸術銀河アウトリーチ市町村事業

期 日 十月十二日～令和四年三月十四日

会 場 県内小中学校他

講 師 中川賢一（ピアノ）、荒川洋（フルート）、山形交響楽団 弦楽三重奏他

④ 芸術銀河アウトリーチ普及事業

期 日 十一月一日～令和四年一月三十一日

会 場 登米市立登米小学校他、県内の小中学校及び福祉施設十六ヶ所

出 演 ムジカノヴァ、櫻井希、田原さえ マリンピア 他

内 容 生の芸術に触れる機会が少ない児童・生徒に、鑑賞の機会を提供するいわゆる「アウトリーチ活動」として実施したものである。

(5) 文化芸術の振興及び支援

① 第四十五回東北現代工芸美術展（六月四日～六月九日）

日 せんだいメディアテーク 現代工芸美術家協会東北会と共催

② 第四十八回宮城県おかあさん合唱祭（十一月九日）

日 立システムズホール仙台 宮城県おかあさん合唱連盟と共催

③ 第七十二回全日本合唱コンクール宮城県大会（八月二十八日～二十九日）

宮城県合唱連盟と共催

④ 2021仙台オペラ協会第四十五回記念公演「魔笛」（九月五日）

宮城県民会館 仙台オペラ協会と共催

⑤ 第二十四回みやぎ県民文化祭（十一月三日～四日）

石巻市複合文化施設 宮城県文化協会連絡協議会と共催

⑥ 第五十八回宮城県芸術祭（九月二十五日～三月十三日）
日 せんだいメディアアテーク他、宮城県芸術協会と共催

⑦ 第二回社のみやこ工芸展（十月二十八日～十一月一日）
日 東北福祉大学仙台駅東口キャンパス「TFUギャラリー Mini Mori」 河北文化事業団と共催

⑧ 第六十七回松島芭蕉祭並びに全国俳句大会（十一月十四日）
松島町瑞巖寺本堂他 宮城県俳句協会と共催

(6) 文化芸術活動支援事業

① 文化団体等支援事業 五件（上期三件、下期二件）（三月二十日現在）

② 文化団体等人材育成支援事業 一件（上期〇件、下期一件）（三月二十日現在）

③ 文化団体等地域連携支援事業 一件（上期一件、下期〇件）（三月二十日現在）

④ 名義後援事業

(7) 文化芸術活動に係る国際交流の推進及び支援

① 文化団体海外公演支援事業 〇件（上期〇件、下期〇件）（三月二十日現在）

(8) 東京エレクトロンホール宮城管理運営業務

① 会館全体の管理運営。施設の使用許可申請の許可並びに利用料金の徴収・収納他

② （公社）全国公立文化施設協会、同東北支部、宮城県公立文化施設協議会に関する業務

四 (公財) 慶長遣欧使節船協会

(平成四年一月二十二日設立) 代表理事 一力 雅彦

1 ミュージアム管理事業

宮城県から受託するミュージアムの維持管理のためのメンテナンス、来館者の確保などの管理運営のほか、資料展示などに当たっては、法人の所有する展示物や学芸員等による研究成果の有効活用を努め、博物館相当施設としての機能充実を図った。なお、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として、緊急事態宣言発令に伴う施設の臨時休館を実施(令和三年八月二十七日～九月十二日)し、再開後も一部コンテンツの中止・制限等を実施しながら、状況に応じて柔軟な管理・運営を行った。

2 復元船管理事業

老朽化に直面していた復元船については、令和三年九月六日の観覧終了まで、可能な限り船体の維持管理を行った。解体作業開始後は、宮城県や解体担当業者と協議を重ねながら、現場作業の連絡調整、復元船ビルジポンプやドック水レイクリフターを始めとした機器管理の引継ぎ、指導、状況の記録、視察対応等に当たった。

3 企画事業

年間を通じて幅広い世代の来館者に満足していただけるよう、「企画展示事業」「船舶文化事業」「誘客事業」等のソフト事業を企画したが、昨年より引き続き新型コロナウイルス感染症のまん延が続いており、各事業の中止・延期または形態の変更を余儀なくされた。また、サン・ファン・パウティスタ復元船展示は終了となったが、その状況の中で可能な限り当船建造の意義を改めて確認し、発信するための各種文化事業を中心に実施した。また、サン・ファン友の会等の関係団体と積極的に連携を図りながら、地域の再生・文化振興に歴史・文化の分野から貢献できるように、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を図りながら企画事業の充実に努めた。

(1) 企画展「匠(たくみ)―復元船サン・ファン・パウティスタ号をつくったふたり―」

期間 四月二十三日～七月二十六日

会場 サン・ファン館 企画展示室

内容 帆船「日本丸」など建造も関わり、復元船「サン・ファン・パウティスタ」の設計を行った寶田直之助氏。古今東西の資料をもとに復元船を設計し、四〇〇年前の船の姿を蘇らせた同氏と、大棟梁として現場を指揮し、復元船を完成に導いた村上定一郎氏の業績を改めて

紹介するための企画展を開催した。

(2) GW来場者プレゼント

期間 五月一日～五月五日

会場 サン・ファン館 エントランス受付

内容 ゴールデンウィークに合わせて、各日、入館

券を購入された先着一〇〇名様に、オリジナルクリアファイルをプレゼントした。

(3) 第二回「サン・ファン号を未来へつなぐコンクール」

期間 七月上旬～令和四年一月十六日

会場 サン・ファン館 展望棟 エントランス・ロビー

内容 宮城県内の小中学生を対象に「絵画部門」「デザインマーク部門」の二部門からそれぞれのテーマに沿った作品を募集し、全応募作品二百七十二点を展示した。

※例年開催している絵画教室及び講師による絵画展は、新型コロナウイルス感染症の影響により開催を見送った。

(4) 復元船サン・ファン・パウティスタ号「メモリアルライトアップ」

期間 七月十七日～八月二十九日までの土日・祝日

会場 サン・ファン館

内容 「ライトアップで彩られた復元船サン・ファ

ン・パウティスタ号をもう一度見たい」と多くの皆様からのご要望を受け、これまでの復元船への感謝の想いを込めて開催した。

七月中の土日祝：午後七時頃～午後八時三十分頃まで点灯

八月中の土日祝：午後六時頃～午後八時三十分頃まで点灯

(5) 特別展「牡鹿半島・海と浜のトリビア10 (TEN)」

期間 九月十三日～十二月二十日

会場 サン・ファン館 企画展示室

内容 牡鹿半島の歴史や人々のくらし、生きものや言葉など資料とともに様々なテーマのトリビア（豆知識）として紹介し、地域の魅力を改めて確認する展示を行った。当初は九月一日から十一月二十九日開催の予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により会期を変更して実施した。

(6) サン・ファン館秋季シンポジウム「牡鹿半島・海と浜の民俗学」

期 日 九月十九日

内容 民俗学及び歴史の視点から牡鹿半島の魅力を

再び捉えなおすとともに、これらの要素を今

後生まれ変わるサン・ファン館へどう活かせるかについて話し合うシンポジウムを開催した。

※当初は九月十九日に有観客での開催を検討していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により無観客で収録したものを後日YouTubeにアップロードし公開を行った。

- (7) サン・ファン・バウティスタ出帆記念祭 オンライン
で出帆記念祭

期間 十月三十一日から公開

内容 新型コロナウイルス感染症が拡大している状況のため、今年度の出帆記念祭は「出帆記念文化祭」とし、延期されていた「第二十八回サン・ファン祭り」と合同でオンライン上での開催となった。

- ① 特別展「牡鹿半島・海と浜のトリビア10 (TEN)」見どころ紹介！

- ② シンポジウム「牡鹿半島・海と浜の民俗学」オンライン動画

- ③ 第二十八回サン・ファン祭り特別企画「オンラインでサン・ファン祭りくつなぐ」

- (8) サン・ファン・バウティスタパーク 冬のイルミネー

ション

期間 十一月一日～令和四年一月三十一日
会場 サン・ファン館

内容 解体業務開始のため復元船のイルミネーションは昨年で終了となったが、隣接するサン・ファン・バウティスタパークにてイルミネーションを実施した。

- (9) 第二十八回サン・ファン祭り（共催事業）

期日 十月三十一日

内容 復元船の進水を祝い、地域活性化を目指す目的で例年五月下旬に開催していたが、今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、秋季の「出帆記念文化祭」と合同でオンラインによる開催となった。各種関連動画をYouTubeで配信し、十月三十一日より常時閲覧可能とした。

- (10) ミニ企画展「牡鹿半島・海と浜の『続』トリビア10

(TEN)」

期日 令和四年二月二十三日～五月三十日

内容 シンポジウム「牡鹿半島・海と浜の民俗学」の内容を十の「トリビア」として再構成し、資料とともに展示を行った。

令和三年度 芸術選奨

●美術（洋画）



あびこ 文平
安彦 文平

昭和四十四年生まれ。
大学在籍時から学内の賞を幾つも獲得するなど、早くからその才能を認められてきた。平成十四年に青木繁記念大賞展わだつみ賞、平成二十二・二十六年に前田寛治大賞展佳作第一席などの受賞を果たしたほか、「自然が作り出すかたち」展の開催など、個展やグループ展で写真絵画家として活躍している。

また、写真絵画専門美術館であるホキ美術館に氏の作品がコレクションされるなど、身近にある自然の様を独自の視点と緻密な筆致で描き出す氏の作風は高く評価されている。

令和二年に開催された「超写真絵画の襲来」展では、出品作が高め合いながら写真作品を展開しており、高い評価を得た。また、大学での指導の傍ら、長年、県民会館や画装での講習会を通じて洋画の普及にも尽力している。

現在は、宮城県芸術協会の運営委員も務めており、大学教育等を通して県の芸術活動を盛り上げていくけん引役として今後の更なる活躍が期待される。

●美術（工芸）



むらやま 耕二
村山 耕二

昭和四十二年生まれ。

太白区秋保に工房を構え、世界各地の砂を使いその微妙に異なるガラスの色を作風に生かしてきたガラス作家。宮城県芸術祭工芸展では平成十三年宮城県芸術祭賞や平成二十一年河北新報社賞などを受賞し、国展でも毎回入賞するなど高い評価を得ている。平成二十五年には、かつて仙台城下で制作されていた「仙台ガラス」を再現した作品が2013年度グッドデザイン賞を受賞している。

令和二年度は、石巻市雄勝地区の雄勝石の廃棄粉末を溶かした「雄勝ガラス」を発表し、2020年度グッドデザイン賞を受賞した。このことは、文化芸術だけではなく産業界にとっても非常に期待が持てる話題であった。

氏は、その確かな技術をもって文化芸術への寄与だけでなく教育活動や社会活動に積極的に関わっており、その活動と成果は顕著なものがある。

今後も新しい工芸の理念と技術をもって、各地の土壌をガラス化する研究を継続し、新たな作品を制作されることを期待する。

●美術（書）



おおた
太田 蓮紅
れんこう

昭和二十四年生まれ。

大内魯邦氏に師事。毎日書道展や書道芸術院展、宮城県芸術祭書道展等に出品し、受賞実績を重ねながら、書作家として自らの世界観をもって探求を怠らず常に意欲的で独創性に富んだ作品を発表している。

また、書道芸術院評議員や宮城県芸術協会理事などの役員を歴任するほか、毎日書道展東北仙台展実行委員長や河北書道展運営委員など、本県をはじめ、全国の前衛書部の中心として活躍している。

令和二年度は、第五十七回宮城県芸術祭書道展、第六十七回河北書道展、第七十四回書道芸術院展、第五十二回現代女流書百人展に作品を発表したほか、令和三年一月には氏が主催する第十一回蓮紅社書展を開催するなど精力的に活動を行った。

今後書家として創作活動に邁進されると共に、情熱をもって前衛書の次代を担う書家を育成していくことが望まれる。

●美術（写真）



ふくしま
福島 隆嗣
りょうじ

昭和三十六年生まれ。

毎年挑戦的に個展やグループ展で作品を発表し続けており、個展は平成十六年の「反戦の表現」から十二回を数える。

令和三年一月に開催した個展「E:3」は、冬の津軽鉄道に乗って撮った写真で、列車で移動することでファインダーに現れた様々な出会いを作品にしている。

氏は、撮るといふよりファインダー越しに現れる未知の世界というものに気づいて反応して捉えることに優れている写真家と言える。

また、氏は言葉を多用するが、それは写真の説明ではなく、写真に音階のような抑揚を与える譜面のような効果を生み出している。

氏が顧問を務める高校写真部は、民間ギャラリーで卒展を開催するなど、その活動と作品は全国でも高い評価を得ており、その後も作品を発表する作家が育つなど、氏は後進の育成にも精力的に取り組んでいる。

今後はより自由な立場で新たな作品の制作・発表を行い、美術や写真に刺激を与える存在でいて貰いたい。

●演劇



劇団^{げくだん} どんちようの会^{かい}

昭和六十一年結成。
結成以降、登米市を活動拠点として毎年公演を行っている。様々な職業の二十代から六十代までの幅広い年齢層で構成されたメンバーが、演劇文化を根付かせようと、地域ならではの活動を継続して行っていることが高く評価される。

令和二年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により活動の自粛を余儀なくされたが、ラジオドラマ「ラジオ小さな劇場」を制作し、FM放送局で放送を行った。ラジオ放送は、見えないラジオに演技と演出効果加わることで聴かせる効果を生み出したと好評を得た。地域の放送局とそこで続けられてきた演劇公演が結びついて新たなスタイルが生まれ、感染終息後も続けられる新たなレパートリーとなった。

今後も学校公演等、地域に密着した公演活動を継続し、様々な世代に演劇の素晴らしさを伝え、演劇を通じて地域の発展に寄与されることを期待する。

芸術選奨新人賞

●美術（彫刻）



菊池^{きくち} 聡太郎^{さとうたろう}

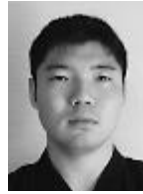
平成五年生まれ。

大学院で都市・建築学を学びながら美術を考え個展等を開催してきた。インドネシア留学等で得た様々な経験を通じて、図や絵、写真、建築素材などを用いた、身の回りの生活やそれを取りまく風景についての作品を発表し、総合芸術ともいえる氏の枠にとられない芸術実践が宮城の美術シーンに大いなる刺激をもたらした。

令和三年二月に開催された若手アーティスト支援プログラム Voyage・二人展では、テーマの「風景の練習・Practicing Landscape」をもとに構成されたインスタレーションの展示を行い、好評を博した。

柔軟な思考が固まることなく現在の表現活動を更に突き進み、今後も優れた作品を発表されることを期待させるだけではなく、美術のみならず、学んできた建築分野での成果も見てみたいと思わせる美術作家である。

●文芸



浅川 芳直
あきかわ よしなお

平成四年生まれ。
早くから俳誌「駒草」に参加し俳句を発表してきた、宮城県はもとより東北、そして全国の俳壇から若手俳人として注目されている俳人の一人である。

これまで、俳句総合誌等への俳句や論評などの執筆を精力的に行う傍ら、平成二十九年に東北の若手俳人の創作発表の場として「むじな」を創刊した。

令和二年度は、東京四季出版主催の第八回俳句四季新人賞に選ばれたほか、俳誌に新作俳句の発表を行った。十一月に発刊した通巻第四号となる「むじな」は、作品だけではなく、座談会や作品論などといった多彩な記事を収録し、充実した内容の一冊となった。また、宮城県俳句協会の会報に「宮城県俳句史」を連載し、文芸家としても非常に力のあるところを見せている。

俳句表現はもとより、「むじな」の発行を通じて、宮城県だけではなく東北・全国の俳壇に新しい風を吹かせてくれるよう、一層の活躍を期待したい。

●音楽



photo by Shoichi YABUTA

會田 瑞樹
あいた ずき

昭和六十三年生まれ。
打楽器のための新しいレパートリーの発展を中心に捉え、新曲の委嘱を続け、これまでに三百作品以上の新作を初演するなど、意欲的な活動を行っている。

令和二年度は、十月にリトアニアで行われた聖クリストファー室内合奏団特別演奏会においてソリストとして映像出演し、新作協奏曲初演等を行い大きな反響を呼んだ。十一月の東京オペラシティ財団「B↓C會田瑞樹パーカッションソロリサイタル」では、ヴィブラフォンを中心に多様な打楽器のための演奏会を行い、独奏楽器としての打楽器の可能性を示した。同月には氏の四枚目となるアルバムをリリースし、馴染み深い名曲を抒情豊かにまた斬新にアレンジした一枚となった。また、三月には大阪府から令和二年度大阪文化祭奨励賞が贈呈された。

今後も、演奏、作曲、プロデュースなどの幅広い分野で、県内は勿論、広く国内外での活躍と、打楽器のための新しい楽曲を開拓し、打楽器界の更なる飛躍に貢献していくことを期待したい。

● 舞踊



photo by Rahi Rezvani

刈谷 まどか
田香

平成五年生まれ。五歳でクラシックバレエを始める。高校在学時に米国のコンテスタトで銀賞を受賞しドイツに留学した後、スイスのバレエ団に入団、その後現在のNDT（ネザーランド・ダンス・シアター）に移籍した。令和元年にはNDTダンサーとして日本公演で出演を果たすなど、国際的に活躍している。

ダンサーとして、クラシックバレエに加えモダンバレエにも挑戦しており、自らの感性を磨きながら表現の幅を広げていくことに意欲的に取り組んでいる。

令和二年度は、ダンスクリエーション映像プロジェクトへの出演や、NDTダンサーが主催するチャリティ公演に参加するなど配信による活動を行った。また、オランダのフェスティバルプログラムにおいて自身の振付作品を発表し、配信により世界の人々に舞踊の魅力を与える活動を行っている。

洋舞ダンサーとして、振付家として今後も意欲を持って活動を行い、さまざまなコラボレーションに果敢に挑戦し、活躍の場を広げていくことを期待する。

● メディア芸術



我妻 和樹

昭和六十年生まれ。

大学在籍時から民俗学の研究の一環として映像制作活動に取り組み、その延長上で震災前の南三陸町波伝谷地区を描いた「波伝谷に生きる人びと」を平成二十五年に発表。その後同作品が、ぴあフィルムフェスティバルPFFアワード2014で日本映画ペンクラブ賞に選ばれた。平成二十九年には、震災後の続編「願いと揺らぎ」が、山形国際ドキュメンタリー映画祭2017においてインターナショナル・コンペティション部門で入選する快挙を成し遂げた。両作品は劇場公開もされている。

令和三年三月には、「千古里の空とマドレーヌ」を発表し、次世代映画ショーケース2021上映作品に選ばれている。東日本大震災を契機とした映画制作は多々あるが、県内の地域に焦点を合わせたものは多くはなく、またこれだけ継続しているのも氏が宮城に育ち学んだことが大きいと考えられ、今後も新たな作品の制作が期待される。

また、「みやぎシネマクラドル」を主催するなど県内の映像作家と市民の交流にも力を入れていることから、継続して宮城の映像文化の振興に貢献していつて欲しい。

宮城県芸術年鑑

第五十一卷

令和四年四月一日発行

限定六〇〇部

編集・発行

宮城県環境生活部消費生活・文化課

仙台市青葉区本町三丁目八番一号

〒九八〇―八五七〇

電話 〇二二―二二二―二五二七(直通)

この芸術年鑑は六〇〇部作成し、一部当たりの印刷単価は九一六・三円です。